

カーピシー「ガンダーラ史研究

桑山正進

桑山

前 言

佛教の傳播は、インド内部においてはインド人によりインドの風土習慣の中でおこなわれたが、インドから外界へ出る場合は、インドそのままの形ではなかった。新しい姿に化粧し、衣裳をかえて出たのである。そのような外出の手助けをしたのは、インドの外からやってきた人たちであり、かいらに刺戟させて外出の準備をした人たちであり、化粧をし

衣をかえた場所はインドの玄關であった。中央アジアが佛教を共有できる姿にまで化粧したとき、インドから佛教は中央アジアへ出た。そのような化粧の場が、北西インドであり、玄奘を以て邊裔の曲俗地帯だと言わしめた地域にほかなりない。

カーピシーヤガンダーラ、いわばヒンドゥークシユ南麓のカーブル河流域がインダスとアームールダリヤーとの中間にあるように、この地域に對する歴史研究もまたインド史と中

央アジア史とのはずまにおかれ、そのどちらの研究者の視界からはずれていく。中央アジアを河川が内陸に流入する地域だとみよならば、カーブル河流域が中央アジアでないことはたしかにそうである。一方、そこはインドの一隅にありながら、インド文化の傳統とは縁がないとは言えずとも、よほど玄奘がうすい土地柄である。即ち、歴史が語るように古來この地方はアケメネスの東限であり、アレクサンドロスの版圖の東限であり、マウリ

ヤの西限であると同時に、ヒンドウイクシユ
山陰に興起した游牧勢力の南限であり、東西
方向と南北方向との歴史の動向をまろに引き
つけた地域である。インドにありながら非イ
ンドの政治・文化を蒙った地域であり、アジ
ア史においていちぢるしく動的な運動の場と
あり、現代にまでこの傾向は續いている。こ
のような地域において佛教は中央アジアへ出
る準備をおこなない、中央アジア、ひいては中
國における佛教の根源となった。佛教がアジ

ア史に及ぼした大きな刺戟と波及効果を考へ
るとき、カリピシーガンダーラ地域の果し
た役割の實態を把握することは重大な意味を
もっている。この地域がさういった意味で扇
の要としての地位をになつていたことを強調
すべきまでもなからう。

本論はその多くを従来現地資料でないために
忌避さ小てきた漢文資料に依據していった。
わけでも行歴僧傳はこ小を注意深く活性化す
るならば、實に雄辯にこの地方の歴史・佛教

を語り要素をひそませている。遠く一九世紀から今世紀初めにかけて、とくにフランス東洋學はこの資料に注目したが、爾來佛敎史家も歴史の研究者も、あるいは考古學によって立ついとびともこれを忘却してしまった。近年當時と比較すべからざる程度に増加した考古資料の分析と綜合の上に立って、再び現段階のあたりしい光をこれに當てし必要がある。そうして見えてきたものが本論の骨子となつてゐる。すなわち、第一章では從來カシユ

ミールのこととして顧みられることのなかつた「罽賓」問題を軸に、インド佛敎史におけるガンダラーの位置を論じ、ガンダラーをガンダラーたりしめた中央アジアとこの地をむすぶ交通路を設定した。第二章においては、この交通路が六世紀中葉にエフタル勢力の分解にともなつて廢絶し、ためにガンダラーの位置が低下し、再び興起するに至りなくなつた様相をのべた。六世紀中葉を境に歴史の舞臺はあらたな交通路に移る。新路開設にともなつ

て、ガンダーラにかわってカーピシー、そしてパルミヤーンが新興する。六世紀中葉に歴史の轉換期を設定することができた。この地方の歴史の多方面にわたる側面がこの轉換期を考慮して検討さなければならぬ。カーピシーを主軸とする歴史の様相は六世紀中葉以後の時代であり、第三章と第五章はこれに専らあてている。従来カーピシーについてはアラブ・イスラーム資料にのみよっていたので王朝の編年はもとより、諸文化現象も整理

すらおこなわれない。本論においてはじめてカーピシー史の枠組の方向が示されている。第四章はカーピシーの中心であった王都の同定にむけていこうが、その過程でヒンドゥー・クシエ南北におけるこの時代の文化を考古学の知見から示した。第六章はガンダーラにかわって生じたカーピシーの時代についてその宗教をガンダーラ佛教を顧慮しつつ考古学の成果に立ってのべ、さらに従来年代観の不安定であったパルミヤーン大佛造立問題を

六世紀の轉換期の中へ位置づけた。

本論は當初二部構成を考え、一部においてガンダラー・タキシラを中心に佛教寺院の編年をとり扱う豫定であった。ただ第一章以下の本來二部たすべき部分が豫想外に長文となったため、当面割愛せざるをえなくなった。そこで次善としてその要點をとりよめて序章として、巡歴僧の目的地・出發地たるガンダラーを文獻からのみ扱った第一章に前置してその現實の佛寺の姿を示すことにした。なお

トハリスターンにおけるエフタル、テュルクとその城邑は、トハリスターンに南接するガンダラー・カピシー地域をとりあげた本論文の行論上の必要から、章外に附論として、参考に供することとした。カール河流域を論じて、六世紀以後カピシーとともに北西インドに生起したカシユミールを併論しないのは片手おちの観なきにも非ずであるが、これは筆者將來の課題として今後に遺す始末である。

カーピシー・ガンダーラ史研究

目次

前 言

挿圖目次

序 章 ガンダーラ・タキシラにおける佛寺の様相 1

第一章 五世紀以前におけるガンダーラの役割 79

第一節 罽賓を基點とする佛教僧の往來 79

第二節 罽賓と佛鉢 115

第三節 ガンダーラとカラコルム西脈道 201

第四節 行歴僧行程の西限 那竭國 232

第五節 佛影とその波及 263

第二章 北西インドにおける六世紀の意義 343

第一節 宋雲・慧生行程の検討 343

第二節 六世紀宋雲以後の巡歴僧 419

第三節 ヒンドゥークシユ西足道の登場 479

第四節 エフタルとガンダーラ 520

第五節 エフタルの盛衰と交通路の變化 561

第六節 佛鉢の消失 599

第七節 ナイランダールとヴァラビー 625

第三章

隋代のカーピシー

665

第一節

隋書に漕國はザブリスターンか

665

第二節

隋代のカーピシー

710

第四章

カーピシー國大都會とベグラーム

731

第一節

迦畢試國大都會

731

第二節

圓形稜堡と圓形印紋

752

第三節

圓形稜堡の分布

774

第四節

方形稜堡の分布

822

第五節

ヒンドウークシユ北麓における土器の轉換期

848

第六節

ヒンドウークシユ南麓における圓形印紋の分

884

布と圓形稜堡

第五章

七、八世紀のカーピシー

920

第一節

七世紀前半における支配者とその勢力圏

928

第二節

七世紀における對中國關係

954

(一) 朝貢

(二) 修鮮都督府

第三節

七世紀後半のカーピシー

987

第四節

八世紀前半のカーピシー

1020

(一) 對謝颺關係

(二) 慧超の記録

(三) 悟

空へ法界一の記録

第五節

王統とその交替

1062

第六章 カルピシーガンダラにおける佛教とヒンドゥー教

第一節 カルピシーにおける聖迹の分布

第二節 佛教事情

第三節 葱嶺山と阿路孫山と禰那呬羅山

第四節 大理石ヒンドゥー神像の出現(一)

彫像資料

第五節 大理石ヒンドゥー神像の出現(二)

細部表現の検討 冠中の表現

ヒンドゥー圖像の波及

第六節 バルミヤーン大佛の成立

1127

1130

1165

1221

1271

1337

1417

注 序 章

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

第六章

附論

トハリスターンにおけるエフタル、テルクとその城邑

並に注

1614

1568

1550

1523

1518

1492

1471

1454

插图目次

1.	タキシラ地圖
2.	タキシラ第三都市第三期プランとストウパー
3.	方形基壇(1Fストウパー)平面・立面圖
4.	ダルマラジカー大塔の増廣
5.	アライ「ハ」ヌム平面圖
6.	柱礎 アライ「ハ」ヌム、ドウルマンテへ、チャカラク「テ」へ
7.	タキシラの神殿
8.	アライ「ハ」ヌム 柱頭
9.	車輪狀構造の墓廟建築

- 10 タキシラ佛寺の變遷
- 11 タキシラ佛寺の基本セット(クナラ)
- 12 ジャウリアイン平面圖(最終段階)
- 13 ガンダラ 都市と佛迹
- 14 ジャマールガリ平面圖
- 15 タフテッパリー平面圖
- 16 タレリリ塔院(D區)
- 17 メハサング塔院
- 18 シャーシキテリー平面圖

- 19 ブトカラ平面圖
- 20 インド・中央アジア要圖
- 21 二商主奉鉢密圖(バシャーワル博物館)
- 22 カラコルム・ヒンドウクシユ交通路圖
- 23 四天王奉鉢圖(ライホール博物館)
- 24 佛鉢供養圖
- 25 四一五世紀佛僧往來ルート
- 26 玄奘によるウツグタイナの聖迹
- 27 ジアララバード遺迹分布圖

28 宋雲・慧生ルート

29 『西域圖記』南道の葱嶺以西路・ジナグプタ、ダルマグ
プタ経路

30 玄奘往還路

31 ガンダーラ、カシュミール、シアルコトの位置

32 サルサーン、エフタル、サマルカンドの朝貢

33 迦畢試とその周辺

34 『大唐西域記』に記されたカールブル河流域

35 圓形稜堡の建築

36 テペハスカンダル平面圖

37 ショトラク平面圖

38 コフナ・マスジッド平面圖

39 スルフコタル、ティルバルジン平面圖

40 印紋

41 ドウルマン・チャカラクの土器

42 ヒンドウークシユ北麓の土器遷移(表)

43 ヒンドウークシユ南麓の圓圈印紋

44 玄奘の就學狀況(表)

45 ハイルハリーナ 平面・断面圖

46 大理石像 (1)

47 大理石像 (2)

48 大理石像 (3)

49 大理石像 (4)

50 ウマリーマヘリシエヴァラ 並坐像

51 大理石像細部表現

52 冠中の表現

53 冠中の表現と衣紋

54 バリミヤーン 溪谷

55 バリミヤーン 西大佛

56 バリミヤーン 東大佛

57 男女神並坐像

58 タバササルダールの塑像

59 涅槃像の位置

序章

ガンダーラタキシラにおける佛寺の様相

佛陀のおしえは本来出家の主導によってい
といとの間にひろまり、支持をうけたとおも
われがちである。たしかに出家の唱導は重要
な宗教活動である。しかし、歴史に生きた佛
陀の、現実の生活空間をはるかにこえた、廣
大な地域へひろまるには、別の動機が必要で
あった。パウロと異なって佛教が諸民族
に受容さる宗教へと発展すべく性格をとな
えていたという内因ではない。外因、すなわ

ち政治勢力というはなはだしく世俗の動機で
ある。出家は佛陀のおしえを理解し、解釋し、
實踐し、抽象化へむかう。一方世俗の人は高
度な抽象とは無縁であり、具體がよりどころ
となる。対象を理解しようとするとき、目に
見えたり、手で触れうるものの助けがあれば
容易であるように、在俗信者には佛陀そのも
のが必要である。佛陀が火葬さして骨灰が残
ると、骨灰がよりどころとなる。骨灰の分與
は八國の支配者間で軍勢を斗っておこなわれ

んとした。八國の支配者は各自骨灰をもち歸り、佛塔が造られた。地下に湧水のある場所を求め、そこに木柱を立て、土饅頭でこれを支えた。舍利は容器にいれ、土饅頭の中においた。人々は木柱を時計廻りにまわる儀禮をおこなった。木柱に犠牲を捧げないだこともあった。時計廻りはすなわち日のめぐりである。木柱は地上と天上とをつなぐ中心柱であり、宇宙軸であった。⁽¹⁾舍利は地山に小孔をうがち、そこに置かれたり、あるいは地山よりずつと

高いところまで土を叩きかためて木柱を固定し、そのそばに置いた。どんな場合でも木柱直下におくことはない。このようにして成った佛塔の初現形態は、ひとびとのもっていた習俗の中へ舍利をとりこんだ形である。かゝる習俗の中へ佛陀は習合されたのである。⁽²⁾アシヨリカは紀元前三世紀中ごろにこのよゝな八塔のうち七塔を破壊して舍利をとり出し、八萬四千に分骨し、その数だけの佛塔をかゝるの廣い領域に建立したといふ。佛塔の建

立とともに、いわゆるアシヨールカ王柱も建てた。佛塔と柱とが分離したことをこの事實は示す。佛塔は佛院自身の記念塔にこのときなつたのである。いざハにしても八萬四千なる巨大な數量は實數ではなからうが、この傳説は、アシヨールカが佛塔を政治にとりこみ、廣大な領域の支配の要としたことを示している。印度亞大陸の北西部たるガンダラやタキシラに、後世の改修を経たり、あるいは既にありはてしていたが、アシヨールカ所建にさ

かのぼる佛塔が七世紀はじめにも數多くのついていた。玄奘が記すところである。⁽³⁾タキシラのピール丘にて出土したチユナル産砂岩の小製品から、マーシヤルはアシヨールカ王柱がここに存在した可能性に言及する。

アシヨールカ以後、北西インドにおける佛敎のありさまは、紀元前二世紀中ごろにメナンドロスがナーガセーナと佛敎について對論したことがわかつているにすぎない。少くとも遺構や遺物の上で佛敎の存在がはっきり

してくるのは、タキシラでいえばシルカポ（
 タキシラ第三都市）の末期に近いころである。
 バクトリアからギリシア人が入ってきて建設
 したと稱される土壘にかこまれた町がある。
 今、カツチヤリコトとよばれるが、ビール丘
 時代をタキシラの第一都市の時代とすると、
 これは第二都市に當る。ついで紀元前後の一
 〇〇年ほどの間に、サカ族とかゴンドフア
 レス朝バルタイアがタキシラをおさえたとき、
 第一都市の南半から南へハタイアール丘へか

圖 1

けて、方形綾堡をつけた石積みの中壁が建設
 され、北門から南進する中央大路を軸に相稱
 型の町割りがつくりられた。シルカポとよば
 るタキシラ第三都市の時代である。ウイラ
 ーヒゴーシユによれば、第三都市には四つの
 時期がある。⁽⁴⁾ そのうちでタキシラ最初とおも
 われる佛教建築があつたのは、下から二番目
 の第二期、カハラの編年に従えば紀元後一世
 紀前半である。石灰岩の切石を組んだ小さい
 佛塔である。次の時代、第三期に中央大路に

圖 2

面して六基のストウパーが建立された。この中にはジャイナのものも含まれるらしい。

佛塔といふものは本来の形制では、圓形基壇の上に半球型の伏鉢とよばれるものをもてその姿であった。ところがタキシラ第三都市の第三期に出現した佛塔は、ごく小敷を除いて基壇を方形にしたものばかりであった。この基壇の上に圓筒型をもて、その上に伏鉢をもてその型式である。このような形姿の佛塔は、第三期、つまりゴリシユのタキシラ編年によ

れば一世紀後半から二世紀初頭にいたる五〇年ころ、あるいはそれ以前のインドにまつたくなかった型式である。だからこのような方の組み合わせ佛塔はタキシラにおいてこのころ創案されたものである。方形基壇といつても、単に石を組んで方形の壇にしたものではない。基壇には凹（スコテーパー）と凸（トリルス）とを組み合わせた剣型、頂上は軒蛇腹、そしてその間の丈高い腰壁は壁柱をまつて飾る。壁柱の柱頭はアカンサスの葉

裝飾を刻んでゐる。ソババカレコロマ風
 建築の風態を襲ふ點、特異なものがある。1
 A、3A、1D、1F、1G、1C、1Eと
 いった市街の各ブロックで一基づつ檢出され
 1。

1Aストウパーの基壇は一〇メートル平方
 で、割型基壇部の上に各面七本の壁柱をたて
 て柱間六間とし、内積はきり出したままで加
 工調整のない碎石の乱石積⁽⁵⁾。外面は、多孔質
 沈澱石灰岩（カンジュール）の方形切石をジ

ヨイントなりで組み上げたドライクメイソン
 リーである。その上から漆喰を塗り、外装と
 する。3Aのものは一・五メートル平方。内
 積、外面とも石灰岩碎石の乱石積であり、カ
 ンジュールは使わず、直接に漆喰を塗装した⁽⁶⁾
 1Fのストウパーは1Aと同式の石積法で、
 六・五メートルにハメートルの平面⁽⁷⁾。正面を
 除く三面は、中央にカンジュールを刻んだコ
 リント式の柱頭を支える圓柱、他は柱身を角
 形、柱頭を低平な梯形の桁型とし、柱間は四

圖 3

間である。正面は基壇上へのぼる階段があるが、階段突出部を除くと左右各二間で、まん中の柱を圓柱とする。突出部のコーナリーにも壁柱をたて、兩翼の壁柱も含めて柱身は角形であり、柱頭はすべて1Aと同式のコリント風を刻む。正面の柱間に、インド風の門・建物入口、そしてイギリスマ風の建物入口を浮彫りし、屋根に鳥とのせり点、他のストウパーに類例をみない。1Gストウパーは4メートルに4メートルの平面⁽⁸⁾。内積は石灰岩

碎石による亂石積。カンジュール切石装の外。柱間は四間。1A・1Fと同式である。基礎の剣型上に直角型壁柱の柱身とのせ、軒も齒飾 *dentil cornice* はなく、玉飾 *reel-and-dead* とする點が、他の基壇と異なる。1Cのものより高く、また外面をダイアパリ積とし、四隅だけカンジュールを彫刻してつく⁽⁹⁾。1Eは1メートルに1メートルの平面。亂石積とダイアパリ積とを两用し、厚い漆喰をぬ

る。特色は内積の構成で、中心から各邊の中
 點に對して壁をわたして十文字と一、之れに
 よつてわかたれた區畫には對角線に壁をつく
 り、全體が八つの壁で菱形の中に十文字とつ
 ぐつたかっこうになつてい⁽¹⁰⁾。市街には方形
 基壇のストウーパーのほか、六ハメートルに
 四メートルといふ廣莊な寺域をつくり、中
 に馬蹄形平面の建物をおく1Dの寺迹がある。
 之の正面左右にも各一基の方形基壇のストウ
 ーパーがあつたりい。

このように第三期における方形基壇には、
 内積を亂石積、外面をカンジエール切石装と
 したものと、外面をガイアバーなイレガイア
 パーと亂石積とにしたものの、二種がある。
 ダルマウージカ大塔は石積法によつて五期
 に及ぶ改修・増廣があるが、その第二期では、
 第一期の亂石積の伏鉢の損傷をさきの二種の
 うちの後者で補修した。このとき、伏鉢は當
 初からあつた基臺の上に、中心から一六本の
 壁を放射状にきずき、上からみると車輪状の

構造にいたうえで、各放射壁のあいだを緊密な石積で充填している。こうしてできた改修後の伏鉢外面がダイアパー積であったことは、西側の立ち上り部分に残存した壁面から認められている⁽¹¹⁾。

大塔の周りに多くの小塔やスタンバがある。そのうちには、内積を石灰岩碎石の亂石積、外面をカンジユール切石装としたものがあり、第三都市第三期の右にのべたストウーパと同じ式のものである。こゝにはダイアパー積の小

圖4

塔によって一部がおおわれ、建立の前後関係がみとめられる。カンジユール装のもののみをとり出してみると、そのは大塔に近接してほぼ等しい間隔で建てられたことが判る。大塔の第一期とも稱すべき塔院のプランが設定されるのである⁽¹²⁾。こゝによって、第三都市第三期の、亂石積を内積とし、カンジユールと外積とする方形基壇のストウーパは、大塔第一期と同時期であり、タキシラにおける最早期のストウーパと考えることができる。

ニハリカンジユール外装の方形基壇におき
 了壁柱は必ず一成の彫出であり、柱頭は低平
 な梯形につくり、少数はユリント式柱頭の風
 を襲う。低平な梯形柱頭に對應する柱身は角
 柱であり、ユリント式に對應する柱身は圓柱
 である。したがって壁柱二種をみるとき、こ
 のようなカンジユール石の上に漆喰を塗装し
 て仕上げられる外觀は、ユリント式の場合は
 コリント式に、梯形柱頭の場合はユリント式
 を豫想することばかりできない。ユリント式に柱

頭を完成させる場合は、芯となるカンジユール
 の彫刻からして既にアカンサス葉を粗く彫
 り出したからである。マーシヤルはタキシラ
 における最初期のストウリパに方形基壇が採
 用され、西方系壁柱や剣り型を導入した理由
 に、ヘレニズム影響を考へ、北西インドにお
 いてギリシア的アイテニアがインドのタキ
 壓倒するに至ったとす。そこでタキが豫想
 したヘレニズムの源泉は、タキシラたる北西
 インドに近接し、しかもタキに侵入するに至つ

たバクトリアのギリシア人の文化である。そこでマーシャルの豫想の當否を考え、ひいては特異なストウパー形態の由来を考えよう。バクトリアにおける建築とその北西インドに對する波及効果の優劣をとりあげる。

バクトリアといえはバルフであるが、バルフに關する知見はいまだミラージュのみままであり、そのままミラージュに終る可能性も高い。しかし、バクトリア全域に關する知見が増加するなかで、ユーフラチヤ河口の三角地點に位置するアイーハーヌムのもつ意味は大まきい。

都市中樞である行政區一群の建物に、プロピュロン、大列柱廊、多柱廣間がある。柱頭

から柱礎に至るまですべて白色泥灰質の石灰岩製である。プロピュロンは前後兩室とその通路、こゝろを中心にして對稱に配した小室群から成り、その南に一邊一〇〇メートルとこゝろ内庭がひりけ、周廊は列柱、プロピュロンに對面した南翼には、列柱の奥に一八柱で天井を支えた廣間を設ける。プロピュロン後室の正面は、壁端柱二本と圓柱二本とから成り柱間三間をつくり、柱礎は三重の方形礎盤上にトールスのみをおく形式で、一成彫出

圖5

である。柱頭はアカンサスと主とする擬コリント式である⁽¹³⁾。

列柱は東西兩翼が各二四本、南北兩翼が各三四本。南翼三一本の柱礎は原位置にあり、四部の浅く高いアツテイカ式である。東翼の柱礎は四部がさらに浅く高い。南翼の柱頭はプロピュロンと同式であった⁽¹⁴⁾。一八柱の間の柱礎はさらにアツテイカ式に近く、二つの凸部に四部をはさんだ形式である。柱頭はミレトス市會堂プロピュロン、アツテイカのオリユ

4 ヒ エ イ オ ン、ニサの柱頭の要素・構成に近
く、列柱廊やプロピユロンの柱頭よりはるか
に本来の Corinth 式に近いが、構成は緊密で
ない。(15)

こはりのほか、神殿や周廊で、アツテイカ
風柱礎、方形礎盤上に凸部圓座とおく柱礎が
出土して(16)。神殿では、最後から二回目の
改築のとき、奥室でニ基のアツテイカ風柱礎
がつかわわ、イオニア式木造柱頭が出土した。
この神殿の域内の南廊では、圓座をおく柱礎、

また北廊の堂宇のプロナオスではニ基のアツ
テイカ風柱礎が、またユークチヤ河寄りの住
居からもニ基のアツテイカ風柱礎が出土して
いる。(17) こにも石柱の出土はなかった。

アイトイハリスム4 廢絶は前五〇年というが、(18)
それ以後もこの地方で石灰岩による柱礎だけ
はつくられた。アイトイ中流域における多くの
の出土例が證明して(19)。後期になるとすで
にアイトイハリスムでも、柱身、柱頭を石で
つくらなくなった。スルブッコタルは、方形

稜堡つき城壁を丘の頂上からふもとにかけて
 長方形に配置し、丘頂平壇部の城壁内側に、
 同一形式で統一したアツテイカ風柱礎を並べ
 た列柱廊へもと六六本⁽²⁰⁾をつくる。列柱廊の
 中心に、ニメートルに三四メートルの大基
 壇をもうけ、その上に周廊つきの方形神殿を
 のせる。神殿中央には、泥灰質石灰岩切石組
 の四・七メートル平方の基臺がある。その四
 隅に、高さ六〇センチ、上面直径九〇センチ
 の巨大なアツテイカ式柱礎をすえ、神殿の内

壁には壁柱のためにつくった柱礎を嵌入して
 いる。神殿を支える大基壇腰壁は石灰岩切石
 で組み、アカンサス浮彫の方形柱頭・角柱・
 アツテイカ風柱礎の構成による壁柱を組みこ
 んでいる。大火災後の第二期スルフィックタル
 神殿は、第一期の床を埋め立て、あたりしい
 床に奥壁によせて柱礎四つをすえていた。
 デイルバールジンの神殿はスルフィックタル
 と同じくプランである。その創建のときペリ
 ステロスがあつた。トレンチ内でお土いたア

ツテイカ風の一柱礎から推定された。神殿を
佛寺に改めたときにも、正面にアツテイカ風
柱礎を並べた。また市壁内側の改修後にでき
た六室の前に一三基の礎石を置き、そのうち
五基がアツテイカ風で、他は石灰岩廢材や焼
煉瓦と利用したものであった。⁽²¹⁾

ドウルマンリテペ出土の八柱礎中三基は、
第六室の第四期床に配列してあったが、三基
ともこじなつた型式で、統一性がない。⁽²²⁾ 四基
は剣型が形式化し、凸凹とも曲率がほとん

圖6

Nos. 1~8

どない。もう一基は、圓座と基盤上にのせた
ものである。ドウルマンの柱礎は、礫石と共
伴し、石臼の下石として利用されたらしい。
ドウルマンの南、チヤカラリテペでも、第
二期の第一室出土の二柱礎は一六の覆とも
に、焼け落ちた梁材をうめ立てた軟土層の上
にあつた。⁽²³⁾ 一基は圓座型式のもの、一基はア
ツテイカ風のものであった。アームー以北、
ハルチヤヤン、カウリテペも柱礎のみを
柱身以上の出土をみなかつたところである。

圖6

(3), (4)

カラッテペのものは形式化したドウルマンの
柱礎に類似⁽²⁴⁾、ハルチヤヤンのものは主流は
圓座型式のもの。ここでは柱礎として使わ
ない⁽²⁵⁾。

バクトリア期のアーイハムでは、そ
の中樞部の建築はギリシアないし西方のヘレ
ニズム時代のものと同じく、柱頭から柱礎に
至るまで白色石灰岩でつくった。柱頭は、コ
リント式の系列にありながらも既に本来の形
式から逸脱し、セレウコス朝やパルティアに

おける形式がその間に介在していったようであ
る。柱礎は、圓座ものせり型式とアツタイカ
式にトールスとスコテイアともつ型式との
二種がある。前者はペルセポリスやパサルガ
ダエにおけるものの系列で、アケメネス式と
いつてよい。バクトリア地域ではおそらくア
ケメネス時代から西方系の建築文化に浴し、
バクトリア期に至り、パルティアないしセレ
ウコスからヘレニズム風の建築技術やその要
素が入ったようにみえよう。壯大な石造柱の建

築は、アライハリーヌムです。中樞地区以外ではおこなわれなくなった。しかし、クシヤン期までは柱のうち柱礎だけを石造とする伝統があった。ポストクシヤン期における柱礎の出土状況は、それがクシヤン期以前の建物から搬入されて再利用された事実を示唆し、この時代あらたに柱礎をつくることを停止したことを物語る。

バクトリア期からクシヤン期にかけて、バクトリア地方は西方系建築文化を二形式の實用の柱礎にのこしたのに対し、北西インド、タキシラカンガラー、いわゆるカルナル河流域においてそのような伝統はまったく感じられない。タキシラにおける後述の二つの建築はたしかに西方系の建築に依ったものであるが、この系譜を後代に相續した建築はなく、その細部、たとえば柱礎ひとつをとりあげて

みても、西方系の柱礎がタキシラ「ガンター」
ラにおける實用の建築に使われることはきわ
めて異例に屬する。よってこの地は、アイム
ー中流域の風土とは異なり、バクトリアのギ
リシア人、パルティアの支配にもかかわりず、
西方系の建築文化が實用の建物に受容されるも
せず、定着もしなかつたのである。

タキシラの、ジャンティールCとモフラ
「マリアラ」とはこの地方の建築史上はな
はだ異質なもの、あるいは一時の闖入者たる

存在にすぎないものである。この二つの建築

圖7

における柱頭がコリント系統ではなく、イオ
ニア式の列に屬することともまたアイムー中流
域と異なるところである。モフラ「マリアラ
ーンは長方形周壁中に二四メートルの長邊を
正面とする横長の建物をおく⁽²⁶⁾。前後二室と前
室左右の副室から成り、後室に二、前室に正
面も含め四の柱を立した。柱礎はアツタイカ
風佐平のものが砂岩。柱頭はイオニア式で、
柱身ともにカンジュール石製である。一方、

ジャンディールCは、短邊を正面にした長方形建物で、周壁の中に前・中・後の三室、中室・後室間にソリッドな構造物があった。⁽²⁷⁾灰色石灰岩の圓柱が周壁正面に二つと前室正面に二つあり、後室の正面は中央にせまい入口をいらいた石積壁でとざされ、柱はない。したがって柱は前室の壁端柱を含めて六柱で、どれもバイオニア式柱頭、アツティカ風の低い平な柱礎である。

このうーたタキシラの建築風土の中できわだ

つてみえるのが、壁柱で飾ったストウーパの方形基壇である。タキシラ第三都市の内にも外にも、西方系の建築のあとがみとめられ、いのに對し、ストウーパの基壇、そして後にはストウーパの圓胴部にまで西方系建築の要素がみなぎっていることは、きわだつた存在である。方形基壇の初現例にみる柱頭は、單なる梯形、柵形と、コリント風の二種であり、ジャンディールCやモフラマリアーラのイオニア式柱頭はない。

アームー河中流域でバクトリア期の柱頭は本来の型式からすでに逸脱して弱いが、あくまでもそれはユリント式の末席に居る。アームーハイヌム神殿出土のイオニア式木造柱頭があることから、柱礎以外の部分が知られていない柱をイオニア式だとみよともてきよかもしれないが、これはむづかしい。クシヤーン期になっても柱頭部は明らかでないが、壁柱の柱頭はみなユリント式の系列である。しかし、その柱頭は長方形の石灰岩切石にア

圖 8

カンサスも浮彫りたものであり、半丸彫りのコリント式柱頭ではない。タキシラの方形基壇の柱頭は、カンジエールの低平な梯型で、その上に厚く漆喰をぬってコリント風のアカンサスをあらわしたとは必ずしもいえない。後にストウパーを飾る柱頭はみなユリント風の形式化したものである。そのとき、芯をカンジエールでつくるときは必ずアカンサスを粗く彫っておく、片岩をつんで芯をつくるときもアカンサスの素地を

圖 3

つくつていゝ。―たがって初期方形基壇の柱頭のうち、梯型につくつたものはコリント風アカンサス裝飾をもたなかつたを考へらるゝ。タキシウ初現の壁柱がバクトリアの建築から直接學んだならば、柱頭はみなコリント風であつたはずである。

アーム―中流域の白色石灰岩は、直接そこに彩色を施すことが可能であり、アインッハ―ムではその例が―らゝていゝ。漆喰を上塗りする必要のないきめのこまかい石質であ

る。タキシウのカンジュール石は、切石組みにして、亂石積みにしても、その水はどいみても彫刻の核であり、素地であり、化粧塗りには避けられぬ。この相異は兩者の系統なし由来もある程度明確にするように思われる。すなわち、ストウツコ塗裝を不可避とするものとは無関係のものである。タキシウではストウ―パの最初期からストウツコが使われねばならなかつた。バクトリアからそのような技法は從來知られていない。

ガルマラージカー大塔の伏鉢の車輪状構造
 と原理上共通するのがE'ストウーパの基壇
 構造である。ジャラーラーハドのフイール
 ハーナ石窟寺院の丘の上にあるストウーパ
 もガルマラージカーと同じ技術により、八本
 の放射壁を築き、シャリージキデリーの
 大塔も放射壁をもつ。一般に小塔はもとより
 大塔も内核は単に石を積み上げていくことが
 通常の構築法であり、スワートのブトカラ大

塔がほとんど片岩だけで積んだのは稀例とい
 わねばならない。したがって車輪状構造は伏
 鉢の構造としては例外であり、ガルマラージ
 カーと規模の似たマニキヤラ大塔が通常の
 石積法に従ったことを考えれば、大規模な構
 造に對してタキニラガンダラでかならず
 しもとりわけ採用する必要にせまられる技
 術であったとは言えない。これはナীগアルジ
 ユナコンダのストウーパの車輪状構造にも通
 じよ。

ところが、車輪状構造は、ローマ世界においては大規模な構築の墳墓にとって必須なことであった。ローマにおいてエトルスクの大共同墓地に淵源がある大墳墓のうちで、とくに記念碑的なものは、多く石積あるいは煉瓦積の圓筒と築くが、とくにその内部も車輪のスポーク状に放射壁をつくった。⁽²⁹⁾その典型はアツピア道上にある一對の墳墓のうちの一とつであり、土壓による石室のつぶれ防止の役割ももち、放射壁は中心の圓筒室から放たれ

ている。牡大な例は前二八年に建設されたアウグストゥス皇帝廟であり、直径八四メートル。同心圓壁と放射壁とで構成され、間隙に墓室その他をもうけた。一三二年に建設がはじまるハドリアヌス帝廟も同じであるが、その構成は同心圓壁を加えてさらに複雑である。この記念碑的建造物はローマ帝國の擴大とともに西方はブリタニアに及び、エセツクス州ウエストマシー West Maresa 墓は、直径二〇メートルの圓形壁を、碎石を叩きかためた

上に、うすい煉瓦とモルタルで築き、中心に六角室をつくり、そこから六本の放射壁を放ち、外壁に一ニ本の扶壁を造り出している。⁽³⁰⁾このようにみると、北西インドにおける車輪状構造の伏鉢も、ナールガルジュナコン、塔の構造も、ローマに発生した同種の建築技術が東と西とに傳播したものと考えられる。ナールガルジュナコンダのストウーパは直径がその構造でなくてはならぬほど大きくなく、中にはマンジをつくった構造もあり、技術が

形式化した傾向が強い。ナール北西インドのものは伏鉢も高く、堅固の度を加えるこの構造はよりローマ本来のものに近いようにみえる。

ストウーパ方形基壇は、軒蛇腹、基部刻り型、壁柱といたった西方建築の性格をもたえ、方形の基台といふ發想にこれより要素がここでも組み合わさると考えることはできない。方形基壇その自身が、一個のすでに完成した原形であった。その原形を特定の遺物や遺構に

求めることはできないが、冢形墓のじとき、あるいは祭壇のじとき、なにしは石棺のじとき、柱形をかざった方形平面のある原形を想定できる。ローマ世界に一般的にみられる、このような宗教にかかわる原形が、舍利(骨)を納めるといふ宗教構造物と、おそらく宗教上等価値だといけとめらわて、タキニう第三期都市の第三期といふ時代に合體し、新機軸の佛塔となつたのである。車輪狀構造の大佛塔の存在は、そのような觀念をこゝで生むにい

た背景として重大な鍵を與えているのである。一旦形がきまると、この型式の佛塔は歴倒的人氣をえて流行し、定着していった。

佛陀涅槃後に火葬骨を八分して八國の王が佛塔をはじめたように、佛塔は世俗の側がはじめた禮拜の對象であり、おしえの理論化や實踐と行う僧たちはこれに一切かかわるものではなかった。かへらは雨期の一時期だけを大商人らが布施する園林などの一所に集まる以外常はきまつた住居はなかった。しかし、集團生活の場は既に佛陀在世中から恒久的な建物と化し、漸次僧院が形成されていった。

カウシヤーンピーヤラージギルにはその遺構が出土して⁽³¹⁾。そうしてパイラトにおいて、よくにアシヨーカー時代にはまだ佛塔にして僧たちから離れたものもあつた⁽³²⁾。しかし、紀元前一世紀前半には、本来いっしょになるはずのない佛塔と僧の住居たる僧房とが軒をならべた。西インドの石窟寺院では当初からこのセットがあらわれて⁽³³⁾。タキシラでもさすがに都市の中はストローパーだけだったが、丘陵や山麓の佛寺ではこのセットが、茅三都市

第三期で方形基壇の佛塔が創案されたと同時に
 代にあらわれている。ダルマラージカー第一
 期やジャンデーパールBがその例である。僧房
 は、小さい房室を南北に一列つなげただけの
 簡単な建物で、どちらの場合もその水が佛塔の
 西に設定されている。佛塔は低い石積みの壁
 で圍まわっていた。直径四メートルのダル
 ラージカー佛塔は、壁のかわりに九本の石積
 みの柱がとりかこんでいた。インド古来の佛
 塔は、野外のも屋内のも、木や石の柱、ある

いは垣でかこまわっていたから、⁽³⁴⁾こういった夕
 キシラ初期の例もその傳統をうついで出してい
 たかもしれない。となると當時タキシラでは
 新案の佛塔が舊來の傳統の中でまつらわってい
 たことになる。

タキシラ第三都市第四期、ゴーシユによら
 ば、第二世紀、造寺活動は新局面をみせて急
 激に活潑になっていった。⁽³⁵⁾前の時代の南北直
 列式の僧房は姿を消し、かわって大規模な僧
 院が創案される。唯一つの入口をはいると、

廣い内庭があり、その四邊には僧のための房
 室が内庭にむけて並ぶ。四面方形の僧院であ
 る。西インドの石窟にも部屋数のごく少ない
 方形の僧坊があるが、入口は廣いフアサード
 になっていて方形の一邊全體を占めていた。
 タキシラの創業は、入口が狭く、唯一である
 こと、房室が多く、規模が従って大きく、そ
 して閉鎖性の強い建築であることである。僧
 は僧院の規律にくみこまらざることとを餘儀なく
 される。この形の僧院は方形基壇の佛塔とせ

ヲトになって、タキシラでは永續し、後世イ
 ンドの僧院建築の基本型となった。一方、佛
 塔は圍壁をもったものも残ったが、方形の閉鎖
 性僧坊が定着したためか、圍いのなく、どこ
 からでも自由に近づきうる佛塔が、このよう
 な僧坊と逼側して建てられたい。この時期
 には、例外として、僧坊内庭に佛塔をとりこ
 んだものがある。またチヤイテイヤ堂もおこ
 なわした。とくにカーラフーン寺ではのちに
 チヤイテイヤ堂の建設があり、タキシラで

はその點で異色な寺として永續してゐる。お
としく南インドを經由したローマ文化とのつ
なかりはいよいよよくなつた。ガルマラー
ジカーヤカニダラーのカニシユカ大塔のよう
な巨大な佛塔の改築や建設にハドリアヌス帝
などローマ皇帝廟の建築を前提にしては、い
て理解でき、建築技法が採用されたのは、こ
の時期である。

タキシラ佛寺の變遷は、都市で時代順にか
わつていった石積法と照合してあとづけられ
る。

る。以上のべた佛寺の様相は、その初期の二
種の石積法による時代のものである。さらに
四種の石積法がみとめられる。初期の石積の
時期をI、II期とすると、次のIII期には注目
すべき變化が佛塔にあらわれた。つまり、佛
塔の周圍に小塔を附置したのである。ここに
主なる佛塔（主塔）とそれに對する小塔（ふ
つうは小塔群）といふ意識があらわれたこと
になる。——、小塔造立はタキシラではす
べの寺に及んだ現象ではなかつた。前代か

ら存続してきた寺でも、また次のⅣ期においても、小塔造立を許容した寺（カ、ラ、ワ、ン、チ、ル、ト、I、P、B、キ、リ、C、D、E、ジ、ヤ、ウ、リ、ア、ン）とまったく小塔のない寺（カ、I、ラ、ワ、ン、H、モ、フ、ラ、I、ッ、モ、ラ、I、ド、ウ、ク、ナ、I、ラ、キ、リ、A、B）は、はっきり區別することができるといえる。

Ⅳ期は概して造寺活動が停顿した時代であったが、ジヤウリアンだけは特別で、前代をうけて主塔の周囲にギョリとニの基も小塔が立て並べられ、それを外からもうひとつとりかこむものができた。みな主塔の方をむいて並ぶ祠堂の列である。主塔と小塔群の全體をとりかこんでつくられたことにより、僧院と同じような閉鎖空間ができたことになった。入口は主塔正面のみである。塔院とよびうる状況が佛塔の場になってきたのである。ジヤウリアンはⅣ期に塔院正面の一段低いところにもうひとつ祠堂列がかこんだ場所もつくり、内庭にすこしの小塔をおいた。不思議にもこの形式の寺はタキシウではここだけで

つとりかこむものができた。みな主塔の方をむいて並ぶ祠堂の列である。主塔と小塔群の全體をとりかこんでつくられたことにより、僧院と同じような閉鎖空間ができたことになった。入口は主塔正面のみである。塔院とよびうる状況が佛塔の場になってきたのである。ジヤウリアンはⅣ期に塔院正面の一段低いところにもうひとつ祠堂列がかこんだ場所もつくり、内庭にすこしの小塔をおいた。不思議にもこの形式の寺はタキシウではここだけで

いまのところ他にしり小ていないが、だいたいの形式にそった寺ばかりのガンダラと極端に異なつてゐる。VI期というときキシラ最後の石積みの時代であるが、なお四ヶ寺の創建がみられる。衰退などとはとも言えない時代である。石積みは巨大な切石を使うところに特色があり、バラールのように佛塔も巨大化してカシユミールの七一八世紀における傾向に巨石・巨大化の點で通じたところがあつた。この時期創建としてタキシラからやや

はなれたバマラー佛寺が注目される。四邊に階梯をつけ、平面が十字形となつた佛塔である。四方向から昇る佛塔で、從來の一方向性のものと大いに異なつてゐる。カシユミールのパリハサプラー佛塔と同じである⁽³⁷⁾。ガンダラのカニシユカ大塔はいくたびも改築されていゝが、いま残された十字形平面になつたのはこのような時代だつたかもし小さい。

タキシラとインダス河をはさんで西にある
 ガンダーラは、三方を山にかこまわした東西一
 〇〇キロの平野に町が四つあって、土地の生
 産力と商業経済の繁榮と物語る。その水が多く
 の人口、僧の生活、佛教を支えていたはずで
 ある。インドの外界ともタキシラより一層直
 接にふれうる土地である。ーカイ、どーした
 わけかベシヤールへポルシヤプラーヤチヤ
 ールサダへアシユカラーヴアテイー附近には

カニシユカ大塔へシヤールジキリデーリー
 があるくらいで、佛寺迹は平野中央のシヤール
 パーズガリ、いにしへのヴァルシヤプラ周
 邊の丘陵に集中している。平野部の寺はタキ
 シラも少ないが、ここでは一層少ない。丘頂
 山腹、谷口に多い。いわば山寺ばかりである。
 その最大の特徴は、佛塔についていえば、ジ
 ヤウリアーンに近い塔院形式であること、僧
 房は僧院形式をとらず、房室を散在させるこ
 とである。ニール室を一列につなげて一棟と

する。前後二室のセットも横に二、三並べて
 一棟とする。四室を田字型にして一棟とする。
 そういった僧房が山の斜面や尾根にちって、
 僧房群を形成する。タキシラには皆無の形式
 である。ガンダラにも方形僧坊はあるには
 あったが、サフリバロールのように極端に小
 さく、タフテッバーイのよりにタキシラの
 半分とか三分の一の大きさである。しかもタ
 フテッバーヒーでは斜面にある多くの散居僧
 坊が主流である。ガンダラの佛寺では僧坊

65

圖
14

が散っていて目立たないためか、塔院がひと
 きわ顯著な存在である。しかも信者たちは像
 坊區を侵すことなく、塔院へ近づける配置を
 とっていた。丘頂にあるジヤマールカリで
 は、長い参道をのぼると直接塔院に到着し、
 塔院のむこうに僧坊區がある。タレリは深
 い谷をつたっていくと、きり立った斜面のす
 ぎに圍まかれた塔院に到る。僧房群は見上げる
 その斜面にあり、メハサンダでは中腹につき
 出た尾根に塔院、別の山腹に僧房があった。

66

ガンダラーの塔院がジャウリアンに近い形だといったのは、主塔と小塔群と祠堂群とで構成されたからで、正確には二つの型がある。ジャマール「ガリヤタフテ「パーイ」は祠堂がとり圍む内庭の中央に主塔があり、小塔群はこれより一段低いテラスに祠堂にかこまれて位置し、主塔のまわりにはない。ジヤマール「ガリには、さらにもう一段低いところにもテラスをつくって小塔と祠堂列とをおくが、基本的には、「主塔+祠堂列」+「

小塔群+祠堂列」であり、この型式では主塔と小塔との置き場所がはっきり区分されてるのである。タフテ「パーイ」では主塔區と方形僧坊とが磁北の南北線にそって計畫設定され、兩者の間に一段低いテラスをつくり、そこを小塔區としている。計畫設定されたものであるから、タフテ「パーイ」でこの形があらわれる以前にすでにこの塔院形式は完成していたとみられる。

もうひとつのガンダラーの塔院形式は、

タレーリ、メハサンダに及びハ、タキシラ茅
 IV期につくらハたジャウリアーの塔院と同
 じものである。「主塔 + 小塔群 + 祠堂列」の
 構成をもち、主塔と小塔とが同一平面上に併
 存する。参道の両側に祠堂列をつくりつり、
 参道上に小塔をおいた場合もある。その點、
 ジャウリアーの最終的な塔院のかたち、つ
 まり下のテラスにもうひとつ「小塔 + 祠堂列」
 をおいた時代のかたちと同じ考えに基づいて
 いるといえよう。タレーリでは塔院の増廣は

圖 16、17

69

なかつたりしいが、メハサンダでは小塔造立
 にフホー三回ほど擴張を小している。その點も
 ジャウリアーの塔院の變遷に似ている。

タキシラとガンダーラが異なるもうひとつ
 の點は、普通僧たちの會堂だと言われている
 廣い空間をとった方形プランの建物である。
 タキシラではこれが方形僧坊と壁ひとつで接
 し、直接僧坊から入ホ。それではそのような
 用途だと言われ、またわけであるが、ガンダ
 ーラでは散在する僧房の地區にこの建物を見

70

出さない。塔院に付属した立地である。タフ
 テ・パーヒードでは方形僧坊の西隣りにあるが、
 僧坊から直に入水ない。小塔群の区域に開口
 していきから、僧坊から行くとするとき、まず
 小塔群のテラスにおり、そこから入ることにな
 る。メハサンダで塔院へ至る参道を通りぬ
 ば、この廣間に入水ないのと同じ趣向である。
 タキシラとガンダラとのこの廣間は、平面
 上いかにも同じ性格のように見えようが、タ
 キシラでは僧坊に、ガンダラでは塔院に引

きつけられ小ているのである。このちがいの意
 味するところを、研究の現状から理解する
 ことは不可能であろう。

ガンダラの北、スワートヤディールでも
 小塔造立を許す寺（パーンル、サイドシヤリ
 ーフエ、チャトパツト、アングンテリ、ニ
 モグラム）とそうでない寺（グンバトナ、
 トーカルグンバド、トープダラ、ダムコト）
 があって、タキシラと同じ傾向である。方形
 僧坊がここでは基本であることもタキシラに

類似してゐる。そうするとガンダーラがタキシラとスワートにはさまれて、タキシラやスワートにも特殊なようにみえ、タキシラやスワートが北西地方の佛寺の代表のようにみえてくるが、スワートの佛寺の資料はまだ公刊されてないものが多く、事實はざつと複雑であつたろう。三地方に共通する事實は、タキシラのダルマラージカール大塔、ガンダーラのカニシユカ大塔^{図18}、スワートのブトカラ大塔^{図19}のよう

に、各地方に他の佛塔を壓する巨大な佛塔や

圖 18、19

大寺院が必ずひとつはあつたことである。不思議なことにのちにのバミヤ中國の巡歴僧の記録に、タキシラのダルマラージカールとおぼしきものに言及したものはない。カニシユカ大塔は、雀離浮圖、百丈浮圖、罽呾吒王聖塔〔寺〕などともよばれ、ビルーニームカニクチャイテイヤなどとい、一世紀には少くとも存在してゐた。ブトカラが洛陽伽藍記の陀羅寺であること、グットウツチが同定した⁽³⁸⁾。

北西インドの佛寺はみな石積み建築で、

壁面は大きい石と大きい石との間を平らな小
 さい石を重ねてうめる。こうりつた共通の石
 組みを各地でもちながら、その小石地方にお
 いしは独自の展開を示している。ガンダラ
 やスワートでは石組みの變遷が未詳であり、
 佛寺の前後関係も明らかでない。判明してい
 るタキシラの佛寺のうつりかわりをそのまま
 他の地方に適用することも危険である。一か
 し、ミニではっきりしてきた點は、タキシラ
 はインド古來の傳統を受けとめた一方で、タ

キシラが創案した佛塔や僧坊の諸形式をとも
 に發展させたことであり、また一方のガンダ
 ラやスワートではインドから受けついで形
 式がなく、北西インド独自の考案による形式
 ばかりがあったことである。だからガンダラ
 ラ佛寺は全般にタキシラに一步おくれたもの
 だとも言え、あるいは、古來の形制を受けて
 存続させるか否かは、タキシラとガンダラ
 との地域の差異からくるものであり、時間の
 ちがいではないとも言えよう。

おおまかに北西インドの佛教寺院に年代の
 枠を組むと次のようなものである。タキシ
 ラはゴーシユの編年に従うと、I期すなわ
 ち一世紀後半から二世紀初頭にいたる五〇年
 間にタキシラ最初期の佛教建築がみられ、II
 期、二世紀に急激な造寺活動がおこつた。タ
 キシラ佛寺の最後の時代はVI期であるが、そ
 の時代の様相ははつきりカシユミールとな
 がつていゝ。七一八世紀にあつたことが安當
 である。IだがつてIII期、IV期、V期が三世

紀より六世紀の間に割りつてゐることができ、

第一章

五世紀以前におけるガンダーラの役割

第一節 罽賓を基點とする佛教僧の

往來

中國佛教史のなかで四、五世紀がはたした役割は多岐にわたって大きい。ここで私がとりわけ注意するのは、中國へあるいは來住し、あるいは中國から西へ巡錫した佛教僧の動きである。時代の移りかわりのなかでそれとみると、四、五世紀の位置がはっきりしてくる。後漢から三國にかけて、つまりはじめ

て佛教僧が中國へ來住してから三世紀前半までの時代、中國から西方へ求法したひとはいない。もっぱら西方の佛教僧が一方通行で流入した。そうしたひたちのうち、安息、康居、月支の出身と普通いわれ、あるいは龜茲の出身といわれるひとは十數人をかかえる。それに対して天竺つまりインド出身者は七人である。安息、康居、月支の出身といわれるのは、安世高、康僧鎧、支婁迦讖といふごとく、その頭文字の安、康、支を出身地とみる


からである。ふつじこのようにみて、一三世紀におけるパルティア、ソグドゥフェルガナ、ないしトハリスターン（月氏の終の居處としてトハリスターン）で既に佛教がおこなわれたといふ。安たゝ出身地で佛教が既にさかんであつたとは必ずしも断定できない。そのよゝな早い時代にそのよゝな場所、パミールの西方で、佛教を語る遺物も遺構もしらへていないからである。⁽¹⁾

安世高は、⁽²⁾ 出三藏記集卷一三・高僧

傳卷一によると、安息國王正后の太子。幼くしてその俊異は西域にきこえ、在家にして戒を奉じて精峻があつた。國王が死んで位を嗣いだだが、ヤがて讓位して叔父と出家し、ひろく經藏に通曉し、わけても阿毘曇學に精しく、禪經を諷持してほぼその妙を盡した。後漢桓帝の初年に中夏に至つたといふから、一四七年ころである（大正五〇、三ニ三a b。大正五五、九五a⁽²⁾）。安息をアルシヤクパルティアとしてニサを中心とするコペトダ

岡山脈北麓地帯とみるのが普通である。しかし、
 一、そんなところには佛教遺物、遺構はもとよ
 り、アビダルマに通曉するような佛教の背景
 は考えがたい。優婆塞の安玄もその傳記は安
 息國人とし、ひろく群經をそらんどて後漢の
 靈帝末に洛陽に遊賈したという。一八〇年代
 末に貿易商人としてヤツてきたものとある。
 ガンダーラ、タキシラを中心とする北西イン
 ドは貨幣學の成果によるとインド・パルタイ
 アとよぶパルタイア系王朝が一世紀前半に支

配した。ゴンドフアレスを中心とするイン
 ド・パルタイア朝の支配者の登位順序やその
 おのおのの絶對年代は研究者によって動く。
 一、しかし、最近の成果はこの地方におけるイン
 ド・パルタイア朝の終末を西紀六〇年ころと
 する⁽³⁾。



安世高や安玄の生卒年

次はとうてい判らないが、二世紀をさかのぼ
 るはずはなからう。か小らの出自をインド・
 パルタイアとみるべき十分な證據もない。た
 だユペトダグ北麓では信じがたく、可能性

がまだしもあるのは北西インドだといふほか
ない。

四六度集經の九卷と吳の孫權のときに譯し
た康僧會は、祖先が康居のいとであつたけ小
ども、代代天竺に居住し、天竺沙門康僧會と
いわれたい（日出三藏記集の卷二・卷一三
日高僧傳の卷一）。頭に「竺」がついてゐる
竺法護は、日出三藏記集の卷一三に、「其の
先、月支の人なり、世々燉煌郡に居るとあ
つて、「竺」にもかかわらず、敦煌の月支で

あり。だから支謙が大月氏人で、漢の靈帝代
に國人數百をひきいて歸化したといふのも（
日出三藏記集の卷一三）、はるばるとハリーリ
スターンから多勢で中國へ來着したといふの
ではなからう。安息といひ、康居といひ、月
支といつても、その土地で佛教を學んだとみ
ることはむづかしく、多分パミールより東か
インドのとば口、北西インドあたりで學んだ
零風氣である。

西晋、つまり三世紀後半から四世紀はじめ

になすと、はじめに穎川のひと朱士行が雍州
 から流沙を渡って于闐まで行った。魏の甘露
 五年というから二五〇年である。竺佛朔譯の
 道行經が簡略にすぎた判りにくかったのでも
 の大本を求めたのである。ホタンで梵書正本
 九〇章と取得、弟子の不(弗)如檀にもちかえ
 らせ、梵漢の語に通じた竺叔蘭と無羅叉が晋
 文に譯して曰放光波若經と二〇卷とした。朱
 士行自身は、曰高僧傳四卷四によると、ホタ
 ンで八〇歳で死んだとい⁽⁴⁾。ホタンから東の

タクラマカン南縁は、北縁にくらべてはるか
 に早い時代の佛教寺院迹がスタインによつて
 あかすみに出された。朱士行がクチヤではな
 く、ホタン方面に出かけていったのも不思議
 ではなく、南縁に早く佛教がおこなわれたこ
 とを示すとい⁽⁴⁾。
 そのあと、四世紀なかごろから五世紀にか
 けては、從來とまったくちがった佛教僧の動
 きとなった。東晋の五胡の時代、中國來住の
 インド出身僧は一八人。以前の二倍をこえた。

この動きに呼應するごとく、中国の西域求法僧は、ホタンとかクチヤ止りではなく、まっすぐインドをめざし、激増して四六人という数にのぼった。前代まではインド出身僧が安とか康とか支といった中央アジア出自をいおわせたのとちよりはるかに少なかったためであつたが、ここに至つて完全に逆轉した。康居とか月支といわれ水戸といは八人である。南朝宋併行期に至ると、中央アジア出自と一應目水戸といは更に減少して五人である。中央

お

圖

アジア出身僧が減つたに對して、中國僧がインドへ行ったといは五〇人に及んだ。對する北朝では一六人がインドをめざし、一二人がインドから來住した。中央アジア出身僧は檢出するところができない。南齊・梁・陳代は全般に動きが小さくなる。眞諦を含む四人がインド・南海から入り、中央アジアからは三人であり、インドへ向つた中國僧はいない。中央アジア出身僧が激減する五世紀はインド出身僧が急増する時代である。⁽⁵⁾ 實際に中央アジ

90

ア出身僧が減少したとも考えられるが、中國僧が前代と異なつて現實にインドへ赴いた結果、彼地の狀況を把握することができようになり、從來中央アジア出身としていたものを實はインド出身と理解するに至つたのかも知れない。この場合、インドに出生したのではなく、どこか他所からインドへ赴き、そこで一家をなしたのともいたであらう。一かここでは、三世紀以前と中央アジア出身僧の流入時代、四、五世紀は一變じて佛教僧が中

國とインドとの間と直接往來した時代とみ、四、五世紀とこの意味でひとつの畫期とする。この畫期にインドから陸路中國へ向い、中國からインドへわたつたのとたちの過半数がなんらかの形で北西インドの「罽賓」に深いかかわりをもつていた。罽賓に生を受けたのと、インドのどこからかきて罽賓で佛教の教理を研鑽したのともすくなくない。一方、中國僧も巡錫して罽賓をめがしたふいがある。罽賓から中インドの釋迦の遺迹と巡禮するこ

とは自然であるし、多かつたが、罽賓以外でインド佛教の教理を學んだことを明示する記述は、さういっただけの傳記にほとんどみえない。罽賓が當時インドにおける佛敎學の大中心地であつたことを豫想させるものであ

る。
たとえば佛圖澄である。ペリオはブツダ
ーナと復原し、ライトは成業なきままこれを
疑⁽⁶⁾が、佛圖澄は罽賓に二度いき、東晋の懷
帝の永嘉四年(三一〇)に洛陽にはいっただと

い⁽⁷⁾へ自云。再到罽賓。受誨名師。西域咸稱
得道。以晋懷帝永嘉四年。來適洛陽。(可高
僧傳⁽⁸⁾卷九、神異上、大正五〇、三八三〇)。
可晋書⁽⁹⁾卷九五、藝術傳は、かれを「天竺人
也。本姓帛氏。」とするが、可高僧傳⁽¹⁰⁾卷九は
「竺佛圖澄者西域人也。本姓帛氏。」とする。
可晋書⁽¹¹⁾には「再到罽賓」がみえないが、い
ま一應三〇年以前にかれが罽賓に行つたこ
ととしておく。また鳩摩羅什がいる。インド
から龜茲國に至り、國王に敬慕され、國師と

なった父鳩摩炎と王の妹との間に生まれた鳩
 摩羅什は、七歳でクチヤに出家し、九歳で母
 に従って辛頭河を渡り、罽賓に至った。罽賓
 王の従弟槃頭達多た名徳に遇い、雜藏の中
 阿含・長阿含四百萬言を受け、師にその神俊
 とたたえられ、名聲は罽賓王にとどき、
 外道の論師と論破したからなお王に敬せられ、
 日ごと鵝腊一雙、粳・米・麩各三斗、酥六升
 を給せられ、上供の待遇を受けた。一二歳で
 母とクチヤへ歸るとき、月氏北山に至り、沙

勒で佛鉢なるものを頂戴して阿毘曇を誦し、
 またヴェーダ、五明論の外典を學び、陰陽皇
 算までおさめた。温宿まで歸ってクチヤ王白
 純の出迎えをうけて歸國したのである。月氏
 北山という地方は現實の地圖上に指摘しがた
 いが、⁽⁷⁾ここで羅漢の豫言をかしはうけた。こ
 の沙彌もし三十五に至り破戒せざれば、當
 に大いに佛法を興し、無数の人を度脱するだ
 ろう。……(ハ)時什母將付。至月氏北山。有
 一羅漢。見而異之。謂其母曰。常當守護。此

沙彌若至三十五不破戒者。當大興佛法。度無
 數人。與優波掘多無異。若戒不全。無能爲也。
 正可才明携詣法師而已。高僧傳上卷二、大正
 五〇、三三〇レ。三五歲破戒が事實だった
 からこそこの豫言はなしかつくら小たのたと
 塚本善隆は考えた。破戒は呂光が鳩摩羅什を
 捕捉してクチヤ王女と密室にとどこめ、その
 節を虧かゝめたときである（光既獲什。未測
 其智量。見年齒尚少。乃凡人戲之。強妻以龜
 茲王女。什距而不受。辭甚苦到。光曰。道士

之操不踰先父。何可固辭。乃飲以醇酒。同閉
 密室。什被逼既至。遂虧其節。高僧傳上卷二、
 大正五〇、三三一レ。すなわち三八四年で
 あり、かゝの生年は三五〇年である（口肇論
 研究上、一九五四、一三〇レ一三四頁（8））。
 の塚本説によると、鳩摩羅什が罽賓に母と遊
 學したのは三五八年と三六一年の間である。
 クチヤから佛教の勉強をしにインドへ行くの
 なら、当時目的地は罽賓であつたわけである
 インド出身の父鳩摩炎がもたらしたインド情

報にかれらは従つて罽賓へ行ったのであつた
かもしれない。

佛陀耶舎は婆羅門種として罽賓に生まれた
家は佛教徒でなかつたが、乞食の一沙門によ
つて一三歳で出家、大小乗經數百萬言をそら
んじて、三七歳で具足戒を受けた。のちに沙
勒へ行つたが、そこで鳩摩羅什が罽賓から歸
るのに出會ひ、彼におしえた。沙勒に一〇餘
年いたのちクケヤに行った。鳩摩羅什が涼州
に居るのを知り、そこへ急いだ。か小は既

に長安に移つていた。鳩摩羅什は後秦の姚興
に譯經をせよと小して佛陀耶舎と共に譯出す
ことを願ひ出した。ここに佛陀耶舎招請がなす
れ、口十住經と譯出に協力するのである。佛
陀耶舎は弘始一二年（四一〇）に口四分律と
四四卷、口長阿含と譯しはじめ、一五年に
終つた。か小はのち再び罽賓にかえり、口虛
空藏經と一卷を得、商人に托し、涼州の諸僧
に傳與したといふ。佛陀耶舎の生卒年次はあ
きらかでない。年代をあかした一點は先の四

一〇年だけである。ただし、佛陀耶舎は沙勒で歸國途上の鳩摩羅什にあっていゝ。だから三六一年以前にカハが罽賓に居たことがわかる（日高僧傳の卷二、大正五〇、三三三C↓）佛陀跋陀羅の家は、ホフウカピラヴプストウの音寫という迦維羅衛であつたが、祖父達摩提婆が北天竺に商旅し、そのままと二にとどまつたから、佛陀跋陀羅自身は達摩修耶利（日高僧傳の法日と譯すので、達摩修耶利が正しからう）を父として那呵利〔梨〕城に生

まれた人である（日高僧傳の卷二、大正五〇、三三四以下）。禪・律で名高く、同學の僧伽達多と常に罽賓に遊び、大禪師佛大先に就いて學んだ。時代はちよつと法顯や智嚴がインドをおとすれたときである。智嚴（日高僧傳の卷三、大正五〇、三三九C）は涼州のひとで、罽賓に至り、よこの摩天陀羅精舎に入り、佛馱（大）先に禪法をうけ、三年たつた。カハは中國に法を弘める適切なひとを求め、佛馱先によつて佛陀跋陀羅が推擧された。

佛陀跋陀羅と智嚴とは同門であつた。佛陀跋陀羅の傳記では、一歩いたり馬をはせたりして三年。あつささむきのなかをくぐり、とうにパミールもこえ、路上に六つの國國を經過した。國國の王はかすが遠く法を宣べるのをうやまつて、みな心を傾けて布施し、たすけてくれた。交趾に至つて、ここから船にのり、海を循つて行つたとある島をすぎようとした。一歩驟三載。綿歷寒暑。既度葱嶺。路經六國。國主矜其遠化。並傾心資奉。至交趾乃

附船。循海而行一島下。……高僧傳卷二とある。一旦パミールもこえた人が中國へ行くのに交趾へハノイにいたるといふのは考を難い。日出三藏記集卷一四佛大(駄)跋陀傳も同じである(會沙門智嚴至西域。遂請俱東。於是林錫跋涉。經歷三年。路由雪山。備極艱阻。既而中路附船。循海而行。經一島下。……)。智嚴傳は日出三藏記集卷一五も高僧傳と卷三もともに、遂共東行とし、雪山等の險をこえて、關中に到達し、長安の

大寺に止やどったとし、また智嚴は常に佛陀跋陀羅に依り随まったとする。佛陀跋陀羅傳には、た水が別人の傳記が混入したのかもし水ず、智嚴傳をいま是としておくへ大正五五、一一二C。大正五〇、三三九b)。日出三藏記集日高僧傳b)ともに佛陀跋陀羅は宋の元嘉六年(四二九)に七一歳で死んだといひかり、三五九年のうま水である。出家は一七歳、三七五年である。法顯は三九九年に長安を出發し張掖でインドに行こうとする智嚴一行に會つ

た。智嚴一行中の寶雲と僧景は法顯たちと弗樓沙國(現ペシヤ)まで行ってゐる。智嚴の名は日法顯傳b)に張掖であらわ水るだけであるが、弗樓沙國あたりでは既にいっしよになつたかもし水ない。そうすると四〇〇年代はじめに智嚴は罽賓から佛陀跋陀羅と東歸したことになる。佛陀跋陀羅が罽賓に居たのは四世紀後半から五世紀はじめである。これは長安で鳩摩羅什にもあひ、また廬山で慧遠にもあつたこと、後にふ水すとおりである。

曇無讖は中天竺出身であった。多分曇くで白頭禪師なすひとから樹皮涅槃經本を授かり、大乘を専らにし、のち罽賓に往った。大涅槃經前分一〇卷、菩薩戒經、菩薩戒本などをもたらしたが、罽賓は多く小乘を學んで、涅槃と信じなかつたから、クチヤへ行つた。一ぱりくして涼州へわたり、沮渠蒙遜に敬重さる北涼玄始三年（四一四）から一〇年（四二一）の間にかれがきたりした涅槃前分のほか、ホタンで獲得せられた中分、そしてホタンに使

と出て求めた後分をあわせて續譯して三三卷を出した。一かゝ大涅槃經はもと三萬五千偈から成り、譯出した分はまだ百萬言不足といつたので、曇無讖はさらに西行して後分を求めようと蒙遜に頼み出たが、蒙遜はかれが去ることと欲せず、西行の路上にこれを刺殺した。宋の元嘉一〇年（四三三）、四九歳で終つたといふから、生年は三八五年である。かれもまた四世紀末、五世紀はじめに罽賓に居たのである（高僧傳四卷二、大正五〇、三

三五〇一三三六〇。

卑摩羅又は罽賓の出身で、そこからクチャへいき、鳩摩羅什に律をおしえ、佛陀耶舎と同じようにのちに鳩摩羅什に長安で會った。それは弘始八年といふから四〇六年であり、かゝるもまた四世紀後半に罽賓に居たのである。罽摩密多も罽賓のひと。七歳で出家した。罽賓には聖達多く、しばしば明師にあつて博く群經を學び、禪法もとくに深めた。わかい時から遊方宣化を志し、諸國歴遊してクチャに

行き、クチャ王にも敬せられたが、敦煌に進んで造寺し、また更に涼州にいき、宋の元嘉元年へ四二四に蜀に至り、荊州から建業に入り、中興寺にやどった。元嘉一九年へ四四二に八七歳で示寂していったので、生年は三五六。やはり四世紀後半に罽賓で學んだひとである（大正五〇、三四二〇一三四三〇）。このほかに罽賓から中國へ渡った僧に、僧伽跋澄、僧伽提婆、弗若多羅がいる。僧伽跋澄はアビダルマヴァーシヤにぬきんで、前秦

一七年(三八一)に關中に入り、長安にあって道安や曇摩難提や佛圖羅刹、あるいは僧伽提婆らと譯經した。僧伽提婆はとくに阿毘曇心論を善くし、前秦の建元中(三六五—三八四)に長安に入り、のち慧遠の要請で東晋の太元中(三七六—三九六)に心論等を譯した。弗若多羅は十誦律に精通し、後秦の弘始中(三九九—四一五)に關中に入り、姚興にも上賓の禮をうけ、鳩摩羅什もかれの戒律を範とした。弘始六年(四〇四)に義學の僧數百人と

長安の中寺にあつめて十誦律を譯し、鳩摩羅什が譯文をつくつたが、三分の二のところでは病没してしまつたといふ。

ここに列擧した中國來住のインド出身僧は譯經に従事したことで記録にとどまつたものとばかりである。かれらは罽賓にうまひ、罽賓にいたり、そこで就學することによって各分野に精通したものとたちである。罽賓を出發したかれらがどのような陸路をたどつて中國へ到達したのか、すべての場合があきらかにな

っているわけではない。一カー、上來のとぶ
 り、そこから見えにくるのは、罽賓、沙勒、
 龜茲、涼州、そして長安という線にほかなら
 ない。クマールラジグアのようにクチヤ出身
 のひとがわざわざ罽賓に行き、再びクチヤに
 歸ったように、罽賓とクチヤとはつよいつな
 がりの中にある。そうしてこの二所をむすぶ
 線上に沙勒が位置していた。沙勒はいまのカ
 しシユガルである。佛陀耶舎、曇無讖、卑摩
 羅叉、曇摩密多りのうじきはそのことを示し

ている。かくも多くの佛教僧の出發點となり、
 また當時インド佛教の中心と目される罽賓
 とはどこか。

第二節 罽賓と佛鉢

本節は前節にみた罽賓、すなわち『出三藏記集』、『高僧傳』にあらわした罽賓を現實の地理の中に求めようとするものである。罽賓は『漢書』西域傳にあらわされて以來、唐代まで、正史ならびに佛教典籍に頻出する。したがって從來その地理上の位置に關する論議が喧しい。ただパミール以南にあることののみな一致する見解である。あるいはカバル

河下流域、あるいはガンダラ、カーシユミラ、カーピシーといふごく、時代によつて中國側の理解がうごいたといふ。シルグアン・レグイは前世紀末にすでに注目して、隋唐時代はこれをもちつてカーピシーを指したといふ⁽⁹⁾。これを受けた白鳥庫吉は、漢魏にはカバル河下流域、とくにガンダラ、東晋六朝にはカーシユミラ、隋唐にはカーピシーを指していたと言つた⁽¹⁰⁾。ルチアーノ・パテクは、佛教側と非佛教側とでは理解が異なつて

いたとし、従来の異質資料^を混合した論説を批判するといふ卓見を示した。佛教側は首尾一貫玄奘までカリシユミラーをさすものとし、宋雲・惠生の行歴を契機に佛教側の理解が官撰の史書にとり入り入り水た⁽¹¹⁾した。音韻の立場に立つプリーブラン⁷はこれを排し、⁽¹²⁾罰賓はカリシユミラーの音寫にほかならぬとする。たしかに法顯傳¹⁰は、僧詔が一人行った先を罰賓とし、法顯たちが行ったのは罰賓ではない(大正五一、八五七c)。日洛陽伽藍記

四卷五も、乾陀羅國と牛耳ったエフタル¹¹とギンが罰賓と境域を争っているとし、罰賓と乾陀羅とはっきり區別している。そこで従来の論説は南北朝時代に罰賓とあれば例外なくカリシユミラーだと疑わなかった。これを敷衍すれば、上來叙述したあまたの佛教僧がこれらの基軸、起點としたインド佛教の中心はカリシユミラーだといふことになる。いま佛教に関する書物はみなこれを襲い、罰賓を他に求めているものはないのである。

佛教側がいままでなお罽賓すなわちカーシ
 ユミールとすうについて、理由があるらし
 い。漢譯典籍とサンスクリト原典とを照合し
 たとき、カーシユミールを罽賓と譯していら
 だかり罽賓とあればカーシユミールなのだ
 とい復本文雄の指摘がそのところと物語つ
 てい(13)。かれによれば、西晋安法欽譯の阿育
 王傳に對應するデーヴヤイグアグアでは
 罽賓に相當する原語は *Kasmīrapura* であり、真
 諦譯の阿毘達磨俱舍釋論にもカーシユミール

ラと罽賓と一、玄奘譯の阿毘達磨俱舍論には
 迦濕彌羅と一していらすとい。玄奘は、大唐西
 域記の卷三僧訶補羅國の條末に、迦濕彌羅國
 に注して「舊、罽賓と曰う。訛なり」と。
 佛教側は譯經用語としてカーシユミールない
 しカーシユミールプラとあれば罽賓とすると
 いった一應の約束があつたのであろう。その
 際の當り字はプリブランクの音韻説のよう
 に *Kiei/-pyin* → *kā(t)s-pin* (Pen) = **Kaspir* に基づく罽賓
 であつたとおもわれる。玄奘の注記は、「從

来はカシユミールを罽賓と書いていたが、その
 は訛音であり、正しくカシユミールという
 表記にもどすといふことである。だから譯
 經用語としてたとえ確定していたとしても、
 譯經以外にこの罽賓を流用した場合は埒外下
 ある。

そのならば、罽賓、少くとも上にあげたい
 くだのひとたちがかかわった限りにおいての
 罽賓とはどこか。中國に來住した譯經僧が罽
 賓出身と傳記や經錄に記された場合、かれら

自身が自らカシユミール出身だと言ひ、そ
 れが罽賓と表記されたのであろうか。五世紀
 佛教の重大な據點がカシユミール、いまの
 スリナガル盆地にあり、かくも多勢の佛教僧
 が動いた場所であるなら、そこには佛教寺院
 が林立していたであらう。だが残念なことに
 いま残った佛寺跡はみなはやくとも七世紀のも
 のばかりであり、六世紀より古いとして知ら
 れるものはハルワン寺跡しかない。⁽¹⁴⁾ そんな
 ところがなぜ罽賓であらうか。法顯の一行も

智嚴の一行もみないまのスタートからペンシヤ
 ーワルの方面へ行っている。そのなかのただ
 一人僧侶だけが罽賓へ行った。罽賓がカーシ
 ユミレーなら、全員をちらへなぜ行かなかつ
 たか。

この問題もくわしく定めるとっかかりは、
 佛鉢のありかである。佛鉢といってもただの
 シヤカ所用の鉢 *patra* ではない。四天王が奉上
 したいわしの佛鉢である。五世紀はじめに法
 顯はインド各地をめぐった末、スリランカま

で足をのびした。そこでマヒーシヤーサカ部
 の戒律の原典も得て帶歸する。未譯のままど
 あつたのを宋の景平元年（四二三）に海路揚
 州に至った罽賓出身の佛馱什が建康の龍光寺
 で譯して、*五分律*と三四卷とした（大正五
 〇、三三九a）。その中にシヤカの奇跡譚が
 ある。一佛は結跏趺坐すること七日。解脱の
 樂もうけて七日をすぎたのち、この三昧か
 らたつてあたりを静かに思索しつづ歩いてい
 た。そこでへ五百人の商人が五百の乗りものに

のって通りかかった。商人のなかには前世に善業とつんだ提謂（トリポシヤ）と波利（バ）リリカ）なる二巨商がいた。神は二人に佛へ食を獻じさせようとして神力で車馬をとめた。みな驚き、四方の神に祈った。神は妙密を奉れと虚空からよばわった。二人はともに佛前に進み、佛足を頂戴して妙密を奉上了た。過去の諸佛はこのようになるとき皆鉢で受け、未来の諸佛もまたかくすうであるうと思つた佛は、自分も鉢で受けようと思ひ、四天王は其の佛

の心を知り、おのおの一鉢ずつ、自然香の淨い石の鉢を取つて佛にささげた。佛は一天王だけから受けると他の三天王の心をくまぬことになると氣遣い、四天王かりことごとく四つの鉢をうけ、左の掌に四鉢も重ね、右手でこ水を按じ、合わせて一つの鉢とし、こ水をもつて二商人の妙密を受けたのである（大正二二、一〇三〇）。

吳の黃武元年から建興にかけて（二二二—二五三）、支謙が譯したといふ太子瑞應本

起經山（大正三、四七九a b）にもこのはな
 ーがある。「佛が意を定めて七日、不動不搖
 であつたとき、樹神は思った。佛があらたに道
 を得て七日快坐しているのにまだ食を獻じ
 者としていない。人を求めて飯を奉じさせねば
 ならぬと。そのときたまたま五百人の商人が
 山から出て通り過ぎようとした。車をつない
 でいた牛がみなつまづいて進めない。中にト
 リポシヤとバリーリカという二人がいた。怖
 水てほかの多勢と樹神をおがみ、どうか行か

せてくださいと。神はかかやく姿をあらわし
 て言には、いま世に佛が出現したもうた。
 この優留國の尼連禪河のほとりにいらっしや
 る。食をさしあげるのがまだおらぬ。なん
 だら幸にして善意あり、食を獻じたなら、か
 ならずや後に大福があるうかと。商人は佛の
 名を聞き、みな喜んで言った。佛とはさぞや
 並びなく尊いお方だろ。天神がうやまうの
 だから、まここににいるひととはわけがちが
 うにちがいないと。そこで妙と密とをこねあ

わせ、二人して樹のもとへ行き、稽首して佛
 に奉った。むかしの諸佛は人施をうけるとき
 決ってみな鉢をもった。外道のひとのように
 手で食を受けるのはよろしくない。と佛はお
 おもいになった。四天王は佛がいま鉢をお使
 いになるとはるかに知って、ひとが臂を屈伸
 するようなとても短い時間のうちにビナタカ
 山上に至り、念ずると石中から自然に四つの
 鉢がでてきた。四天王は各各一鉢を取ってか
 えり、佛に奉って願わくは商人に大福を得し

めんと。佛は一鉢をとれば三人の意をくまな
 いことになると慮り、ことごとく四鉢を受け、
 累ねて左の手中におき、右手でこ水をなで、
 合わせて一鉢とし、四鉢を合わせた證據に四
 つの際をあらわしたのである。

また、可普曜經にも出ている。可普曜經
 は竺曇摩羅刹、すなわち法護の譯出にかか
 る。このひとは月支の出て代代敦煌郡に居住し
 いた家に出た。西晋の武帝代に、師に随って
 西域に至り、諸國を歴遊し、外國の異言三

十六種、書も亦之の如くを、護皆遍く學び、
 詰訓を貫綜し、音義字體備に識りざる無く、
 遂に大に梵經を齎し、還つて中夏に歸り、燉
 煌より長安に至るまで、沿路に傳譯し、寫し
 て晋文と爲したへ大正五〇、三二六〇。可
 出三藏記集四卷二、同卷一三、可歷代三寶記
 四卷六、可開元錄四卷二、そして可高僧傳四
 卷一に記すか水の譯出部數卷數は大いに異同
 があるが、可普曜經四もとの内のひとつであ
 る。法護は武帝末を以て深山に隱居し、その

のち長安青門外に造寺して精勤行道したとい
 うから、譯出は二九〇年以前、敦煌から長安
 の路次においてであったろう。四天王奉鉢の
 はなりは、商人奉鉢品ないし四天王上鉢品と
 して特出さされてゐるへ大正三、五二六〇〇。
 筋は上と同じであるが、四天王は頗那山上で
 四枚の青石の鉢をえて中食しようとしていた
 とき、照明と名づけた天子がその鉢をもちつ
 いて奉水と言つたことになつてゐる。提頭

賴王 (Dhītarāstra 持國天)、毘留勒王 (Virūdhaka

增長天)、毘留羅叉(Virūpākṣa 廣目天)、毘沙門
 (Vaiśiṭṭhāna 多聞天)といった四天王名もあげ
 て、この順序で奉鉢したとする。佛は鉢を受
 け終って左の手中に累ね、右手で上をなでて
 ひとつの鉢にし、四際を現ぜしめたといふ
 さらに口大唐西域記上巻八摩揭陀國の條で
 玄奘はこのはなしをのせている。四天王は四
 方よりきて、まず金鉢を奉呈するが、佛は受
 けない。銀鉢を奉呈しても受けない。頗胝の
 鉢、瑠璃の鉢、馬腦の鉢、車渠の鉢、眞珠の

鉢と次第に奉呈するがみな受けない。しまいに
 紺青のまばゆい石鉢を奉呈するとき、すべに
 あれこそ受けなかつたから、この鉢を受け、
 順次に重ね、なでてひとつの鉢にした。だが
 ら外側に四際があるのだといっている。玄奘は
 このはなしをボドがやあたりで聞いたのか、
 それとも歸國ののち口大唐西域記と編纂に際
 してどこからか引いたのであるうが、出典は
 あきらかでない。
 これら四つの異なった出典や話の内容から

説話の新古を考へることには、いま問題でない。問題になるのは、『大唐西域記』がこの四天王奉鉢譚のせ、このような奇迹を記念したストウーバがそこにあつたとするものの、鉢のものをもまつた場所については、言及していない点である。原文は次のとおりである。

河側不遠。菩薩於此受食乳糜。其側窳堵波。ニ長者獻麩蜜處。……長者獻麩蜜側有窳堵波。四天王奉鉢處。……（卷八）

四天王奉鉢がそこでおきたのに、ニ長者が麩

蜜を獻じた場所とか、四天王が鉢をたてまつた場所と叫ぶた目に見えないものをストウーバを建立することによって記念しはしたが、鉢自身とまつたためしはなかつたのである。シヤカの本地である中インドの風土は、こういうた目に見えないものをストウーバという象徴でもつてつねに憶念すべきものとして恆久化しようとしていた。鉢という目で見え、手で触れよニとのできる具體は、中インドではまつらるるべくもなかつた。鉢は中インド

以外の土地で現實に信仰の對象になつていた。中インドとは環境がまったく異なつた土地である。そのことは次の説話に關聯してゐる。

鳩摩羅什譯といわれ、(馬鳴菩薩傳)に馬鳴が北

印度へ弘法した話にからんであらわれる。北インドの小月氏王が中インドを攻め圍んで時がたつた。中インド王は小月氏王の求めをものを與えて和戦しようとした。小月氏王の要求は、三億金であつた。中インド王には國を

擧げて一億金とてない、と答へると、小月氏王は、お前の國には二大重寶がある。一に佛鉢、二に辯才比丘だ。これをくれば二億金に相當しよう。中インド王はこれをたたいへん重んじていたので手放さない。辯才比丘に計ると、王がこれを手放さないのは佛法弘通を阻むもの、目前を考えず、遠大を計れという。王はやむなくその言に従い、二大重寶を與えてしまった。小月氏王はこれをたづさえて本國に歸つた。北インドで辯才は

その言葉どおり佛法を廣く宣べ、群生を導利
 したといふ(一回、一ハ三〇一ハ四〇)。
 マスペロが中國撰述であることとあきらか
 にいた日付法藏因縁傳四の卷五にも同様の話
 がある⁽¹⁵⁾。そこででは小月氏王のかわりに、月氏
 國王、名は梅檀罽毗王、つまり月氏國王で
 あるカニシユカがパタリプロウを攻め、歸
 伏させたとき、九億金を要求したとする。パ
 タリプロウの王がさしだしたのは、馬鳴と
 佛鉢と一羽の慈心の鶏で、おのおの三億金相

當といっている。佛鉢はその功德、如來の所持
 したといふこと、馬鳴はその智慧がことにす
 ぐわっていたといふこと、鶏は慈心あつて虫水
 を飲まず、ことごとく一切の怨敵を消滅す
 といふこと。ニシユカはそれらを受けとり、大喜
 せだ。カニシユカはそれらを受けとり、大喜
 めで歸還したといふ(大正五〇、三一五b)。
 さらに、法顯も佛鉢のはなしをスリランカ
 で聞いた。天竺道人が高座上で經をそらんじ
 ていた。佛鉢はもとがアイシャーリー(毘舍

離)にあってたが、いまはガンダーラ(捷陀衛)にある。百年ほどたつと西のかた月氏國へ至り、また百年ほどたつとホタンへ至り、そこで百年ほどあってクチヤ(屈茨國)へ至り、百年ほどしてスリランカ(師子國)へ至り、百年ほどして漢地に到來し、百年ほどして中インドにもどる。そこからトウシタ天(兜術天)上にもどる。彌勒菩薩はこゝを見て讚歎して、釋迦文佛の鉢がやつてきたと。そこで諸天とともに華香をもちつて供養すること

七日。七日がすぎると再びジャンブドヴィーパ(閻浮提)にもどり、海龍王はこゝを龍宮にもつて入り、彌勒が成道しようとするとき、になると、鉢はまた分れて四つになり、もとの類(類)那山上にもどる。彌勒が成道したあかつきには、四天王は佛のことを念ずることさきのごとくにする。賢劫の千佛はともに一鉢を用いる。鉢がなくなれば佛法はよりやく減る。佛法が減ると、人壽はますます短くなり、五歳までになつてしまふ。……(大

正五一、八六五c)。スリランカで聞いた話にホタン、クチヤ、さらに中国までがあらわれ、となると、法顯の脚色とか、別ソラスカの混入も疑わがよえない。しかし、ここには佛鉢がグアイシヤリーに發したとする。ここからあちらこちらを廻るのであり、まいに水が減ると、佛法も減るといふ。佛鉢は佛法興隆の象徴、目玉である。その水がもとグアイシヤリーにあり、あるいはパトリポトラにあり、ないし中インドにあった

といふ。いざ水も四天王が鉢を奉った土地とは正確には一致していない。すなわちインド、しかもシヤカが實際に活躍した土地であるなら、實はどこでもよかつたのである。當時の北インドになぜシヤカが用いたものがあのか、カニシユカとか小月氏國王といったものが深くかかわる土地に當時なぜ佛鉢があるのか。以上のはなしはみなその理由づけに由来している。縁起が必要であった。歴史上のシヤカが現實に足をふみ入れたことのない

土地に佛教が興起したとき、佛鉢なるものを
つくり出してそのシンボルとした。その由来
をまことしやかに創作する必要があったので
ある。曰馬鳴菩薩傳曰や曰付法藏因縁傳曰に
あらわしたのは、大月氏王カニシユカとか小
月氏王とかが勝利品のひとつとして佛鉢をも
との場所からとってきた、だからここにある
といふ理窟である。馬鳴と組み合わせたとこ
ろにもミンがある。そ小ならば、佛鉢は實際
にはいここにあったのか。スリランカで法顯が

聞いた經のなかに、今捷陀衛にあるといふ。
佛鉢は罽賓に實在したのである。智猛が見
た。曇無竭（法勇）が見た。慧覽も見たし、
道普も見たのである。智猛は雍州京兆新豊の
ひとで、毎に外國道人が天竺國土に釋迦の遺
迹・方等の衆經ありと説くのを聞き、後秦の
弘始六年（四〇四）に志を同じくする一五人
とともに長安を出發した。河を渡り谷を跨ぐ
こと三六所して涼州に至り、陽關より西のか
た流沙に入り、鄯善・龜茲、そしてタクラマ

カンと南渡して于闐に行った。ホタンから西
 南のかた行くこと二〇〇里で葱嶺を登り、
 こゝで九人が挫折して還ったので六人が進ん
 で一七〇里行き、波倫に至った。高僧傳
 三卷には波倫で竺道嵩が無常となつたとす
 るので、五人が残つた。高僧傳には、竺道嵩
 を闍毘に付さんとしたが、屍のありがわか
 らなくなつたこと、そしてこゝから進んで四
 人と雪山を度り、辛頭河を渡って罽賓國に至
 るとす（至波倫國。同侶竺道嵩又復無常。

將欲闍毘。忽失屍所在。猛悲歎驚異。於是自
 力而前。與餘四人共度雪山渡辛頭河。至罽賓
 國。一日出三藏記集には、ややこれと異
 なつてゐる。猛遂進行千七百里。至波倫國。
 三度雪山。氷崖皓然百千餘仞。飛緘爲橋乘虛
 而過。窺不見底仰不見天。寒氣慘酷影戰魂慄
 漢之張騫甘英所不至也。復南行千里至罽賓國
 再度辛頭河。雪山壁立轉甚於前。下多障氣惡
 鬼斷路。行者多死。猛誠心冥徹。履險能濟。
 既至罽賓城。と。波倫國に至るまでみたが聖

山を度す。波倫國から南へ千里で罽賓國に到達するが、その途次で再び辛頭河を渡るのである。その行路は波倫に至る間よりはるかにすさまじい。そうして罽賓の國城へ至るのである。波倫は言うまでもなくボロル、現ギルギトを中心とした地方である。辛頭河、即インダスはここから大きく西へまわりこみ、現チラーズからダレルベリを下り、そこで西南に向きをかえ、現アトックで、すなわちいにこのガンダーラでカール河と合流する。

圖
22

ダレルベリはいにこの陀歴であり、ここからガンダーラに至るインダス沿いの道路はもっとも險阻である。四出三藏記集には、「猛先に奇沙國において佛の文石の唾壺を見、又此國において佛鉢を見る」と。「此國は罽賓である。」佛鉢は紫紺に光かがやき、四つの際がくっきりといていた。智猛は花や香で佛鉢を供養し頂戴して發願した。佛鉢がもつ私の心に感應してくれるのなら、どうか軽くなった、重くなったりすうように」といふや

150

はなはだ重くなつたので力堪えきれず、其の上へおろそうとすると重さが感じられなくなつた。(猛先於奇沙國見佛文石唾壺。又於此國見佛鉢。光色紫紺。四際畫然。猛花香供養頂戴發願。鉢若有應。能輕能重。既而轉重。力遂不堪。及下案時。復不覺重。)。麗本は佛鉢の四邊が燦然と一いたし、三本は四際が畫然と一いたしとあり、高僧傳の麗本はこの三本と同じで、元明本が畫然にっくる。いま四際畫然を是とする

智猛の見た佛鉢はまさしく四天王奉鉢の鉢を造形したものであり、説話にもとづく佛鉢が罽賓にあつたことを示す。智猛は四〇四年をもう下らない時點でそれを見たことになる。智猛について見たのは、曇無竭である。これは法顯たちが佛國へ自らわたつたことを當て聞き、宋の永初元年(四二〇)に同志僧猛・曇朗などというひとら二五人もあつた。幡蓋供養の具をたづさえ、吐谷渾から流沙を經て高昌郡へ行き、クチヤ、カーシエガル(

沙勒)の諸地を経て葱嶺・雪山に登った(遂
 以宋永初之年招集同志沙門僧猛曇朗之徒二十
 有五人。共齎糧蓋供養之具。發跡北土。遠適
 西方。初至河南國。仍出海西郡。進入流沙。
 到高昌郡。經歷龜茲沙勒諸國。前登葱嶺雪山。
 雪山から屬賓に至る道程は實にここでも具體
 的である。すなわち、棧路險惡、驢駝も通ら
 ず、増氷は峨峨として絶えて草木無く、山に
 障氣多い。下には大江があつて浚急で箭やの如
 くである。東西兩山の脇に索つなを繫いで橋とし

との間五里をはか了。十人がひとたが過より、
 むこう岸に到りおわると烟をかかげて渡った
 ーるとす。後から渡り人は烟を見て前に
 已に度ったことを知り、はじめて更めて進む
 ことができた。もし久しく烟を見なければ、
 暴風が索を吹いて人が江中に墮ちたことを知
 る。葱嶺を行くこと三日でやっと通過するが、
 またそれから雪山を上る。懸崖は壁立して足
 を安んずる處もない。だから石壁には皆故く
 からのくいの孔があり、あちこち罅すきになつて

いた。ひとはおのおの四つのくいを執る。先
 ず下のくいを抜いて手で上のくいに攀じ、こ
 れをくりかえしながら、三日かかってもやっと
 通過するのである。平地に到って後續を待ち、
 みんなの数を點檢すると、十二人を失っていた。
 進んで蜀賓國に至り。佛鉢を禮拜して、一年
 餘を停留し、胡書を學び、竟に便ち胡語を解
 せしようになり、求めて觀世音受記經梵文一
 部を得た（棧路險惡。驢駝不通。増氷岌岌。
 絶無草木。山多障氣。下有大江。沒急如箭。

於東西兩山之脇。繫索爲橋。相去五里。十人
 一過。到彼岸已。舉烟爲識（幟）。後人見烟。
 知前已度。方得更進。若久不見烟則知暴風吹
 索人墮江中。行葱嶺三日方過。復上雪山。懸
 崖壁立。無安足處。石壁皆有故杙孔。處處相
 對。人各執四弋（杙）。先拔下杙。手攀上弋（
 杙）。展轉相代三日方過。乃到平地相待。料檢
 同侶。矢十二人。進至蜀賓國。禮拜佛鉢。停
 歲餘學胡書。竟便解胡語。求得觀世音受記經
 梵文一部。以上は口出三藏記集四によるが

曰高僧傳にもほぼ同文。つり橋の長さを欠くのみと云つてよい。曇無竭は四二〇年以後、さほど時を経ずしてやはり罽賓で佛鉢を見たことになる。葱嶺雪山をわたつて罽賓にいた道すじは、智猛傳の状況とほぼ同じであり曇無竭傳はやや具體的にのべているのである。慧覽は曰高僧傳の卷一一習禪篇にみえ、とて、酒泉出身。かつて西域に遊學し、佛鉢と頂戴し、仍て罽賓にて達摩比丘に従つて禪要を諮受した。達摩はトウシタ天で彌勒から

菩薩戒をうけ、これを慧覽に授け、慧覽は罽賓よりの歸途、ホタンでこれをかの地の諸僧に授與した。そのから道を東にとって河南國と經由し、慕延の世子瓊に敬せられた(大正五〇、三九九〇)。慕延は、曰宋書の卷九六鮮卑吐谷渾傳によると、元嘉一六年(四三九)に河南王に封ぜられ、この時に慕延の嫡子瓊は河南王世子と認められ、瓊は相互に誤書されやすい。曰高僧傳の瓊を曰宋書の瓊とみると、慧覽が罽賓に行った年代の

下限は四三九年であり、やはり智猛や曇無竭と同じような時代に罽賓で佛鉢をみたのである。

道普も罽賓で佛鉢をみている。さきにもべた曇無識が譯した涅槃經は完全でなかった。で、建業の慧觀はその後分を求めようと、沙門道普をして書吏一人を伴とさせ、太祖の資給をあおいで西行、求經を願ひ出た。この道普は長廣郡まで行って難破し足の傷がもとで死んでしまったが、もととは高昌のひと。

以前に、西域を經めぐり、諸國を遍歴して尊影を供養し、佛鉢を頂戴し、四塔・道樹・足迹・形像をまのあたりに見、梵書をよくし、諸國語を備え、異域に遊履したひとであった。へ日高僧傳の卷ニ曇無識傳附傳、大正五〇、三三七a b)。道普がいつごろインド歴遊したか年代をあたすものはない。慧觀が宋太祖に願ひ出た時點だけがあきらかである。多分五世紀のじく早いころか四世紀末のことであつたらう。

さて、佛鉢が罽賓に安在したことはたしか
 なのであるが、この罽賓がガンダーラであっ
 て、カーシユミールでないことを示すのは、
 ほかなりぬ法顯そのらとである。四天王が佛
 成道するとき奉上了た、四際晝然たし佛鉢が、
 ガンダーラの主要都市プルシヤプラにまつら
 れていたことを法顯は記録している。このこ
 とは、カルガスリランカで天竺道人がそらん
 じていた經中、「佛鉢はいま捷陀衛にあると
 ときいた事^事と附合していし、すなわち、句

法顯傳にいう。「佛鉢はすなわちこの國（
 弗樓沙國）にある。昔、月氏王は大いに軍勢
 と興して來つてこの國を伐ち、佛鉢を奪取し
 ようと思った。すなわちこの國を征服しおわり、
 月氏王は篤く佛法を信じていたので鉢をもち
 去るうとし、ことさらに供養を興した。三寶
 を供養しおわつて、大象と飾りたて、その上
 に鉢をおいたが、象は地に伏して進むことが
 できない。あらためて四輪の車をつくり、鉢
 をのせ、八頭の象でいっしょに引かせたが、

進めない。王は鉢に與^{あずか}る縁がまだ到來して
ないことを知って、自ら深くほじなげき、そ
の場所に塔と僧伽藍をたて、鎮守するひとを
おいて種種供養をいたした。(その寺は)七百人あま
りの僧を收容できた。日が中天にりぼらん
すと、衆僧は鉢を出し、俗人等と種種供養
をし、もういたのちに中食とする。暮方の焼
香の時になるとまた同じようにする。(佛鉢
は)二半ほどを容れたことができ、いろいろ
な色がまじって、黒が多く、四つの際には

くっまりとっている。厚さは二分ほどで、は
なはだ光澤がある。負者がわずかはかりの華
の中に投げ入るといっばいになるが、大金
持がいて多くの華で供養しようとしても、ま
さにそれが百千萬斛であつても、ついに満す
ことができない。(大正五一、八五八b c)。
足立喜六は法顯の夏坐の年次を考へ、長安出
發弘始元年(三九九)も基準にして、弗樓國
滞在と四〇二年と四〇三年との間においた。⁽¹⁶⁾
烏菴國夏坐は元興元年(四〇二)、羅夷國夏

坐が元興二年（四〇三）だからである。法顯は烏菴で夏坐してから南下して宿呵多へ行き、そこから東へ下って捷陀衛へ行き、東へ進んで竺刹尸羅へ行き、また捷陀衛から南行して弗樓沙へ行き、そこで佛鉢を禮拜して西の那竭の醯羅城へ至り、那竭から南へ小雪山まで来て羅夷に達した。那竭では冬三月とすじし、たから、弗樓沙滞在は元興元年の夏三月以後、秋の滞在である。四〇二年後半にはじめて佛鉢をみたのである。しかも法顯は佛鉢の大き

さを記し、供養のあり方まで具体的にのべている。法顯・智猛・曇無竭・慧覽・道普らはみな四世紀末から五世紀はじめにいたる限られた時間のなかでひとく佛鉢を見た。法顯はプルシヤパラで見、智猛以下は罽賓で見たのであるが、兩人ともに四際があまりかな佛鉢をみた。色彩もかたや「雑色而黑多」とかたや「光色紫紺」と表現こそ異なれ、つまりところ同一物である。そうすれば、智猛以下がカーシユミールで見、法顯らがガンダーラ

(ガンダラーのブルシヤアラ)で見たとはい
うてい解せないのである。

水經注 卷ニは、捷陀衛國・弗樓沙國を
叙述して、法顯傳の佛鉢記事を引き、また
佛圖調曰くとして、「佛鉢は青玉である。三
斗ばかりをいれ、こたができた大きさ。その
國はこれと寶としていす。供養のとき、終日
秀花を入水てもいッぽいになるなと預えば、
そのとかりになるし、ひとたばと入れにいッ
ぽいになれと預えば、これもいッとかりにな

る(佛鉢青玉也。受三斗許。彼國寶之。供養
時。願終日香花不滿。則如言。願一把滿。則
亦便如言)とこのハる。藝文類聚 卷七三
鉢の條は、「西域傳曰。諸國志曰。佛鉢在乾
陀越國。青玉也。受三斗許。彼國寶之。供養
願終日花香不滿。則如言也。願一把滿。亦隨
言也。」と、西域傳に引く諸國志に
らの引用だとしていす。くだ、太平御覽
と卷七五九は、そのまゝ西域諸國志に
引用したとする。西域諸國志なる書物は

あやーげであすが、曰藝文類聚曰が引用し、
曰西域傳曰なす方志は、隋代に彦琮が編纂
した曰大隋西國傳曰一部十篇であらう。曰釋
迦方志曰に、翻經館沙門彦琮著西域傳一部十
篇とあり、曰西域傳曰ともよばれたからであ
らう。と水に引用された曰諸國志曰文が曰水經
注曰引の佛圖調の文とはほぼ同文といえ、佛圖
調の編纂にかかるとは断定できない。た
ゞ兩者、佛鉢が青玉だとする點、曰諸國志曰
が、曰佛鉢が乾陀越國に在るとする點、法

顯や智猛の記録とよく通じている。曰水經注
曰引く道安の曰釋氏西域記曰もまた「捷陀越
王城西北有鉢」としている。
曰水經注曰卷ニはまた、「道人竺法維の説
くところを按ずるに」として、次のようにい
べ了。「佛鉢は大月支國に在り、高さは三十
丈、七層の浮圖もたて、鉢はその第二層に置
き、金のいと・金のくさりを鉢にかけている。
鉢は青い石でできています。曰藝文類聚曰卷
七三は、支僧載なるいと曰外國事曰から引

いし、一佛鉢は大月氏國に在る。一に佛律婆
 (娑)越國と名づけ、天子の都である。浮圖も
 起してゐる。浮圖は高さ四丈七層ある。
 四周の壁の内側に金銀の佛像がある。像はこ
 とごとく人と同じ高さである。鉢はまんなか
 におき、第二層上に在る。金いを作つて鉢
 にかりませ、くさりを鉢にかけてゐる。鉢は
 石である。その色は青である(支僧載外國事
 曰。佛鉢在大月氏國。一名佛律婆越國。是天
 子之都也。起浮圖。浮圖高四丈。七層。四壁

裏有金銀佛像。像悉如人高。鉢處中央。在第
 二層上。作金絡絡鉢。鏤懸鉢。鉢是石也。其
 色青也。竺法維は曰高僧傳に卷三末に、
 又有竺法維釋僧表。並經往佛國云云。ハ大正
 五〇、三三七〇とあり、宋のひとかもし小
 ない。支僧載はひんなひとかわからない。
 か、支僧載と竺法維とが言ふところの佛鉢
 に關する情報がほとんど同じであることは注
 意してよい。竺法維には曰佛國記なる編著
 があつたこと、曰通典にや曰太平寰宇記に

引かかっていることから知られる。いざれに
ても、以上から判明することは、佛鉢が大月
氏國のポルシヤプラにあり、浮圖とよばれ
重層建築の第二層中央に金絡・鎌をかけて安
置され、四周には金銀人身大の佛像が壁にま
つりかかっていたことである。そして釋氏西域
記によれば、捷陀越の王城の西北にそは
位置していた。法顯は、大月氏王が動かせな
かったところに塔と僧伽藍がつくられ、佛鉢
がまつられたと記した。これは七百僧も收容

できた大寺であった。しかし法顯は塔内にあ
ったとは明言していない。ローゼンフェイル
ドは、「ペシヤワルのストウパーに法顯當時
まつられていた。ペシヤワルのカニシユカ
リストウパーパドまつられていたのではないか、
などと言ったが根拠はないのである。(17)
むしろ
上に言う「浮圖」はストウパーでない可能性
が高い。ストウパーはいくら重層して
も内部に室をつくる構造でない。ポルシヤ
ラに佛鉢が存在したことを傍證する玄奘の

大唐西域記には、「王城内東北有一故基。昔佛鉢之寶臺也。」といひ、さきにあげた「捷陀越王城西北有鉢」と方向はずれたにしても、ポルシヤプラウ城内にあったことを示し、またストウーパ以外の建造物であったことを示してもいよう。玄奘はストウーパであれば必ず「窣堵波」と明記したからである。

佛鉢がどんな工合にまつられていたかを傳えてくれるものがある。世にガンダラ彫刻といわれ、ガンダラの佛寺を莊嚴していた

多くの彫刻のなかに、それが表現された。いまパキスタン内の博物館に收藏する出所のたしかな例を拾うと一〇例ある。みな浮彫りであるが、ひと手はパネルに表現された五例、もうひと手は佛菩薩立像の臺座に表現されたものである。ラーホール博物館にあるストウーパ正面を飾った破風は、内部をアーケ型に三段に仕切り、最下段すなわち基座部に五人の僧と三人の俗形に圍繞さして初めて法輪を轉ずる與手のブツダがいた。最上段中央

には佛鉢をおき、左右に供養者を配す。左は先頭に王侯形の人物ととのうしろに二人、右は二人物である。アーチ型の両隅には半獣半身合掌像であり、獣は有翼海獣形である。鉢は天蓋つきの臺座にあり、圓座上に安置する。臺座は刳り型の脚をもち、前面に文様のあゝ布を垂らしている。鉢本体は珠點を九つちりちりして裝飾とするが、口縁三本の水平刻線を入水、四鉢合成を表現している。同じような破風の頂上部にあらわした例はまたペシヤ

圖24、1.

177

ーワル博物館にある。彫りは前例より粗いがやはり刳り型脚をもち、布を垂らした臺座に鉢をのせている。臺座には天蓋もそれを支える支柱もないが、臺座両端にフラビ手状のものがある。鉢は口縁に二本の水平線を刻んで四鉢合成を指示すること前のとおりである。パネル浮彫の例ではラホール博物館に、ストウーパ胴部ないし基壇にはめこんでいたとおぼしき上下二段重層のパネルがある。兩段とも兩端は擬コリント式柱頭をもつ壁柱形では

圖24、2.

圖24、3.

178

切り、上段中央には鉢、下段には左右各二人の女人に供養をうける坐佛像を配する。鉢はやはり天蓋つき、の臺座の上にある。臺座は剣り型脚、布を垂らす。鉢は上記二例が口縁をやや内彎させた形をとるのに對し、高臺なしハカマつき上廣がりの形で、四鉢合成の指示はない。もうひとつラホール博物館にあるパネルは、佛像の臺座のようにもみえる横長のもので、両端を擬コリント式柱頭つき壁柱形とし、中央に天蓋つき臺座にのる鉢をあら

179

わす。これは未成品であるが、完成さるればラホールヤペシヤール博物館の天蓋つきのものと同じ形式の臺座になることが豫想さる。カラチ博物館にある断片は、剣り型脚と前垂れ布をかけた臺座であるが、支柱はない。鉢はやや上方から觀たさまで表現さる。珠點を散らし、口縁に水平線一本を刻む。鉢の上方に半月形を配する。

圖24、10.

は、きり佛菩薩像の臺座とわかるものに表現さるた五例のうち、ペシヤール博物館の

180

一例は、佛單獨立像ではなく、物語の一場面である。その内容は欠損のため不明である。したがって臺座は單獨像の臺座より横に長い。中央に天蓋つき臺座にのり鉢をおく。鉢は花が満ち、口縁の水平刻線により四鉢合成とあらわす。鉢の左右に菩薩坐像一と二面向きとありわし、その外側に偲形供養者をおく。臺座兩端のうち、むかつて右は欠損するが、左には簡便化した擬コリント式柱頭をもつ壁柱形とほり出している。ハシヤール博物館のもの

圖24、4.

181

一例は單獨立像の臺座で、むかつて右は欠損する。中央に摩滅した臺座上にのり鉢とあらわし、左右に供養者が二人ずつ居る。テールホル博物館の三例中一例が佛の單獨立像、二例が菩薩立像である。佛立像の臺座は兩端が擬コリント式柱頭をもつ壁柱形。中央が鉢、供養者は左が三人の女、右が三人の男。剣り型脚、前垂れ布をつけ、臺座は上端兩側に丈高い竿様のものも立て、その頂上に房がついて、このようにみえる。鉢は珠點ちらし文様と

圖24、5.

圖24、6.

182

もち、四鉢合成の水平刻線と二本つけ、座は高臺になつたもの。鉢の中から二本の棒が立ち上り、天蓋部にとどいてゐる。天蓋部は半月形に表現され、立ち上る棒がこれを支えてゐるようにもみえる。このと同巧のものが、菩薩立像臺座にもあらわされてゐる。この場合は、高臺つきの鉢が二重の方臺にのりさまをあらわし、天蓋つきの割り型脚・前垂れ布をつけた臺ではない。鉢の中央にやはり二本の棒をくっつけ合せて併立し、その上に半月

圖 24. 7.

形があらわさ小てゐる。半月形は布のいだが、ないし葉脈のような刻みが入小てある。これら臺から半月形に至る一連の佛鉢セットの左右に、上端をふさとする支柱が立てかけてある。半月形を天蓋の布とすると、支柱の役割は天蓋をうけるものと判断できようが、この場合、鉢から立ち上る棒の意味が理解されな

い。たゞライホール博物館のひとつの佛立像の臺座に左右三人が一つの像が供養する容器の表現がある。鉢とこの容器ともおきえたよう

圖 24. 3

にいろいろな點で鉢供養のありさまに類似する。ただこの場合容器の上にふちかざりのある傘蓋をつけ、點だけが異なっている。傘蓋をもった鉢は、ラホール博物館のものと同じの菩薩立像の臺座にみられる。方座のうまに鉢のせ、きわめて短い支柱が傘蓋を支えている。そこで上にのべたふしぎな半月型と水を支えるかのような二本の棒を傘蓋とみることも可能である。

さて、このように實際に佛鉢がまつられた

圖 24. 8.

ありさまを示してくれた。圖象をみると、鉢を安置した建物からとり出し、天蓋か傘蓋のついた、剣り型脚・前垂水布つきの座上にのせ、僧俗ともに供養禮拜したことが知れる。まさに法顯が述べた情景と髣髴とさせる。すなわち「日が中天にのぼりんとすると、衆僧は鉢を出し、俗人等と種種供養をせ、そうしたのちに中食とする。暮方の焼香の時になるとまた同じようになると。鉢は、諸文獻にみえ

了ごとく、四鉢合成を示す口まわりを造形し

ている。また佛鉢の形状に二種あることが注意されるよう。もっとも普通で例が多い形は、こんもりと丸く碗状であり、もうひとつは、底に袴をつけ、外へひらく口まわりをもつ形である。これは例がすくない。ガンダラ地方に出土する碗形土器に前者はいたって近い形状である。佛鉢が造形されたとき、その範疇当時の僧衆が寺院で使う碗に求めたとみることが許されるよう。そうすると、佛鉢の形として例が少い、袴をつけ、外開き口縁をもつ佛

鉢は、現実にプルシヤプラ城内の寺にまつられていたものもみたことのないひとたちによって描き出されたものであったかもしれなからしい。このことを佛鉢描写に時間差ありとみて、浮彫の前後関係にまで論議を及ぼすものではない。

多くの佛教僧がみた佛鉢を軸に、可出三藏記集に、可高僧傳の罽賓の所在を確定した。この兩書にはガンダラを指示する、たとえば乾陀羅とか捷陀越といった語は皆無であり

この事実もまた兩書で使われた罽賓がガンダ
 ーラを指示する語であった可能性を十分含んで
 いる。さて、その佛鉢がガンダラーにいつか
 り存在したか。説話は六月氏王ないし小月氏
 王、いづれにしても月氏王が中天竺からもた
 りしたという。なかんづく梅檀罽吒王、カ
 ニシユカに求めた説話が注目される。一か
 確實に遡れる佛鉢存在の證據は、道安の『釋
 氏西域記』にあり。道安はそれを實際にみ
 ていないから、ガンダラーから来たのととき

いたのである。とすると、道安の師であった
 佛圖澄が浮かびあがる（大正五〇、三五—七）。
 佛圖澄は『高僧傳』卷九に、「自云。再到罽賓。
 受海名師。西域咸稱得道。以晋懷帝永嘉四年
 來適洛陽。」とある。とく、罽賓はガンダラー
 にいつたひとであり、三一〇年に洛陽に來た
 ひとである。道安は晋の太元一〇年に七ニ歳
 で卒したから、三一四年の生まれである。道
 安が佛圖澄に遇ったのは、かれが鄴にいつた
 とき、その中寺においてであった。佛圖澄は

石勒の死後も石虎に重用され、その石虎は立つや鄴へ宮室をうつした（建武元年）。三三五年である。したがって道安が釈氏西域記の資料を佛圖澄からもきいていたとすると、この年よりやややのちであつたろう。いづれにしても佛圖澄は三一〇年以前に罽賓に往つたことがある。この年次以前からガンガー川に佛鉢はまつられていたであらう。

佛鉢は単に供養禮拜の對象になつていたばかりでなく、その水を持ち上げさせることもしていた。

ていた。持ち上げてその水を持ったひとが重く感じることが軽く感じるか、その水によつてそのひとの信心の深淺をはかつていた形迹がある。さきにのべた智猛の發願はこのことをいつたものである。もうひとつは鳩摩羅什の場合である。高僧傳四のかれの傳記は、つ、進んで沙勒國に到り、佛鉢を頂戴し、心に自ら念い言えらく、鉢の形甚だ大なるに、何ぞ其水輕きやと。即ち重くなりて勝るべからず、聲を失して之を下す。母其の故を問うに、答

えて云く、兒の心に分別あるが故に鉢に輕重有リののみとしへ付進到沙勒國。頂戴佛鉢。心自念言。鉢形甚大。何其輕耶。即重不可勝。失聲下之。母問其故。答云。兒心有分別故鉢有輕重耳し。出三藏記集にもほぼ同文である。沙勒國は現カシユガルにありが、そこには智猛傳にあるように「佛文石唾壺し」が存在したのであり。鳩摩羅什傳はなにかの間違いいであろう。鳩摩羅什一二歳の時であつたから三六一年のことであつた。佛鉢はありがた

く臺座に鎮座させていたばかりでなく、移動しておまつりもしていたし、ひとにその重量と感得させては、ありがたみや奇瑞と實感させ、信心の深淺をはかる具にもしていたのである。もちろん四天王が鉢を奉ったなど本當にあらたわけではなく、同じ大きさの鉢を四つ重ねて同じ大きさを一鉢になぞできたわけでもない。みなシヤカの常人に傑出したこと、超人化されていったことを示そうとしたのである。この話は「大唐西域記」その他で中イン

ドで起ったことだと、その場所まで指示して、いゝが、實際どこでつくられたかはわからなかったものでない。それが話にとどまるだけではなく、目で見えようようにし、手で触れ、持ち上げてもみることができたようにしたのが、北西インド、わけでもガンダーラという土地であった。もとよりガンダーラは、人間としての、すなわち歴史に生きた、シヤカが活躍した場所ではない。そのような土地に佛教が勢力をも得、インド佛教の中心地となり、中イン

ドからさえも佛教僧を誘致するほどに成長したとき、そこでは本地垂迹説はもとより、そこがもともと佛教の聖地であったと思わせるため、シヤカ所用の品物が創作され、その創作を正当化するさまざまな由來縁起がまた創作されたのである。佛鉢もその中のひとつ、重要なもののひとつであった。佛鉢が他ならぬガンダーラでできたことは、青石といわれ、青玉といわれ、紫紺に老りかがやくと表現され、あるいは雑色にして黒多しといわれた

からであり、ガンダーラ産の灰黒色系の石でつくられていたことを豫想させたからである。おのずから中インドのあかるい砂岩でつくられたものではなかったことを示している。その作製年代は、四世紀はじめをくだらないことだけがたしかである。しかし、佛鉢作製が、タキシラにおいて佛寺が急激な展開を示す、タキシラ第二期にさかのぼるとすれば、⁽¹⁸⁾説話にあらわれ、大月氏梅檀罽吒王、小月氏國王などもあながち単なるおはなしの中の

人物だとして捨て去ることのできない雰囲気ともかますのである。また四天王奉鉢をいふ古い文獻たゞ、瑞應本起經には、日出三藏記集巻一三に、吳の孫權は支謙と重用したが、⁽¹⁹⁾越々支謙、大教行わるといふことも、經胡文多く、解する者有らば、既にして華戎の語を善くするも以て、乃ち衆本を収集し、譯して漢言と爲す。黃武元年より建興中に至り、出所、維摩詰・大般泥洹・法句・瑞應本起等二十七經なり。(越々)大教雖行而經多胡文

莫有解者。既善華戎之語。乃收集衆本。譯爲漢言。從黃武元年至建興中。所出維摩結大般泥洹法句瑞應本起等二十七經。大正五五、九七〇と。二二〇年代から四〇年代にわたってこの水が譯さるゝかも知れぬ地に既存のものであつた可能性が高い。とすると日瑞應本起經と原典やそれについての四天王奉鉢譚の成立の年代は、ますます梅檀屬昵吒王とふくむ月氏國王が佛鉢奪取したといふ話の時代に近づく。現象のカニシユカ年代は二世紀とみて

大過ないからである。

第三節

ガンダーラとカラコルム

西旅道

中國の一部で罽賓とよばれたガンダーラは、おそくとも四世紀から五世紀前半にかけて、佛法興隆のシムボルたつ天王奉土と称す。佛鉢を中心として繁榮した。そこはシヤカの本地であった。中インドからさえも佛教僧と誘致せしめ、そこで學習せしめられた。一方、ガンダーラ出自の佛教僧も多數輩出し

かからのなかから他のインド地域出身僧ともども中國へ渡りひとが多數あらわした。これに呼應するように、中國からも多數の求法僧がガンダーラに至った。中國からガンダーラに至る僧たちの傳記をみると、第一節で述べたように、ガンダーラ以外で原典を捜求し獲得したひとはいない。ガンダーラ以外でインド佛教の教理を學んだふしは見當らないのである。たとえば、法顯は戒律を捜求したのであるが、北天竺の諸國はみな師師口傳で寫す

へきものがもとよりなかつたので、中天竺ま
 で足をのばしたといひ（法顯本求戒律。而北
 天竺諸國皆師師口傳。無本可寫。是以遠涉。
 乃至中天竺。大正五一、八六四b）。このこ
 とは、カンタラを含む北インド、なにし北西
 インドの佛教は相當に大きかつたが、そこに
 おいてはすべて何萬言もの經論をそらんじ、
 師資相承していた、これが常だつたのである
 から、書寫すべくもなかつた、そこでわがわ
 が中インドまで足を運ばずともえなかつたこ

を言ふ。僧がすさまじい分量をそらんじてい
 たことは、僧傳にあきらかりあり、さういっ
 た僧が中國に來住しておこなつた譯經とは、
 かかりの頭の中にある言語をまづ書寫し、そ
 れをもし中國語に既に熟達していた場合はか
 ら自身が傳譯し、さうでない場合は別人が
 傳譯し、中國僧が漢文に筆受したのである（
 たとえば僧伽跋澄傳に、「符堅秘書郎趙正崇
 仰大法。嘗聞外國宗習阿毘曇毘婆沙而跋澄諷
 誦。乃四事禮供。請譯梵文。遂共名德法師釋

道安等集僧宣譯。跋澄口誦經本。外國沙門曇
摩難提筆受為梵文。佛圖羅刹宣譯。秦沙門敏
智筆受為晋文。(と)。

そういったインド僧がガンダーラから中國
へ行き、中國僧がガンダーラを指した旅程の
うち、どのようなルートを使ったか。ガンダ
ーラと中國とをむすびつけるひとの動きは、
ガンダーラから北上して、まず現スワート地域
にいたり、そこから東へ山をこえてインダス
流域にはいり、インダスを遡上してガレル、

そして多くの場合現ギルギトたゴボルとい
ったカラコルム西脈を經由してゐる。さらに
そこからヒンドウクシユ最東部の峠をこえ
りまの新疆ウイグル自治区に入ってターシユ
クルガンンに出、カーシユガル、そしてクチ
ヤが道路上に要衝としてうかがひがある。カン
ダーラとターシユクルガンンとをむすぶ道路は、
さきに掲載したように、智猛、曇無竭、法顯
のルートに照らしてあきらかであり、さらに
この約二〇〇年後に玄奘はスワートからギル

ギトに至るルートを敘述し、その水が上の行歴
 僧のルートをものまき逆のぼったものとし
 て、往時の行路を證明しているのである。
 すなわち、智猛は、佛の文石の唾壺があつ
 た奇沙國を通つて葱嶺をこえ、波倫につき、
 さらに雪山をこえて平頭河をわたり、カニダ
 ーラに至つた。法顯はホタンで行像をみてか
 ら子合國に至り、僧詔一人がホタンで胡道の
 人につれて別れてカシニミラへ行つた。
 子合國から南行して葱嶺山に至り、於摩國で

安居して竭又國に到つた。カハによれば竭又
 は葱嶺の中にあつ、そこで石造で佛鉢と同じ
 ような色の佛の唾壺をみた。智猛の奇沙國と
 同じである。竭又から西行して北天竺國へ向
 かつたといふ法顯傳は、この竭又はまさ
 しくいまのターシユクルガーンである。一々
 月ほどかかつて葱嶺を度りおえて北天竺に到
 り、つぎ始めて其の境に入る。一の小國あり。
 陀歴と名づくといふ。ターシユクルガーン
 から山岳地帯をこえてつくはじめての國が陀

歴である。陀歴には高さ八丈、足踏八尺の木
 像の彌勒菩薩像があつたといふ。陀歴はいま
 のダレルベリあたり、チラーヌを含む地域で
 ある。ここから、嶺に順い、西南のかた行く
 こと十五日。その道は艱岨で、崖岸は險絶、
 其の山は石ばかり、壁立すること千仞、これ
 と臨まば目眩み、進まんと欲すれども足を投
 ずるに下す所なし、水有り、新頭河と名づく。
 昔、ひとの石を鑿ち路を通し、傍に梯を施す
 あり。凡そ七百を度す。梯を度り已え、懸繩

と躡み河を過^よす。河の兩岸、相去ること八十
 歩を減ず。九譯の記す所。漢の張騫、甘英、皆
 此に至らざりなり。……河を度り、便ち烏菴
 國に到る。(大正五一、八五七〇—八五八〇)
 智猛は、ボロルから他の四人と雪山を度り、
 辛頭河を渡り、罽賓に至った(大正五〇、三
 四三〇)。かれの傳では至って短文で詳しい
 描寫はないが、辛頭河を渡って、法顯と同じ
 ように烏長へいき、そしてガンダーラへ下つ
 たと考へられよう。曇無竭傳は先に引いたと

おう、葱嶺を登り、雪山を度ってから罽賓
 カンタラに到着するまでの描寫が詳しい。
 それから察せられる道中は法顯傳の焼き直し
 かと思われ、ほどに酷似している。法顯はそ
 れから南下して宿呵多へスアト）に入り、
 東へ五日下って捷陀衛に到達している。
 一方、玄奘はカンタラから烏仗那（烏長）
 へ遂に行き、烏仗那から北東へ行き、山や谷
 をわたって信度河をさかのぼった。みちにあ
 やうくけわしく、山谷はうすぐらい。あるい

は繩索をふみ、あるいは鐵鎖をひき、棧道は
 うつらにのみみ、飛梁はあやうく結構してい
 る。棧により、磴をふみ、行くこと千餘里で
 達麗羅（陀歷）川に至る。ここは烏仗那の都
 がもとあったところ。……達麗羅川の中の大
 伽藍のそばに木造の彌勒菩薩像があり、高さ
 は百餘丈。ここから東の方へ行き、嶺や谷を
 こえて信度河をさかのぼり、五百餘里で鉢露
 羅國に至る（口大唐西域記卷三、章巽校點
 本六四一六五頁。曹掲釐城東北踰山越谷。逆

上信度河。途路危険。山谷杳冥。或復縋索。
 或牽鐵鎖。棧道虛臨。飛梁危構。椽杙躡磴。
 行千餘里。至達麗羅川。即烏仗那國舊都也。
 ……達麗羅川中大伽藍側、有刻木慈氏菩薩像。
 ……高百餘尺。……從此東行。踰嶺越谷。逆
 上信度河。飛梁棧道。復危涉險。經五百餘里。
 至鉢露羅國。鉢露羅は智猛の波倫。Ⅱ魏書
 山卷一〇ニの波路であり、鉢盧勒であり、唐
 に言ひ勃律の一部であり、布露とも稱さ小た
 と、ろである。玄奘のルートはか小が親踐し

たか否かを問う前に既にして自然地理に實に
 よく合致する。すなわち、いまのミンゴラ
 邊が曹掲整であるから、そこから北東にスワ
 ート川をさかのぼすこととまが指し示し、コ
 踰山越谷はすなわちホージャハラを東折
 ートシヤングラ峠をこえ、ベシヤムカラに
 出た道すじである。そして、逆上信度河は
 ベシヤムカラにてインダス溪谷に出たこと
 を示し、そこからダレルベリへとインダスを
 逆上することを言ひ、ベシヤムカラとダレ

ルベリとの間がすさまじいことは現代もなお
 證せられるところであり、この間の描寫は法
 顯・曇無竭のそれと一致していることが注自
 されよう。『大唐西域記』のこの描寫は、四
 字句の聯續で、いかにもありきたりの語呂あわ
 せのようは一見みえりけれども、法顯等と比
 較した場合、簡にして要を得た實情の描寫で
 あることがわかるのである。

このように確實にわかる行路描寫とその間
 の所町、葱嶺・雪山などを手がかりに行歴傳

が往來したガンガラー・ターシユクルガーン
 (奇沙、竭叉)間のみちすじを再構成するこ
 とができる。それは決してターシユクルガ
 ンからワツハーンを西進するものでもなく、
 またボロルからカーシユミラーへむけたもの
 でもない。東はミンタカ、西はボロギルダ
 ルコトにはさまれた諸峠を過ぎるのが葱嶺通
 過にほかならない。實際にこの地方に至った
 マツクスリクランバークに従⁽¹⁹⁾、ミンタカ
 とか、ワフジールをこえてキリーク峠とよ

道より、古くはイシユコマン、ボロギル^カルコトを用いたかもし水ない。そうすれば、法顯の行紀に波倫があらわ水ず、陀歴が葱嶺通過後、北天竺最初の國と記さ水た理由も判明するのである。すなわち白鳥庫吉もすでに認めたとように波倫をまわらず、雪山^ゴを^トて陀歴にいたったと。ガルコト峠をこえ水は、道は自らヤーシーンに至り、グーピスに出る。グーピスから山をこえてダレルベリ方面へ出たからである。この水に對して智猛は川沿いの

えらんで波倫に出た。波倫すなわち鉢露羅と^コ大唐西域記^ト卷三は、^コ大雪山の間に在り、東西に長く、南北は狭い^トと記すので、いまのバルテイトまで及んでいたかどうか、疑わしい。そこからはインダスの名高い懸度のみちを下って中途からスワート川流域の沃野に出るのである。法顯は烏仗那の南に宿呵多ありと^{ウツ}テイヤ^ナとスワートへ玄奘は^蘇婆^伐窳^堵川と表記するのみで、兩地も區別しないが、この表現が宿呵多の正確な音寫で

あるかどうかは判定できなからと識別した。これは法顯の行紀にのみみえる。かゝる宿呵多に割肉貿鴿處があるとするへ大正五一、八五ハαβ)。玄奘は日大唐西域記に、曹掲釐城の南二〇〇里、大山のそばに摩訶伐那伽藍ありとし、その伽藍の西北へ三、四〇里下つたときろに摩愉伽藍ありとし、この伽藍の西方六、七〇里にあるストツパーバが割肉貿鴿處だとして、一〇〇里に現イラム山にまた曹掲釐城の南四〇〇里で現イラム山に

擬せられる鹽羅山に至るとするから、ミンゴラとイラム山との中間地點からほぼ西方九〇里一〇〇里にこの聖迹があったことにならう。もし玄奘の聖迹分布にして正しいとすれば、割肉貿鴿處をたよりに、宿呵多國なる地域はスワート川の對岸（右岸）を十分含み、左岸のバリコトから西方の地域とならう。すると、法顯が鳥長の南方に宿呵多ありとしたことにもとるが、鳥仗那はスワート川の流域をテイラートを経てカラームに至る地域と

みれば解決されたであろうし、川に沿った地域であり、しかも川はほぼ南流するのであるから、宿呵多が烏長の南にあるとするのも誤りであるとはいえない。

法顯は宿呵多國から東のかたへ五日下って捷陀衛國に到る。捷陀衛から南へ四日行程に弗樓沙國があつた。弗樓沙國はそこに佛鉢の寺へ慧應は佛鉢寺において無常となつた。があり、また罽膩伽王大塔があつたから、玄奘が記す布路沙布邏城である。玄奘の布路沙布

邏にはさきに記したとおり、城郭内北東に佛鉢をもと安置した建築迹があつたし、城外南東八、九里に迦膩色迦王大窣堵波があつたからである（『大唐西域記』卷二）。法顯の捷陀衛國は、是、阿育王の子法益の治めし所の處なり。佛、菩薩たりし時、亦此の國に於て眼を以て人に施しなり。其の處も亦大塔を起し、金銀もて校飾す。『大正五一、八五八』とあるから、いわゆる以眼施人處塔の所在地である。玄奘は、迦膩色迦王大塔の寺

から北東へ五〇餘里行き、大河を渡って布色羯邏伐底城へ行き、城北四、五里に千生捨眼處、率堵波をみた。したがって法顯の捷陀衛國とは、布色羯邏伐底城 Puskalavati、いまの千ヤールサグにあるバールーヒサル遺跡・シエイハーンリゲリ遺跡である⁽²⁰⁾。宋雲・惠生は、洛陽伽藍記の卷五によると、正光元年に乾陀羅國に入るとし、そこに鬼神を祀る嚧達救勲がいたことと記す。宋雲・惠生はこのひとに北魏の詔書を渡す目的があったから、まず

このひとの幕營に行った。鳥場からまっすぐそこへ行き、そこから西へ五日行程で捨頭施人處、つまり法顯が捷陀衛國の東七日行程にあると聞いた以頭施人處たる竺刹尸羅國へタクシヤシラシへ行く。さらにそこから西行三日へ漢魏叢書本による。他本は三月とする。で辛頭大河に至り、この水を渡って西行三日(漢魏叢書本による。他本は十三日とする)で佛沙伏城。また西行一日で挑眼施人處、すなわち法顯の捷陀衛國、玄奘の布色羯邏伐底へ

至り、さらに西へ一日行程で乾陀羅城に到着して、い。乾陀羅城の東南七里に雀離浮圖、すなわち迦尼色迦（漢魏叢書本は、迦尼迦色迦とする）大塔があるといふから、乾陀羅城は玄奘の布路沙布邏城であり、法顯の弗樓沙國である。なお宋雲・惠生の佛沙伏城は蘇達拏本生にまつわる聖迹からみて、玄奘の跋虜沙城、現シヤーバーズガリにほかならない。法顯は城郭名であるはずのフルシヤアラを弗樓沙國とし、またポシユカラীগアテイを

その名稱を音寫せず、捷陀衛國とよんだ。のちのバジャラに、洛陽伽藍記に楊銜之が編んだ宋雲・惠生行歴記は、慧生行傳に、宋雲家記に、道藥傳に、慧生行傳にもとに合糅したものであるが、そこでは乾陀羅國といふ廣域の面的ひろがりをもつ國が存在したらく示している。そのひろがりの中に嗽達救熱の幕營所在地から乾陀羅城まで、フシヤシラ、インダス河、佛沙伏城、ポシユカラীগアテイが存在しているといふことはい。

一方玄奘は『大唐西域記』において『洛陽伽藍記』の場合と同じように、廣域の健馱邏國（東西千餘里、南北八百餘里）をいい、その中に諸城郭があったことをいっている。玄奘のこの國域は、東はタクシヤシラーを含まず、信度河（インドス河）までで、その渡渉地點に渡河集落として烏鐸迦漢茶城、その北西に婆羅覩邏邑があり、また布路沙布邏までの間に跋虜沙城、布色羯邏伐底城があった。宋雲・惠生時代（六世紀はじめ）と國域は若干異

なる。これは當時の近隣との勢力関係を反映したものである（後述）。それは暫く措くとしても、ここで特に注意したいのは、法顯の健陀衛國である。これは宋雲・惠生時代や玄奘時代と異なつてガンダーラなる廣域國をのべず、北方のスワート地方にっいても、烏長と宿呵多と、うごくとくに二つに細分している。そのよくなとらえ方は、『洛陽伽藍記』・『大唐西域記』の烏場・烏仗那にたえて見ると、とがでない。ところが法顯は、ガンダーラ

の西になり、那竭國については鹽羅城・那竭城を明記して、那竭國が面的な名をもち、そのといていっているのである。法顯時代の捷陀衛國とは何であつたのか。此の記述のすすめ方からは、これが面をおおう地域名であるよりは、城郭名とみるべきであらう。弗樓沙國はまさしくゾルシヤ・ゾラをあらわしたものだからである。玄奘の時代にゾルシヤゾラはすでにあつたこと、その殷賑を烏鐸迦漢茶城にゆづつていたことが知られる。一かかればガン

ダラ國の大都城はゾルシヤゾラだと記した。口洛陽伽藍記にはゾルシヤゾラに相當する城郭を乾陀羅城と記すので、玄奘時代にさきだつた廣域のガンダラ國の主城（國都）がゾルシヤゾラであつたことと、うかがわせている。法顯以前にガンダラな廣域の國が存在していたことは、阿育王傳に散見されるが、なかんづく、その卷三、駒那羅本縁の條に、一時に北方に國有り。乾陀羅と名づく、其の國に城有り。得叉始羅と名づく（時北方有

國。名乾陀羅。其國有城。名得叉始羅。大正五〇、一〇八トとある。タクシヤシラーがガンダーラ國の域内にあったことがわかった。以上より、法顯當時のガンダーラは、少くともタクシヤシラーを含まれたインダス兩岸にまたがる地域であり、その主都、中心地は現チヤールサダの北方、スワート川を挟んだ對岸にある、バララヒサル、シエイハイン、デリーを含む都市遺跡群、ポシユカラ、ヴァテイーであった。

第四節 行歷僧行程の西限那竭國

中國僧のインド求法の一大目的がガンダーラにおける教學の諳受、梵書語の習得であったことは既に述べたが、そういつたひとたちが歩を進めてガンダーラから佛教の本源地たるガンジス川ヤムナー流域にシヤカの足跡を求め、また法顯のようにガンダーラでは原典書寫が不可能でないとして、そちらへ向うことは、自然のことであった。しかし、ここです

に留意しての現象は、ガンダラに到達した
 佛教僧が東南をそのようにめぐすのではなく、
 ひとまず西へ歩を進めることが多かったこと
 である。ひとり中国僧ばかりではなく、イン
 ド各地からガンダラに集まっていた僧たち
 もガンダラから西へ一歩進んでそこを重視
 していた。中国僧もインド僧も、すなわちチ
 ガラハーンラとその關心事とし、当時の佛僧に
 とってチガラハーンラ行きはひとつのはやりの
 ようでさえあった。

法顯傳によると、慧景・慧應・慧鬼・
 道整が長安出發當時の法顯グループである。
 かへりには張掖で別の求法グループたし智嚴・
 慧簡・僧紹・寶雲・僧景りに遇った。二つの
 グループは合流して夏坐したのち、法顯グル
 ープが先發し、鄴善・烏夷と進み、烏夷へカ
 ラ・シヤフルで再び智嚴グループが追いつ
 いた。法顯らは符行堂公孫の援助をえたが、
 智嚴・慧簡・慧鬼の三人は行資をえられず、
 高昌へ東行してそこで行資を求めることにな

った。この三人はのち法顯傳に再び名を
よさない。一か智嚴は前にのべたようにガ
ンガララに行きつき、佛陀跋陀羅も伴って長
安に行き、そして長安では寶雲とともに跋陀
羅に隨從したことがわかつている。

法顯を頭とする全八人は、烏夷からタラ
マカンと縦斷してホタンにいたす。慧景・慧
達・道整の三人はホタンを先發して竭又に行
った。他はホタンの行像をみて僧紹(韶)一人
がカシニシムニラにむかい、法顯・慧應・慧

達・寶雲・僧景がホタンから竭又へ行き、慧
景以下の三人と合流した。この八人がそのま
まウツデイヤーナに至ったのである。慧景・
慧達・道整はここから再び先發して、佛陀
の那竭國へ、すなわちナガラハラへ向つて
いす。ウツデイヤーナからスワートを経て、
ガンガララに至った法顯らりうち、慧應はポ
ルシヤラの佛鉢寺で死んでしまった。ま
先發した三人中、慧景はそこで病氣になり、
道整はその看病をしていたから、慧達一人が

プルシヤプラにもどって法顯と再び會った
 のである。寶雲・僧景は慧達とともにプルシ
 ヤプラから中國へ歸ったと法顯傳には記し
 ている。一行のうち慧景と道整はナガラハー
 ラに居、寶雲・僧景・慧達は歸國してまい、
 慧應は死んだから、残った法顯一人がナガラ
 ハーラに向い、そこから慧景・道整とともに
 南界の小雪山へ現スヒーニンガルとこ名、
 羅夷へ現パラチノール・跋那へ現バヌー
 にむかい、中インドを指したのであるが、病

と得た慧景は山ごえのとき、また無常となっ
 たから、法顯と道整とが中インドへむかった。
 ついでに言えば、かれらはパルタリプトラの
 マハーヤーナ寺に滞在したが、道整はそこに
 残ってかえらなかつたので、あとは法顯一人
 になったのである。このように法顯・智嚴ら
 のインド求法行をみても、中インドまで達す
 るとはいたってわずかだった。大半はカン
 ダーラヤナガラハーラまでで、この地でほと
 んど目的を達したのである。カンダーラが

ら中國へ引きかえしたことが多かったのである。
 ナガラハ一東界の鹽羅城は、「佛頂骨精
 金」で名高かった。「佛の頂骨」(肉髻骨)
 なる不思議な佛の遺物もまつていたのであ
 る。那竭國王は頂骨をたいへん敬い、抄奪を
 考慮してナガラハ一の豪族八人に各各印章
 をもたせ、封印させて護っていた。朝早く八
 人はいっしょに來て封印を確認してから扉を
 あけた。開けてから香汁で手を洗いきよめて
 頂骨を出し、精舎のそとの高座上に七寶の圓

い臺にのせよ。そこから瑠璃の鐘をかぶせ、
 外側全體を寶玉で飾る。骨は黄白色で、方圓
 四寸。上がもり上っているという。日ごと頂
 骨を出すと、精舎の人は高樓に登って大鼓を
 打ち、螽蟴を吹き、銅鈸を叩く。國王はこれを
 きき終って精舎にもうでる。精舎の東門から
 入って華・香で供養し、順次頂骨をおしいた
 だいて西門より出る。王は毎朝かく供養し禮
 拜してから政をおこなう。居士長者もまず供
 養し、そして家事を修める。……供養がすべ

て終了と頂骨を精舎の中にかえす。七寶の解
 脱塔があり、扉を開いたり、しめたりして
 了。高さは五尺ほどで、この中に頂骨を入
 る。この精舎の門前には毎朝つねに華や香を
 賣す人が出、頂骨を供養する人はみなこれを
 買う。この國の人ばかりでなく諸國の王も
 たつねに使をつかわして供養して、大正五
 一、八五八(一)。

那竭の國城は、ディパンカラジャリタカ
 の本生處に擬せられていた。受記されること

になる儒童メーガが定光佛(燃燈佛)が来る
 ことを知り、銀錢で五莖の華を買い、定光佛
 に供養したところ、その華はみな空中でとど
 まり、定光佛の頭上を飾ったという。そこが
 那竭國城である。城中には、佛齒塔とがあ
 った。佛齒供養も頂骨の法と同じであつたと
 いう。城外北東一ヨリジャナに谷の入口があ
 り、そこに精舎があつて、佛の錫杖をまつ
 ていた。錫杖は牛頭梅檀製で、長さは一丈六
 、七尺で、木筒に入れてあつた。百千人が

ち上げようとして動かさないほど重いとい
う。佛鉢と同じようなまつり方である。谷を
入って西へいくと、佛の僧伽梨をまつる
精舎があった。この袈裟は雨乞いにつかわれ
ていた。那竭城の南へ半マイルジャナ行くと石
室があった。山に搏せまって西南に向いていた。
この石室に佛影があった。石室にはいつ
て一〇餘歩のところで見ると佛の眞の形のよ
うで、金色の相好は老かかやき、近づくとぼ
んやりし、ぼんやりとかすんでいよう。あちこ

ちの國の王が工畫師を派遣して模寫させてけ
れども、本物にはとうてい及ぶかない。千
佛がみなこの中に影を留めていると那竭のい
とたちには言っている。佛影窟の西四〇〇歩ほ
どに佛が在世のときに剃髮し、爪を剪ったと
ころがあり、髮爪を入れて佛は諸弟子とも
に塔をつくり、將來の塔法としたといふ。高
さは七、八丈で、法顯はこの塔を見た。塔の
そばに寺があった。七百餘僧を收容していた。
このあたりに羅漢や辟支佛の塔が千をまつた

数えしほど多数あつた（大正五一、八五八〇
一八五九〇）。

智猛は、可高僧傳上によると、佛鉢と頂戴
してガンダーラから千三百里行き、可迦維羅
衛國レ（三本宮本は惟につくる）に至り、佛
髮・佛牙・肉髻骨を見、佛影の迹をはつきり
みた（復西南行千三百里。至迦維（惟）羅衛國。
見佛髮佛牙及肉髻骨。佛影跡炳然具存。）佛
髮はナガラハラの髮爪塔のことかもし小な
いが、はつきりしない。佛牙は可大唐西域記

可迦溼彌羅國の條に、長さ寸半、黄白色のも
のガストウーバの中におさまら小ていたとあ
るが、智猛のころは水がカーシユミラーにあ
つたことを證するものはなく、たとえ智猛傳
の巖窟がカーシユミラーだと見ても、
そこから千三百里行つたところでもみたといふ
佛牙はカーシユミラーのものではない。佛牙
を佛齒と考へるならば、可法顯傳上に言ふ那竭
城中の佛齒塔レのことであろう。肉髻骨と
は、頂骨のことである。そして佛影についで

は言うまでもない。智猛はやはり法顯らと同
 いようにナガラハ一ラへ行つたのである。迦
 維羅衛はふつうカピラヴアストウのこととい
 われるが、こゝにいた佛の聖遺物があつたの
 はあきらかにナガラハ一ラであり、カピラヴ
 アストウではない。(那)迦〔維〕羅衛と表記さ
 れていたものが、傳寫により「那」が脱落し、
 迦羅衛では意味不通のために、カピラヴアス
 トウを示す維字を附加してしまつたと考えて
 おく。後世、ナガラハ一ラよりカピラヴアス

トウの方が佛誕の地としてよく知られていた
 であらう(21)。
 曇無竭は、ガンガ一ラで佛鉢を禮拜してか
 ら同行沙門一三人とともにまた西のかた行
 き、辛頭那提河、漢言は師子口なり、に至り
 河に縁りて、西のかた月氏國に入り、佛の肉
 髻骨を禮拜し、(22)へ復西行至辛頭那提河。
 漢言師子口。縁河。西入月氏國。禮拜佛肉髻
 骨。(23)と、高僧傳卷三にみえり。佛
 の肉髻骨を禮拜したのであるからナガラハ一

ラに行つた。辛頭那提はインダス本流かもし
 水ないし、支流のスワート川かカーブル川か
 もし水ない。インダス本流とすると、タクシ
 ヤシラーに曇無竭は行つたのであろう。傳記
 の文章の順からいくと、佛鉢をポルシヤポラ
 で禮拜したのちに、インダスを渡つたことに
 なる。その水ではおかしいと考へたら、辛頭
 那提は支流と解釋せざらねない。いづれに
 せよ、この河を渡つて西へ行き、月氏國へ行
 った。月氏國すなわちナガラハラである。

こゝで想いおこさしめるのが、日法顯傳にみ
 える月氏國である。スリランカで法顯がきい
 た佛鉢巡回譚に、佛鉢が今在捷陀衛。竟若
 干百年當復至西月氏國レ（大正五一、八六五
 c）と。西月氏國レに至るのではなく、日
 西のかた月氏國レに至るのである。すなわち、
 東月氏國に對する西月氏國ではない。日いま
 ガンダラーにあり、その水から西へむかつて月
 氏國へいくのである。月氏國がナガラハラ
 ラ國であることは、日高僧傳卷六慧遠傳レ

大正五〇、三五八〇)に、「慧遠」聞く、天竺に
 佛影有り。是佛、昔毒龍を化して留まる所
 の影なり。北天竺月氏國の那竭呵城の南、古
 仙人の石室中に在り。……(遠聞。天竺有佛
 影。是佛昔化毒龍所留之影。在北天竺月氏國
 那竭呵城南古仙人石室中。)とあることが證し
 ている。

五世紀のはじめころには既にナガラハラ
 には、(1)佛頂骨(肉髻骨)、(2)佛齒(佛牙)、
 (3)佛錫杖、(4)佛袈裟、(5)佛髮爪、(6)佛影、そ

して(6)定光佛本生處が設定され、ほかにも阿
 羅や辟支佛のストーリーなど、多くの聖迹・
 聖遺物があつた。道普が供養した尊影とはこ
 の佛影であり(供養尊影。頂戴佛鉢。四塔
 道樹足跡形像無不瞻覲。…大正五〇、三三七
 C)、かほもオランダからナガラハラ
 ラにやつてきたことがわかる。『釋迦方志』
 遊履篇にみえる道藥は、『洛陽伽藍記』卷五
 に楊銜之が引用する道藥と同一人物であるこ
 とはシヤウアンヌが定めた(22)が、太武末年に疏

勒道に従って入り、懸度を経て僧伽施にいり、
 再びもとの道を通つて中國に歸つたへ後魏太
 武末年、沙門道藥從疎勒道入。經懸度。到僧
 伽施國。及返。還尋故道。著傳一卷。大正五
 一、九六九C)。太武の末年は廢佛中のこと
 もあり、一應五世紀中ごろにインドにやつて
 きたらととみる。日洛陽伽藍記に引用する
 道藥傳によると、佛頂骨、佛袈娑、佛錫杖、
 佛牙佛髮、佛影があつた。頂骨は下に手指が
 入りほじの孔があり、蜂窩をとおびきよう

であつたとといふ(下有孔。受人手指。閃然似
 仰蜂窩)。佛袈娑・錫杖があつたのは耆賀濫
 寺といふ寺であつた(至耆賀濫寺。有佛袈娑
 十三條。以尺量之。或短或長。復有佛錫杖。
 長丈七。以木篔簹盛之。金箔貼其上。此杖輕重
 不定。值有重時。百人不舉。值有輕時。一人
 勝之。) また佛髮佛牙の所在をナガラハラ
 國城中といていふ(那竭城中有佛牙佛髮。並
 作寶函盛之。朝夕供養)。

七世紀三〇年代のほじめに玄奘もこゝにいっ

た古来名高かつた十伽らハ一ラの聖遺物・聖
 迹をみたのであろう、口大唐西域記口に記録
 してある。すなわち口大唐大慈恩寺三藏法師
 傳口で佛頂骨城といふ鹽羅城には、棟に彩畫
 し、柱を朱塗りした重層建造物があり、その
 第二層にいろいろな遺物が納めてある。頂骨
 は寶貝函に入水、七寶の小さいストウパーに安
 置してある。蓮の葉形の如來の髑髏骨が寶函
 に入水封印してやはり七寶の小さいストウパー
 に入水安置してある。また柰へからなし口ハ大

きさの如來の眼睛も寶函に入水、七寶の小さ
 いストウパーに安置してある。この三つのう
 ちあとのふたつは玄奘以外にた水も記録を残
 していない。玄奘までにあらたにつけ加わつ
 た聖遺物かもしれない。それに口大唐西域記
 にはこの鹽羅城の重閣中に、寶函に入水た袈
 裟とやはり法顯と同じく梅檀製の錫杖が寶函
 に入水て安置してある。法顯
 當時この二つは那竭城附近口北西口の谷口と
 谷中西方との二つの精舎に入水したあつたの

である。玄奘時代までに移動したのである。その間、道楽が訪れた五世紀中には、二つとも耆賀濫寺にあった。聖遺物は移動する二とがあつたのである。ナガラハラの國城では玄奘は、佛齒を安置してあつたといふ巨大なストゥーパのあとだけを見た。聖遺物は移動もし、消失してしまふこともあつた。玄奘の記す定老佛本生處は詳細をきわめるが、これも以前とは動いてゐる。ナガラハラ國城の南西一〇里に如來が中インドより虚空を凌

いで遊行教化し、この國に遺跡を残した。そのあとを記念して建立したストゥーパがあり、すぐ東に佛童太子が定老佛のために華を買つた處があるとする。法顯はその水を國城中に入れてゐる。國城東方二里に太子が鹿の皮衣を敷いて髪毛を敷き、定老佛のお通へになる路の泥をおおつて受記をうけた處がある。法顯はこの水を記してゐない。日慈恩傳には城東二里に受記處があり、その南に掩泥處があるとして、やや西域記より詳しい。

いずかにして、ナガラハ一ラには四、五世紀、國城と醯羅城とを中心にして、佛頂骨だとか、佛袈裟だとか、佛錫杖だとか、佛齒、佛髮爪とか、信ずべからず如來の遺物がある。ちこちにまつられ、一かもそのうゑに定光佛本生處なるものがつくられ、ストウーパをたてて記念し、巡禮の要所になつていたのである。これは東隣りのガンダーラと全く同趣の意圖から出た企畫といふほかない。ガンダーラばかりでない。ウツデーヤーナースワート

として同じである。修業中の菩薩であつたとき自分の眼玉まで布施し倦むことがなく、そのための千生に王となつた。その眼玉を布施した處は、以眼施人處とか千生捨眼處といわれた。西域記にはそこのポシユカラ一ツアテイ一の北四、五里と一、ストウーパが建つていたといひ、法顯も以眼施人處としてポシユカラ一ツアテイ一の聖迹とする。跋虜沙(佛沙)の、城外はヅイシユヅアソタラ"ジャータカ的事迹に満ちていた。タクシヤシラーは、如來

が菩薩行を修めていたとき、大國王チャンド
ラプラヴァと、婆羅門に乞われ、自らの頭を施し、過去世に施した九九九頭と
あわせて千頭目となり、満行したところであ
った。法顯は以頭施人處とし、タクシヤシラ
しを解いて截頭と譯している。タクシヤシラ
の東方にマハサツトヅア王子が飢えた虎
にわが身を施した處、法顯がここを投身餓
虎處といった場所があった。スワートには、シ
ビ王が菩薩行を修めていたとき帝釋は鷹にな

な聖遺物・聖迹があったからであるが、ナガ
ラハールは、そちらに關し、またそちらを軸に
してながめると、當時ガンガラ、ウツデー
ヤーナリスワートと同じ性格の佛教文化圏に
あったのである。そうだった地域へ巡歴し、
あるいはそこから出發した中國・インド僧が
これより西へ歩を進めた形跡はない。五世紀
までは、この地域がインド佛教のほとんど唯
一の中心であった。次の六世紀に至り、佛教
地圖は一變する。これは次章に詳述しよう。

第五節 佛影とその波及

ガンダーラ、ウツアイヤナリスワート、
 そしてナガラハリラは歴史上のシヤカが活動
 しなかつた場所である。そのためこの地方の
 いとびとは、佛教が上向いたとき、四天王奉
 上という佛鉢なる具體も創造して、佛鉢があ
 るから佛法が興隆するのだという理由づけを
 おこなつた。そのうえ、まさかシヤカの本地
 でもないのに、シヤカ一生の事迹を記念する

場所をつくり出すわけにはいかなかつた。そ
 うすればその場所は虚偽であり、佛法の殷盛
 も根本から崩れるのである。そこでかれらは
 本生譚をとりあげて、本生處なるものも各地
 につくりつけていった。本生譚であれば、現
 實のシヤカ的事迹に直接に抵触しはしないか
 りである。しかもあまたの本生譚のなかでい
 ちどろしく布施行にかかわるものばかりが採
 用された。自己犠牲の布施行である。ガンダ
 ラ等の地は、佛鉢・本生處の創造ではまだ

不足であった。さらに佛教興隆の因を補強し、この地の佛教を正當化するために、如來が空を凌いで當地に飛來し、教化したのである。はなしをつくり出したのである。

法顯傳には、ウツデーヤーナの條に、「常に傳えて言えらく、佛、北天竺に至り、とは、即ち此の國に到るとなり。佛、足跡を此に遺す。或は長く或は短きも、人の心に念ずるに在りと。今に至るもなお爾り。及び衣を曬^{さら}しし石、惡龍を度しし處、悉く亦現に

在り。石の高さ丈四尺、闊さ二丈許り、一邊平かなり。一(常傳言。佛至北天竺。即到此團也。佛遺足跡於此。或長或短。在人心念。至今猶爾。及曬衣石度惡龍處。悉亦現在。石高丈四尺。闊二丈許。一邊平。大正五一、八五八(と。またナガラハラの髮爪塔は、佛がここで髪を剃り、爪を剪り、そ水でもって塔をつくり、將來の造塔法もおしえたのであると。い。『大唐西域記』卷三烏仗那國の條は、濯衣石、如來足所履迹とあり、度惡龍處

の西南三〇餘里に足迹、その下流三〇餘里に濯衣石と置いていり。小たつとも悪龍と度一たのちに如来が迹をとどめた聖迹である。すなわち悪龍とは阿波羅羅龍王であり、その教化である。アパララ龍泉は蘇婆伐窣堵河^{*Subhavastu} (Skt. Subhavastu) (慈恩傳には蘇婆薩堵^{Subhastu} [Skt.] の源である。この龍は、迦葉波佛のとき、生まれて人趣に在り、名づけられて殊祇と曰った。深く呪術を閑い、悪龍を禁禦して暴風をなさしめなかつたので、國の人

は之に頼りて以て餘糧を蓄えた。居人衆庶は恩に感じ徳を懐しみ、家ごとに(一)斗の穀(物)を税^{とりた}て、以て焉^{これ}を饋遺^{おくりもの}とした。既に歳を積んだ時、或は課^{わりあて}を逋^{のが}るる有り。殊祇、怒を含み、願わくは毒龍と爲りて風雨を暴行し、苗稼を損傷せんと。命終の後、此の地の龍と爲る。泉は白水を流し、地利を損傷した。釋迦如来の大悲、世を御^{おさ}め、此の國の人が獨り斯の難に遭^あひこくと怒み、降神して此に至り、暴龍を化せんと欲した。執金剛神の杵、山崖を

撃ち、龍王震懼し、乃ち出でて歸依し、佛の
 説法を聞き、心淨く信悟した。如來は遂に制
 して農稼を損ずる勿れと。龍の曰えらく、
 凡そ食す所有るは、頼りて人田を收む。今
 聖教を蒙るに、濟給し難きを患る。願わくは
 十二歳に一たが糧儲を收めんことをと。如來
 全覆し愍んで焉を許す。故に今十二年に一た
 が白水の災に遭ふ(一章翼校點本、六〇頁)。
 日佛所行讚山卷四、そして日大智度論山卷九
 はこのアパララ龍王説話を北天竺月氏國の

ことと書いていふ。

ナガラハ一國城の南西一〇餘里にあつた
 と日大唐西域記に記すストウパは、如來
 が中インドより虚を凌ぎ遊化してその迹を降
 した場所であつた。何を遊化にか。すなわ
 ちここでも龍王であつた。そしてその龍王の
 ために如來は自身の影を殘したといふ。佛影
 窟の由来である。如來が迹を降した場所のス
 トウパからさらに南西へ一〇里ほど行くと
 小さい岩山があり、そこに伽藍があつたと日

西域記には記す、この伽藍の西南にはけわい谷があり、崖がきりたつて壁立し、瀧がとびちつていた。その東の崖に大洞穴があつて入口はせまく、中はくらしい。そこにむかし瞿波羅（ゴーパーラ）龍がいたのである。昔、如来がまだ在世のとき、この龍は牧牛の人であつた。王に乳酪を供せんとしてその進奉宜しきを失し、譴責を獲て、心に怨恨を懐いた。そこで金銭を以て華を買い、定光佛授記のストウパーパを供養し、願わくは悪龍となつて國

と破り國王を害せんと。石壁へ行き、身を投げて死に、遂にこの石窟に居て大龍玉となつた。そこで穴を出て本の惡願を成ぜんと思つた。適まさにこの心を起したとき、如来は已に此の國の人が龍に善されるのを愍れにおもわれ神通力を遣らして中インドより至つた。龍は如来を見て、毒心もおさまり、不殺戒を受けし正法を護らうと願つた。そこで如来に請じらるは、常にこの窟に居て諸の聖弟子は恒に我が供養を受けよと。如来告げて曰く、吾

將に寂滅せんとする。汝の爲に影と留め、五羅漢をして常に汝の供を受けしめん。正法隱没すは、若し毒心を奮怒せば、當に吾が留影を觀すべし。慈善を以ての故に毒心に止むべし。此の賢劫中の當來の世尊も亦汝を悲愍し、皆影像と留めん。(章巽校點本、四五―四六頁)。

佛影窟の由來は、東晉佛陀跋陀羅譯の佛說觀佛三昧海經の卷七觀四威儀品中に詳細にわたる説明がある。トどいて來は那乾訶羅

國にある古仙山の、蒼葡萄華林、毒龍池側の青蓮華泉の北、羅刹穴中、阿那斯山の巖南に到つたと名づけるのであるから(云何名如來到那乾訶羅國古仙山蒼葡萄華林毒龍池側青蓮華泉北羅刹穴中阿那斯山巖南)にはじまる毒龍教化である。全譯すると次のとおりである。

その時かの穴に五の羅刹がいた。化して女龍となり、毒龍と通じた。龍は復た雷を降らせ羅刹は亂行したから、飢饉や疫癘が已に四年も續いてゐる。那乾訶羅國王弗巴浮提は驚

懼し、天神地祇をまつつていのりが益ない。いろいろな呪師を召して毒龍を呪詛させようとしたが、かえって羅刹の意氣は盛んになり、呪術もきかない。王はそこでこう考えた。たしか神わざのひとがあるば、この羅刹を驅逐し、この毒龍を降参させらるのだが。自分の身のほかは何も惜しくない。何でものぞみをとらせるにと。さるバラモンがいて、聰明で智慧があった。かゝる大王に白すには、迦毘羅城の淨飯王の子は、誕生の日に萬神が侍

御し、七寶をまつて瑞祥を降らせた。阿私陀相です。國をすべればきつと轉輪聖王になるもし天下を樂わなければ自然に佛と成りましよう。いまは道を成じて釋迦文と號し、巨身は丈六で三十二相八十種好をそなえ、足下には蓮華、項には日のような光をおび、身相は端嚴で眞の金山のようです。王はこれとみて心大いによろこび、佛の生誕の地に向つて自ら歸依して作禮し、もしバラモンの言葉がうそでないのなら、佛が出世して釋迦文とよ

ぼろいひとがいののかもしれぬ。一か、わた
 くしども法に相しあいと、却後九劫ですなめち
 釋迦文とよばれる佛がおいでになるはずです。
 どうして今日佛といふまばゆいものが已に興
 っているのでしょう。それならどうして哀ん
 で此の國にまでやってきてくだらないので
 しょうか。空中に聲がして大玉に告げて言っ
 た。汝よ疑う莫れ。佛釋迦牟尼は精進勇猛、
 九劫を超越していとよと。この言葉を聞きおわ
 ってまたあらためて長跪し合掌して讚歎し、

佛は明慧に通じておられる。どうかわたしの
 心をお察し下さい。願わくは慈悲の光を屈し
 て此の國に臨まれんことをと。その時香烟が
 佛の精舎に至った。それは白琉璃の雲のよう
 で、佛を七まきめぐって金蓋を化作した。そ
 の天蓋に鈴があつた。たえなる音聲を出し、そ
 の音いろは佛を請じ、比丘僧を請じた。その
 時如來は諸比丘、諸の六通を得た者に命じて
 自分のうしろに隨従させ、那乾訶羅王弗巴浮
 提の請を受けたのである。

大迦葉の徒衆五百は琉璃の山を化作した。
 山上にはみな流泉の浴池・七寶の行樹があり、
 樹下にはみな金床銀光があり、光は化して窟
 を爲り、大迦葉は此の窟中に坐し、常に坐し
 て臥せず、諸の弟子に十二頭陀を行ぜしめた。
 その窟のある山は雲のようになり、猛風より疾く、
 古仙山に詣った。

大目犍連の徒衆五百は百千の龍の盤身を化
 して座を爲った。龍の口は火を吐き、金臺七
 寶床座を化成した。寶帳・寶蓋・諸幢幡まで

みなことごとくそなわり、目連はその中に居、
 琉璃のひとのようになり内外すきとおろし、那乾訶
 に詣った。

舍利弗は神通力を以て雪山の白玉を化作し
 て窟を爲り、均提など五百沙彌は七寶窟に坐
 って雪山を圍繞した。時に舍利弗は白玉窟に
 坐って黄金の人のように金色の光を放った。
 その光はいろいろの色をまじえて雪山にてり
 はえ、大法を敷揚し、沙彌は聽受し、その
 の國にいたった。

大迦梅延はその眷屬五百の比丘と蓮華を化
 作した。その水はあたかも金の臺うてなのようである。
 比丘は上に居り、身下より水を出して化して
 流泉を為すが、諸の華の間を流水、水は地に
 たたりない。上には金の天蓋があつて比丘を
 いや覆つて、亦その國に往つた。このように
 千二百五十の大弟子は各各五百の比丘を有し
 ていろいろな神通を作し、舍利弗・目犍連等
 のごときは、身を虚空に踊らせ、鴈王が翔ぶ
 ようにしてその國にいきいたつた。

そのとき世尊は衣と著し、鉢を持ち、阿難
 に言いつけて尼師檀(23)を持たせた。そのとき世
 尊の足は虚空を歩む。佛が足を擧げたとき、
 四天王・釋提桓因・梵天王・無數の天子・百
 千の天女は佛を圍繞すこと七めぐり、佛の
 ために作禮し、佛のいしるゝに侍従した。
 そのとき世尊は、項に金光を放ち、一萬八
 千のいろいろな大化佛を化作した。一いしるゝの化佛
 はまた光明を放つた。こりようにして項の光
 はまたまた一萬八千のいろいろな大化佛を化

作した。このよくなたくさんの佛たちは相次ぎ、虚空中に満ちみちて、鴈王の翔ぶようにしてその國に至った。はじめてナガラハリーラ國界に到ると、國王は出て迎えて佛に作禮した。その時、龍王も世尊がおいでになるのを見て、父子・徒黨・十六大龍は大雲雷を興し、雷鳴をとどろかせ、雲を雨ふらせ、眼中より火を出し、口もまた火を出し、鱗甲・身毛もともに烟焰を出した。五羅刹女は醜惡形を現わし、眼はいなづまのようになりて佛の前に立

ちはだかった。そこで龍王の子が虚空中を見ると、化佛がみちみちているので、その父王に白して言う、父上よ、火を吐いてほんの佛だけでもやつつけて。空をちよつとみただけでも数えきかない佛がいますと。龍は毒をはきあし心意はたけり、子供をしかりつけ、一佛しか居らぬぞ、どこにたくさん居るのじゃと。このとき金剛神は手に大杵を把み、無数の杵頭に火を化身し、旋火輪のように燃やした。輪は相次いで空中より下り、火焰は火力

とつよめ、融けた銅のようであった。悪龍の
 身を焼いたので龍王はおどろきおそるたが、
 走りにげこむところがなかつたので、佛の影
 に走り入った。佛の影はずいずい、甘露灑の
 ようであった。龍は執あさがや々と除かしたの
 で頭をあげて空を視ると、空中に佛が満ち、
 いちいちの如來は無数の光を放ち、いちいち
 の光の中に無量の化佛があり、いちいちの化
 佛もまた無数百千の光明を放っていた。その
 老と、老の中には執金剛神がいて金剛杵を

ふるっていた。龍は諸佛を見てとてもよろこ
 んだが、諸の金剛（神）を見て大いにおそれた。
 そこで合掌して恭しく敬つて佛に作禮し、五
 羅刹女もまた如來に禮した。そのとき諸の天
 子は曼陀羅華・大曼陀羅華・曼殊沙花・大曼
 殊沙花をふらせ、よく供養するを以て天鼓自
 ら鳴った。諸天は又手合掌して空中に立待
 っている。そのときナガラハラの國王、その
 眷屬五千は衆名香を焼き、頭面もて禮佛し、
 佛が座に就かぬことを請うた。ときに龍王

は龍池から出、七寶床を両手でささげまつて敷き獻じ、佛に白す、世尊よ、どうかわたくとしをお救い下さい、金剛力士にわたくしの身と傷害させないで下さいと。

そのとき如来は梵音聲を以てする事かお慈母が嬰兒をいつくむようにして龍王と羅刹女に法王の化を受けしめた。そいつ佛が座に就くよう請じた。そのときナガラハラ國王は、高床に氍毹・毹・毹などのきめこまかくやわらかい毛織物をしき、白い毹縵を張

り、真珠の網でその上をおおい、佛世尊にその縵の中におはいりになるよう請じた。

そのとき世尊は足を擧げて行こうとした。佛は鹿王の膾であり、膾は五光を出し、光には五色があつて佛を圍繞すること七まわりし、天の妙なる花のように花の帳を化成した。多くの花葉の間には百千無数のいろいんな化菩薩が合掌し偈を讃えたり、萬億の音がひびいた。空中に化佛が膾に光明を放つことまた上のようであつた。十六の小龍は手に手に山

石を執り、霹靂ライカクで火を起し、來つて佛の所に至つたから、大衆は驚怖して佛の光の中に入つた。

そのとき世尊は金色の臂を出し、繖ウツ掌テを張り合やせ、指の網繖の間より大寶花を雨ふらせた。大衆はみな化佛を化成するのを見たが、ただ諸龍だけは金翅鳥が羽で搏ちくちはして、つっこいとすゝるのを見た。龍は金翅を畏れ、走つて佛影に入り、佛に作禮して頭を叩いて救いを求めた。佛は繖の前にいき、阿難に尼

師檀を敷けと。このとき阿難は即ち繖の中に入り、先ず右手を舉げて左肩上より尼師檀を取つた。そのとき尼師檀は即ちまた五百億の金の臺を化成し、七寶でかがり立て、水を敷こいとしたときまた五百億の蓮華を化成して七寶で莊嚴した。正に四たが角ニミルミると、ひとたかに五百億の七寶の蓮華を生じ、行うごとくつぎつぎと繖内に遍満した。

このとき世尊は七寶の床に就いて結加趺座したが、諸蓮花上にもみな佛が坐っていた。

諸比丘は佛が坐り己るのを見、佛に作禮して
 右繞するにと七まわり。各各坐具を敷いたが、
 比丘の坐具はみなことごとく琉璃の座を化成
 した。比丘が座に就くとき、琉璃座は琉璃光
 を放ち、琉璃窟を作した。諸比丘は火光三昧
 に入り、身は金色を作した。そのとき十がう
 ハーラ國王は佛の神變を見、觀喜合掌し、佛
 のまわりを七めぐりして作禮し、佛の神化を
 觀て應に時に即ち阿耨多羅三藐三菩提心を發
 し、諸の臣下にも皆發心せしめた。そのとき

龍王は金剛大力士とおそ水了がためにまた阿
 耨多羅三藐三菩提心を發し、五羅刹女もまた
 菩提心を發したのである。

このとき大王は佛及び傍のために中饗を設
 けようとした。佛は大王に告げ、但、食器を
 与えよ、他には須いない。王は佛敎を受け、
 諸の寶器と具えよと、佛は神力の故に諸器の
 内に天の須陀味を自然に盈滿せしめた。諸の
 大衆がこの食を食べおわると、自然に得て念
 佛三昧に入り、十方の佛の身量が無邊である

のを見、また説法の微妙な音聲を聞いた。その音はまことに念佛・念法・念比丘僧を讃えた。また廣く六波羅蜜、三十七品、菩提を助けし法を説いた。この言葉をききおぼつた事に歡喜を信にし、佛のまわりをめぐること千回した。

そのとき十伽羅ハラ國王は佛の入城を請うたが、龍王は怒って言う、お前が俺の利をうばうなら、お前の國を滅すぞと。佛は大玉に向つていひ、檀越よ、先に歸れ、佛は自ら

時を知ると。そのとき國王は佛に作禮して、逡巡して退った。そのとき龍王と羅刹女は五體投地して佛に授戒を求めた。佛はそこで如法に三歸五戒の法を説いたので、龍王は聞き終つて心に大いに歡喜し、龍王・眷屬百千諸龍は池から出て佛に作禮したので、如來はまさに時に龍の音類に随つてその説法をおこなつたので法を聞いて觀喜した。佛は自連に命じてかほりに戒を受けさせた。そのとき自連は如意定に入り、即ち自ら化身して百千億の

金翅鳥王となった。いちいちの鳥王の足は五龍をふみ、とどまらず虚空に在った。ときに諸の小龍はこのようにいった。佛はあなたに命じわたくしどもに戒を受けさせていますのに、あなたはどうしてこんなおそろしい像を炸られるのですかと。目連は告げて、おまえたちは多劫の不恐怖中においてよこしまに怖想を生じ、無瞋恚において瞋恚想を生じ、無害所に於てよこしまに害想を生じた。わたしは實に人間であるのに、おまえたちは悪心が

あるためにわたしが鳥に見えるのだと、そのとき龍王は恐怖のあまり、自ら衆生を殺さず惱まざることを誓い、善心を發した。目連はすぐさまもとの身にもどり、五戒を説いた。そのとき龍王は長跪合掌して世尊に勸請した。ただ願わくは如來がここに常住されんことを佛がもしおいでにならなければ、わたくしは悪心もおこし、阿耨多羅三藐三菩提を得るまでだてがありません。ただ願わくは如來が神を留め念を垂れ、常に此に在りまさんことをと。

懇懇に三たび請い、このようにして止まなかつた。ときに梵天王また来り、佛に禮し合掌して勸請した。願わくはバガダトよ、未來世の諸衆生の故に爲し、いとくいとくに此の一小龍の爲にすくなか化と。百千の梵王も異口同音に皆この請を作した。

そのとき如來は即便に微笑し、口より無量百千の光明を出し、いちいちの光の中に無量の化佛がい、いちいちの化佛は百億の菩薩を侍從とした。ときにその龍王は左の池の中に七

寶の臺を出し、如來に奉上し、唯願わくは天尊よわたくしのこの臺をお受け下さるんとと。そのとき世尊は龍王に告げて曰う、此の臺を須いない、おきえ、今羅刹の石窟をわたくしに施しなさい、そのとき梵天王・無数の天子は先に窟中に入った。ときにその龍王は諸の雜寶を以て窟をかざった。佛は阿難に告げた、なんど龍王に石窟をはききよめるとを教えよと、諸天はききおわすや、おののが寶衣を脱ぎ、競って窟を拂拭した。さて

そのとき、如來は身光をまといもどり、諸の化佛を巻いて佛頂に入らうめ、諸の比丘に命じてみな窓外にあらうめ、たゞ佛ひとりが入って自ら坐具を敷き、坐具を敷いたとき、この石山を暫く七寶とした。時に羅刹女、龍王は四大弟子、尊者阿難のために五つの石窟を造った。

そのとき、世尊は龍王窟に坐したまふ坐處を移さずしてまたナガラハラ王の請を受け、いたりで那乾訶城に入った。また耆闍崛山、

金衛國迦毘羅城、諸の住處ではみなそこに佛がいのを見、た。ときに虚空中の蓮華座上には無量の化佛があり、一切世界は化佛で満ち満ちた。龍王はよろこんで大誓願を發した。願わくはわが來世に佛を得ること此の如くならんと、佛がナガラハラ王の請を受けて七日たった。王は一人乗で八千里行く象をつかわし、諸の供具をもたせて一切の國に衆僧を供養させたところ、いたるところでみな釋迦文佛を見た。信が及んで王に白した、如來世

尊はこの國ばかりでなくほかの國にもまたい
りっしやいます。ほかの國で諸佛はみな苦空
無常無我六波羅蜜を説いていりっしやうと。
王はこの言葉を聞いて豁然と意こころに解け、無生
忍を得たのである。

そのとき世尊は神足をもとどおりにして石
窟からお出になり、諸の比丘と、先世に菩薩
であられたときのあの兩兒布施處・投身餓虎
處・以頭布施處・剗身千燈處・挑眼布施處・
割肉代鵠處に遊履なされた。このようなとき

ろはどこのにも龍はみなおともした。このとき
龍王は佛が國におかえりになるとき、啼哭
雨のどとく涙をながし、白して言うに、世尊
よ、どうが常住して下さい。どうしてわたく
しをおみすてになるか。佛を見ないと悪事を
しそうになり、悪道におち入りましよう。と。
そのとき世尊は龍王をなぐさめて、なんじの
請を受け、汝の窟中に坐し、千五百歳を經よ
うと。ときに諸の小龍は合掌叉手して、世尊
が還また窟の中へ入りこを勸請した。諸の龍

は、佛がすいに窟中に坐し、身の上半から水を出し、下半から火を出して十八變を作すのを見た。小龍は見おわつしまた更に道心の堅きを増した。釋迦文佛は身を踊らせて石に入ったが、明鏡に面像と見了ごときであり、諸龍はみな佛が石内にあるのに外にうっりあらわ水ているのを見た。そのとき諸龍は合掌し歡喜した。その池から出なくてもいつも佛日を見たからである。

そのとき世尊は結跏趺坐して石壁内に在り、

衆生が見るときは、遠望すれば見、近ければ現水ない。諸天百千は佛影を供養し、影もまた法を説いた。ときに梵天王は合掌恭敬し、偈頌で言った。

如來は石窟に處し、身を踊らせて石裏に入る。日の障礙なきがごと、金光の相をなわたり。我いま頭面もて、牟尼救世尊を禮拜せん。

そのとき世尊は五百の寶車を化し、佛は車中に處し、身を五百に分かつた。そのとき寶

車は虚空中にとどまって廻旋すること自在。車の轂輞のあいだには百千の光明がさし、いちの光明に無数の化佛がいて、不動不轉で迦毘羅城へいたり、師子座に坐って三昧に入らうようであった。一の毛孔中より一佛が有って出で、一の毛孔中に一佛をもどし入らう。このようにして出入させて虚空中に満たした。無量の化佛は結加趺坐していた。このような状態を如來坐時の境界という。

佛滅度ののち、佛の諸弟子がもし佛の行ず

るといふことを知らうと思つたら、さきに説いたとおりである。もし佛が坐っているといふことを知らうと思つたら、まさに佛影を觀なければならぬ。佛影を觀るとは、先ず佛像が丈六を作す想を觀ずることである。佛像は結加趺坐し、草を敷いて座とっている。佛を請いて坐せしめ、坐っているのを見よ。またまゝに想を作せ、一石窟の高さ一丈八尺で深さ二十四歩、清い白石の想を作すのである。この想を成しおわつたら、坐せる佛像が虚空

中にとどまり足下に花も雨ふらすのを見よ。
 また行想を見よ。石窟中に入り、入りおわつ
 てまた石窟を七竅の山にする想である。この
 想を成しおわつたら、また佛像が石壁に踊り
 入り、石壁は無礙になおし明鏡のごときであ
 るのを見よ。この想を成しおわつたら、前に
 したように三十二相を還た想え。いろいろの
 相を觀じきわめて明了ならしめよ。この想を
 成しおわつたら、諸の化佛が大寶花に坐して
 結加趺坐し、身に光明を放つて普く一切を照

らし、いろいろの坐佛の身の毛孔中より阿僧
 祇のもろもろの七寶の幢を雨ふらし、いろいろ
 りの幢頭に百千の寶幡あり、幡の極めて小さ
 いものが、たてよこ正しく等しく須彌山のじ
 とき大ききであり、この寶幡中にまた無数の
 百千の化佛があり、いろいろの化佛が身を踊
 らせてみなこの石窟中の佛影のへその中には
 いるのを見よ。この想が現れたとき、そのほ
 佛心が説くごときものであま。この觀のごと
 きものを名づけて正しい觀とし、もろろが

た観なれば、名づけてよこしまな観とする。
 佛が滅度したのち、我が説く所のごとく、佛影
 と観ずること、こ水を真観如來坐と名づける。
 如來の坐するのを観ずることは、佛身が等し
 く、異あるなきを見るごとく、とてあり。百
 千劫に生死の罪を除かば。もし見るごとくが
 できなければ、まさに塔に入って一切の坐像
 と観、坐像を見おわたり、障罪を懺悔せよ。
 此れが人が像を觀ずることの因縁功德である。
 彌勒が世に出でたなり、彌勒佛がはじめて龍

華樹の下に坐し結跏趺坐するのを見よ。見お
 われば歡喜し、三種菩提は願に隨つて覺サトり了お
 えてであらう（大正一五、六七九〇一六八一
 〇）。

日大唐西域記のほなしでは、牧牛の人が
 悪意もち願を立てて死に、そのとりにゴ
 パーラ龍となつてナガラハローラに災難をおこ
 すのを佛が教化することになつていて、こ
 だみた經典の内容と異なる。日大唐西域記
 はウツデーヤーナのアパラローラ龍の教化譚で

もアバラリー龍がちよつと一たきっかけで悪
 意をもつにいたり、悪龍に生まれかわつて國
 に災害をもたらすのであり、ゴーパーラ龍の
 場合と筋立ては同じ傾向をとっている。いず
 ルにせよ、可觀佛三味海經とはなすは、も
 ともと惡龍であり、羅刹女であり、かいらを
 佛力によつて改心させ、改心させた方便に佛
 はさまがまな神變をおこなない、ついにその影
 と石窟の壁中に坐像として残り、龍にその姿
 と常に憶念させしことにより、災難を防止す

すといふのである。このように可觀佛三味
 海經に觀四威儀品に登錄された一威儀たる佛
 坐像の觀想は、現實のすがらハラの石窟に
 ある佛の坐尊像の由来によつた説話ととり
 あげて觀佛の中へととりこんだものである。
 『觀佛三味海經』は一〇卷一二品から成る。
 (一)六譬品、(二)序觀地品、(三)觀相品、(四)觀佛心
 品、(五)觀四無量心品、(六)觀四威儀品、(七)觀馬
 王藏品、(八)本行品、(九)觀像品、(一〇)念七佛品、
 (一一)念十方佛品、(一二)觀佛密行品ですなわち構成

と小す。ところか、観佛と説く經典でありながら、全品を通じて一貫性がない。まず、その構成とみると、六比喻品は大正藏經の頁内の段數で言いと、五・五段、序觀地品は五段、足りず、觀相品は急にふえて五八・五段、觀佛心品は一七・五段、觀四無量心品は三・五段、觀四威儀品は二二・五段、觀馬王藏品は一二段、ついで本行品が八段、觀像品が九段強、念七佛品が三段弱、念十方佛品が四段強最後の觀佛密行品が四・五段である。と小す

ハに對する言及の量にいちじるしい差があり、ほらばりである。つぎに(四)は觀佛心品といひ、折角の觀佛ながら、佛の心が紅蓮華のいとまといひ、見にくいのもの觀想であり、そのためか、すぐに各種地獄の説明が延延と續く。佛心と地獄との接點の説明もまた不自然である。直接觀佛と關係がないのである。三には次の(五)の觀四無量心である。四無量心の説明がなく、具體的に何と觀想せせようとしていたのか判りにくい。(四)の佛の心臓とのつなが

リもはつきりしない。(六)の觀四威儀は全作の三分の一が坐佛と觀ずることと言おうとするいま掲載した佛影因縁譚であり、行住坐臥の四威儀に對する比率にこれまたいちじるしい差が認められる。次に(七)の馬王藏と觀する一品は、本來は(三)の觀相品に並列されるべき如來の身相のひとつであつた陰馬藏相が姪女のかかりで數數開陳される。陰馬藏がなぜかくも長長と、しかも他の身相とは別に特出されなくてはならなかつたか。奇異な點と云う

べきであらう。(三)の觀相品は本經中異常に長い。しかもその觀相は頭頂から順に足下に至るいわゆる順觀にしたがつていふものでもなく、その逆、いわゆる逆觀にしたがつていふものでもない。この一品は四つにわかれているが、それ以外にある分類にしたがつてわかたれていふものでもない。たとえば、その二に觀顔廣平正相があるかと思ふと、その四にも觀如來顔廣平正相が出てくるのである。このように多くの不統一、混沌性がきわまるのが、(七)の

観像品以下であらう。この經典のはじめに、
 佛が阿難に告げたのは、佛が觀佛をおしえて
 自らが居なくなつたあとの行法を付囑するこ
 とであつた。ところが(九に至つて、佛滅度の
 のち、現前に佛がなくなるから、佛像を觀ず
 べしといふのである(大正一五、六九〇C)。
 さらに過去七佛(三)ついに十方の佛を觀ずるに
 至つて(二二)。最後に念佛三昧の功德を説
 くことはよしとして(二二)、觀佛、念佛、見
 佛といふぐあいに、用語も不統一である。こ

のように、(二)の序觀地品で觀佛法を列與するた
 めの、その順序にそつておらず、多くの出
 入り、混亂が指摘されるのが、本經である。
 このような諸點によつて、統一のとれた原典
 をこの觀佛經典に求めることは困難である。
 したがつてこの經典の譯者とさして、佛
 陀跋陀羅がどのようにして本經典を編集した
 か、はなはだ注意せられるところであらう。
 それは、きわめて長大な佛影譚の挿入とい
 一事によつて佛陀跋陀羅がこの編集に大いに

かかわつていたかりである。か小がこの編集にかかわつていたことを證する具體的な資料はない。しかし佛陀跋陀羅は佛影に關する情報もほかのたかよりもかかえていたと考へる證據はある。

ナガラハラがその頂骨や佛影に名高かつたことはここに至つた行歴僧たちがほとんどそれを見に出向いたらしいこと。さきにくべたとおりである。ところがナガラハラに行つたこともなく、當然見たこともない中國

在住の僧さへも佛影はひきつけずにはおこなかつた。廬山の慧遠の佛影に對する憧憬の念はいたつて強かつたのである。いま廣弘明集の卷一五に残さ小た「佛影銘」は、ナガラハラへの佛影を遠く思ひ、廬山にそつくり模してつくつたことを記念した銘である。銘は五つから成り、その四に、「筆の先たくみときほめ、絹のうへ描くもたえに、えもいはぬ彩ちりばめぬ」へ妙盡毫端 運微輕素 託采虛凝へ「慧遠研究」木村英一譯による

とあり、壁に描いたのではなく、絹本彩色であつた。水を描いた直接のきっかけは、**麴**賓禪師と南國の律學の沙門であつた。すなわち、「遠^{わた}くは以前、先師「道安」と尋ねて、永年（弟子として）おそばにお仕えした。そして慈愛のこもつた訓^{みちひ}によつて啓發され、佛典を學ぶことに志してきたが、（その一方、天竺の）奇しい話を聞いて、求道の誠を深めたいと常に願つていた。（だから）西域から来た沙門に出あうといつても旅行の話と聞くことにし、そのおかげ

で、（西域に）佛影というものがあることは知つていたが、——か、（人づてに聞く話であらう）話す人にもまだはつきりしたことは分りなかつた。（ところが）、この**廬山**に来てから、**麴**賓の禪師「僧伽提婆」と南國の律學の沙門「法顯」に値^あつた。（そして彼等に佛影の話をしきくと）、私の以前聞いていたことと同じであり、さらにそれは、この人たちの實際に旅行して來られたところであつた。そこで詳しく尋ねてみると、かねてから聞いていたことと一致

する點が多く、かくてはじめて、佛の道は自由自在でいろいろな像をとってあらわれようであり、多くの人々に同じような教化を與え、決して特定の時代(の人々)にだけ感應するものではないことを^{チカ}驗めた。そこで悟りに對しては、いよいよ(これを求めよ)誠まことに徹し、(佛の)感應に對しては、ますます信仰の念を深くした。そして、同信の人々に佛教の眞の意味を知ってもらうために、佛徳に隨順歡喜する人々と共に佛影を^{えが}圖えがいて銘文を書くこと

にいた次第である。と(日慧遠研究に、遺文篇、四五四―四五五頁による)。
 塚本善隆によれば、慧遠が廬山入りしたのはだいたい太元九年(三八四)ころであるから、チガラハラの佛影のことはそれ以前から中國にとどいていた。それをはつきりと教えたのがさきの二人であった。塚本善隆が主宰した慧遠研究の集大成(24)では、いまいちばん問題になる廬賓禪師に有力候補として佛陀跋陀羅とあげながらも、出生が迦維羅衛の人だ

だといふ理由で外し、^一彼と同學で共に^一麴賓
 に遊んだこともあり、廬山に來たつて禪教を
 も傳えた阿毘曇學者僧伽提婆⁽²⁵⁾もあつた。^一
 かし、^一高僧傳^一卷ニの佛陀跋陀羅傳は、^一
 少いときから禪律について名高く、常に同學
 の僧伽達多といふ^一に麴賓に遊んで、同じ
 場所^一で長年すびした^一（少以禪律馳名。常與
 同學僧伽達多共遊麴賓。同處積載。大正五〇、
 三三四〇）とするから、佛陀跋陀羅と僧伽達
 多とが同學^一だったのであり、僧伽提婆はまっ

たくの別人である。僧伽提婆は、木全徳雄に
 よると、太元一一年（三八六）に廬山に入つ
 たといふ⁽²⁶⁾。かし、^一高僧傳^一卷^一の彼の傳
 記はその年次を太元中といふばかりで實年代
 を示していない。か小は確かに慧遠に請われ
 て廬山に入り、般若臺で手に梵文ととり、口
 に晋語を宣べて阿毘曇心論^一や三法度^一
 を譯した。かし、それは太元一六（三九一）
 年であり、塚本善隆も言ふよ^一に、^一あまり
 長くは廬山に滞在しなかつた^一よう^一で、三九七

年「隆安元年」には江を下つて建康に出てい
 了⁽²⁷⁾ うよがえって慧遠の佛影造營は、義熙
 八年（四一二）壬子の歲、五月一日に成った
 （晉義熙八年歲在壬子五月一日共立此臺。擬
 像本山。因卽以寄誠。佛影銘也）。僧伽提
 婆はたしかに罽賓の出であるが、阿毘曇學者
 であり、罽賓禪師といふにもとより、また玄の
 廬山滞在も佛影造營に急激な示唆を與えたこ
 は考へにくい時期であらう。か小が去つてか
 り造營まで少くとも一五年もたつてゐるから

である。佛陀跋陀羅と罽賓禪師にあつてもよ
 い雰圍氣を残したのは塚本善隆であるが、そ
 の唯一の難點は、切小がカピラヴーストウの
 ひとだと信じたことにあつた。切小の傳記と
 高僧傳に再覽すると、佛駄跋陀羅。此
 に覺賢といふ。本、釋氏を姓とし、迦維羅衛
 の人にして、甘露飯王の苗裔なり。祖父、達
 摩提婆。此に法天といひ、嘗て北天竺に商旅
 し、因りて焉に居む。父、達摩修耶利、修利耶
 の誤りか。此に法日といひ、少^{わか}きに亡^{みまか}る。

賢、三歳に於て孤り母と居り、五歳に於てまた母を喪ひ、外氏の養ひ所と爲る。從祖鳩婆利、その聰敏を聞き、兼收てその孤露を悼み、乃ち迎へ還り、度して沙彌と爲す。……常
 に遊方弘化して備に風俗を觀んと欲す。會たまたま
 秦の沙門智嚴あり、西のかた罽賓に至り、法衆の清勝なるを觀て、……即ち國衆に諮訊す
 らく、孰しか能く化を東土に流くかと。僉みな云く、佛馱跋陀なる者有り、天竺那呵利「梨」城に出生す。族姓相承り世よ道學し遵し。其れ、

童齒に於て出家し、已に經論に通解す。少わかくして業を大禪師佛大先に受け、先時亦罽賓に在り。……(大正五〇、三三四b1c)。
 佛陀跋陀羅は、その祖父代に貿易商人として北インドにカピラヴアストリからやってきて、そこに定住したのである。だから四出三藏記集に卷一四の如木の傳記は、「北天竺人也」と(大正五五、一〇三b)。
 身は天竺那呵利「梨」城に生ま小たのである。那呵利城、すなわちナガラハリーラ國城にほか

ならない。そこからカンガラへ僧伽達多と
 遊學し、多分そのとき佛大先に就學したので
 ある。だから「先時」も亦、カンガラにいた
 とは、若いときカンガラに長年居て、ナガ
 ラハリラに歸り、再度カンガラに行ったの
 である。この話の内容からみると、智嚴はそ
 のときナガラハリラに居たともみられ、また
 智嚴はカンガラに居、佛陀跋陀羅はナガラ
 ハリラに居たともみられる。いづれにしても
 佛陀跋陀羅はこういういた地方の人なのであり、

カピラヴァストウの人だとしてしりぞける理
 由はないどころか、かれこそ「罽賓禪師」の名に
 ふさわしい。いやかれは、「觀佛三昧海經」
 にも中國で編纂し、その中にナガラハリラ生
 むれのかれならではの佛影窟譚を放りこんだ。
 上にみたものは、まましくかれにして
 はじめてあのような分量を叙述することか
 きたことを示している。四威儀中、他の三威
 儀との割合をみても、かれが特別に佛影に精
 一かつたことを物語るのである。かれが廬山

にて慧遠の要請により禪の數經七譯出したこと
 とは、如來の傳記にみえる（大正五〇、三三
 五〇）。
 又出三藏記集四卷二は、佛陀跋陀羅
 譯出一〇部七卷とし、晋の安帝（三九七—
 四一八）の時、江東及び宋に至り、初めて廬
 山及び京都に於て譯出したといひ、大方廣佛
 華嚴經四五〇卷、新無量壽經二卷、日文
 殊師利發願經一卷の三經についでのみ、譯
 出次第と場所とも付してゐる。それによれば、
 この三經はみな義熙一四年（四一八）以降の

譯出、道場寺におこなはれたものである。
 その限りにおいては、觀佛三昧經（日出
 三藏記集では海字を入れない）八卷（現行の
 ように一〇卷となるのは、開元釋教錄にか
 らである）の譯出（實は編集）は廬山におこ
 なれた可能性が有る。ところが歴代三藏
 記四にいたって、一五部のうち上の三經に加
 えてありたに大方等如來藏經一卷と元熙
 二年（四二〇）に道場寺におけり譯業とし、
 他に新微密持經一卷と隆安二年（三九八）、

また曰 出世無量門持經曰一卷を廬山におけり
譯業とした。ここに至つて曰 觀佛三昧經曰八
卷はますます廬山にて出た禪の教經の一だ
ある可能性が高くなる。しかし、費長房は
本經に注して竺道祖の曰 晋世雜錄曰に既に見
えし由記し、さらにこの竺道祖にもとづいた
か、「或は宋世に出すと云う」といっている（曰 歴代
三寶紀曰卷七、大正四九、七一a）。曰 大唐
内典錄曰卷三八（大正五五、二四六c）はこれ
をそのまゝ襲用したが、曰 歴代三寶紀曰の三

年前に撰集した曰 法經錄曰卷一は、「宋永初、
佛陀跋陀羅、揚州に於て譯す」とい（大正五
五、一一五a）、本經が廬山譯出であること
を認めていない。曰 歴代三寶紀曰の撰者費長
房が、「或は宋世に出すと云う」としたのは、
これにもとづいた注記であつたかもしれない
が、法經等、大興善寺翻經衆が何にもとづい
て右の決定を下したかはわからない。費長房
は曰 觀佛三昧經曰が廬山におけり譯出の可能
性をもつ意見に傾いていたともみえよう。

佛陀跋陀羅は廬山を義熙八年を以て去り、
 荊州へ行つたが、この年五月一日は佛影が成
 った日であった。慧遠の要請によつて、日觀佛三
 昧經五八卷をカルが廬山で譯出し、カつ慧遠
 に佛影の正確な情報を與え、佛影造營を完成
 させた可能性は、いちじより大きく大きい。佛影
五繪畫として圖像として、日觀佛三昧海經五
 はその所依の典籍と考えられるからである。
 その完成をまつて佛陀跋陀羅が廬山を去つた
 ことを右の年次は示唆するのである。ターシ

エクルガンからカラコルムの難險を南下し、
 ガンダーラに至つた中國僧、そしてガンダー
 ラから北上して中國に至つたインド僧、この
 両者は結局四、五世紀における佛典の漢譯化
 および佛典内容の理解を進めるうえで多大な
 貢獻をしたのであるが、中國に傳達された當
 時のインド佛教の大部分は、といてイカーシユ
 ミーラの佛教ではなく、ガンダーラ、ウツデ
 イヤーナ、そしてナガラハラーの佛教を反映
 していたものと理解できよう。その佛教とは、

當時もこゝでおこなわれていた教理もさること
 ながら、ガンダーラ、ウツデーヤーナ、ナガ
 ラハールがもつ獨特の風土を反映した佛教で
 あった。そのもっとも良い例がこの觀佛經典
 にあらわれたように至って可視的な、具體性
 の強いものであった。觀四威儀品に描き出さ
 れた虚空に遍満する多佛は、ナガラハール國
 都を中心にして林立していた佛塔⁽²⁸⁾やその佛塔
 いちいちの、幾重にも積み重ねた基壇をすき
 間なく充填する坐佛・立佛といった佛像群の

あり方を反映していないと誰が断言できよう
 ガンダーラやナガラハールに至った佛教僧は、
 否應なしにこのような風景の中に身をおき、
 このような世界を目のあたりに見た。そうい
 った視覚にうったえる環境がかはらによって編
 まれた(漢譯)佛典に寫しだされたのである。
 佛教がほとんどその最初からもっていた二つ
 の傾向、哲學(抽象)と土俗信仰(具體)と
 のうち、佛教を廣大な地域へとおし進める力
 となったのは、首から上の部分の果した役割

ではなく、賸下の役割である。深い教理の研究は少数の出家の専有であり、おそらく九割をこえる僧たちと在俗信者たちとはこの部分には參與しない、あるいは參與できないのであった。かれらはシフほら布施・禮拜という具體を依りどころとし、佛陀自身の遺骸を古來かハラが保有してきた樹木信仰などの豐饒再生産・増殖儀禮の中へとリこんで、佛塔（ストウパー）を創造し、展開させ、更に歴史上の佛陀を彫像として再構成し、再確認した。

のである。佛像を創始したのは、はかなりぬ北西インドの風土であり、それを多佛へとおしひろげていったのも北西インドであった。その過程がまた逆に教理のうえに映りかえったことも十分考えられるのである。四、五世紀のガンダーラと中国とをむすぶ佛像の動きが、前代と比較にならない程度に、大きくなつたとき、中国佛教に與えたインド佛教の意味は、ガンダーラ・ウツダイヤーナ・ナガラハラーにおける可視可触佛教の衝撃であった。

第二章

北西インドにおける六世紀の意義

第一節 宋雲・慧生行程の検討

桑山

ナガラハリラから法顯のように中インドへ
行ったのはいたが、ナガラハリラから西へ
歩を進めた佛僧は一人たりとも知られていな
い。ガンダーラの平野部は海拔四〇〇メートル
ル・インド、ナガラハリラは六〇〇から七〇〇
メートル、そしてナガラハリラより西はシア
ム・コロをのぼり、一気に一〇〇〇メートル
上って海拔一六〇〇から一七〇〇メートルの

高地である。カーピシーからガズニーに及ぶ地域はそのような場所である。ターシユルムからカラユルム西脈の難所を通過し、ウツディヤーナ、ガンダラー、ナガラハラーにたどりついたじとたちにとって、一氣に1000メートルを登るじとき自然条件は、行く手をはばむ障害ではなかったろう。カンガラーヤナガラハラーには、そこにいかにもも求むべきものが毅然として存在した。さしつかへは危難に命を堵つつ行かんとした

のであった。とみると、北西インドに到達した佛僧をあらためて引きつけるなにもものも、ナガラハラー以西には存在していなかっただとみえる。當時ナガラハラー以西に佛教がおこなわれていなかっただと言うのではない。北西インドと對等、ないし一のぐのような佛教ではなかつたといふことである。

ガンダラーから中インドへと佛陀聖迹を巡拜せんとし、いとちがわがわがナガラハラーへ行つたのは、そこがガンダラーに近接し、

ーかもガンダラーと同じような佛教の文化が
 あったからであり、そのより西へ、中インド
 と逆方向へ進むはずはない。そのが諸資料に
 あらわれたまでである。このようにみること
 もできよう。ーかし、インド各地からガンダ
 ラーにあつまつたインド僧もまたナガラハ
 ラーに行ったが、さらに西行してヒンドウ
 クシユを横断し、タクラマカン方面へと進ん
 だことは少くとも五世紀まではいない。
 もーカラコルム西脈道をつかれないで、ワ

ツハーンから西へ行き、トハリリスターンに
 至った僧がいたのならば、かれらはトハリ
 リスターンからヒンドウクシユを横断し、
 カルピシーを通り、ナガラハラーへ西から入
 り、そーしてガンダラーへ至ったのではない
 か。カラコルム西脈道は中央アジアとインド
 を結びつける交通路ではあったが、多くの道
 のひとつにすぎず、たまたま僧の傳記が残
 るに多かつたがために、一時代の大道のよ
 うにみえるにすぎないのではないか。そこで

フツハーンからトハリスターンに赴いた宋
雲・慧生の行程がクローズ・アップされる。

日洛陽伽藍記上巻五城北に、聞義里に燉煌
の人宋雲の宅ありと一て始まるカハラの行歴
記事は、日づけに順って先先の國をのせし。

北魏孝明帝の神龜二年(五一九)七月二十九日
に、北魏西の關防であつた赤嶺、吐谷渾、于
闐經由で、朱駒波に入り、八月はじめに漢盤
陀國界に入った。六日のあいだ西に行つて葱
嶺山を登り、また西行して鉢孟城へ至り、

りに三日行程で不可依山に至つた。葱嶺山頂
に漢盤陀國城(現タリシユクルガリン)があ
つた。城東に北東へ流れる孟津河があり、沙
勒(現カリシユガル)へと流氷、葱嶺以西の
川はみな西へ流れていった。九月中旬に鉢和國
に入った。王城は山に因つて城をつくり、南
界には玉峯のほとき大雪山がそびえていた。
一〇月のはじめに(漢魏叢書、廣漢魏叢書本
は、一〇月初旬とする)嗽達國(エフタル)
に至り、一一月はじめに波知國、一月中旬

に賒彌國に入り、ここのでようやく葱嶺を出た。
 一二月はじめに烏場國に入り、正光元年（五
 一）四月中旬に至って乾陀羅國に入ったの
 である。漢盤陀、鉢和、嗽達（学津討原、漢
 魏叢書本は嗽達とする）、波知、賒彌、烏場、
 乾陀羅の順序に進んだと記してあることにな
 る。ところが、賒彌のところは次のように説
 明になっていゝ。

この國でようやく葱嶺を出る。田畑はや
 せて人口多くまずい。道はけわしく通

行を危険に、人・馬がやっと通水にく
 りいであゝ、ひとつの道がまっすぐに鉢
 盧勒國から烏場國に向つていゝ。鐵鎖で
 橋もつくり、虚空にかけわたしてある。
 下の方は谷底も見えず、かたわらに引き
 つかむものもない。すこゝでもひるむと
 からだは萬仞の谷に落ちる。さすれば、道
 を行くいとは風のたよりに開いて通行を
 遠慮するばかりである。十二月の初に烏
 場國に入った。へ此國漸出葱嶺。土田嶠

峻。民多貧困。峻路危道。人馬僅通。一
直一道。從鉢廬勒國向烏場國。鐵鎖為橋。
懸虛而度。下不見底。旁無挽捉。條忽之
間。投軀萬仞。是以行者。望風謝路耳。

十二月之初入烏場國。

賒彌から直接に烏場へ行つたのか、
鉢廬勒に行き、一直道を通つて烏場へい
つたのか、判定しにくいのがこの一文である。

魏書と西域傳が北史と西域傳の轉録で
あり、北史と西域傳が、もとの魏書と西

域傳の殘簡と周書と隋書と西域傳とを合
糅したものであつたことは言ひまわらない。
魏收撰の魏書と西域傳にはまた一部分に宋雲・
慧生の行歴記事と引用したところのあること
もいひまわつた。百衲本の魏書にはその嚧達傳
と次のようにのべらる。

初熙平中、肅宗は、王伏子統宋雲・沙門
法力等と西域に使し、訪ねて佛經を求め
しめた。そのとき沙門慧生といふ者があ
つたが、水もまたいっしよに行き、正光年

間に歸還した。慧生が行ったいろいろな
 國にっつては、その本末や山川・里數を
 (正確に) 知ることができず、そのありま
 ーをのべたのであろう。云く。其の國は
 (嚧達國は) 漕國を去ること千五百里、
 瓜州を去ること六千五百里である。……
 (初熙平中。肅宗遣王伏于統宋雲沙門法
 力等使西域。訪求佛經。時有沙門慧生者。
 亦與俱行。正老中還。慧生所經諸國。不
 能知其本末及山川里數。蓋舉其略。云。

其國去漕國千五百里。去瓜州六千五百里
 ……)
 最後の「其國……六千五百里」は日隋書上の
 轉錄であるから、こゝを除くと「云」以下に
 列擧された記事(七國あり)が慧生の旅行記
 から引用したものであることがわかった。嚧達
 國の條にこのよゝな注記があったこと自體、宋
 雲・慧生ともにその國とおぼしたことを示
 唆し、その小だから、嚧達國傳の中にも慧生
 の旅行記からの引用があるはずである。その小

はいま措くとして、七國とは、朱居、渴槃陀、
 鉢和、波知、賒彌、烏菴、乾陀にあり。曰隋
 書曰經籍志に、曰慧生行傳曰一卷を載せし
 で、これら七國が曰慧生行傳に引用した
 のである。その中の賒彌國は、
 波知の南にあり、山の中である。佛法を
 信じず、専ら諸神に事えよ。亦嘸達に附
 く。東に鉢廬勒國がある。路はけわしく、
 鐵鎖に縁つて度り、下は谷底も見えない。
 熙平中、宋雲等は竟に到達できなかつた

(在波知之南。山居。不信佛法。專事諸
 神。亦附嘸達。東有鉢廬勒。路嶮。緣鐵
 鎖而度。下不見底。熙平中。宋雲等竟不
 能達)
 と。杜佑は曰通典曰卷一九三(邊防九)の賒
 彌國の條におりて、曰賒彌。後魏の時に焉を
 聞く。と、以下曰波斯之南。山居。不信佛
 法。專事諸神。亦附嘸達。東有鉢廬勒國。路
 嶮。緣鐵鎖而度。下不見底。後魏遣使宋雲等
 竟不能達。と、曰魏書曰所引の曰慧生行

傳口もそつくり採用してゐる。口太平寰宇記
 口卷一八六の賒彌は、口魏書口、口通典口と
 讀むいっつ字句をかえてゐるが、その「專事諸
 神」口「亦附嘯達」との間に、口宋雲行紀と
 なすものと引き、「語彙諸國同。不解書算。
 不知陰陽。國人剪髮。婦人爲團髮」と挿入し
 た。宋雲らが賒彌から鉢盧勒に行かなかつた
 ことがこゝらによりあきらかである。
 ところで楊銜之は、開義里の條を敘述する
 に當り、そこに宋雲之宅があつたので、そゝ

を記し、その宋雲にっいて行歴記事を書いた
 わけである。このとき楊銜之が使用すること
 のできた資料は、卷末尾にみえたとおりであ
 る。
 わたくしが思うに、惠生行紀は右いてい
 の場合すべてを記録してはゐない。そゝ
 で道榮傳と宋雲家記に依據した。だから
 みなこゝらからの記事と載せて、惠生行
 紀の缺文をひとのえたへ銜之按。惠生行
 紀事多不盡錄。今依道榮傳宋雲家記。故

並載之。以備缺文。)

と。惠生行紀(曰隋書西域傳志にみえり)曰慧
 生行傳二卷である。によりつつ、道榮傳と
 宋雲家記とでその水に補充し、宋雲の行歴を書
 きまとめたのである。曰慧生行傳は曰魏書
 西域傳作成に、魏收も使つたもので、その
 が缺文多いといわれりのは、さきに慧生所
 經諸國。不能知其本末及山川里數。蓋舉其略。
 とみだことにうり書きす水ていす。道榮傳は、
 多くの本にこの記す水すが、逸史本は道榮傳

とし、その水は是とすこと、既にシヤグア
 ンが言つた。すなわち曰釋迦方志曰卷下、遊
 履篇に、後魏太武末年、沙門道藥曰疏勒道
 より入りて懸度を經、僧伽施國に到る。返す
 に及んで其に故の道と尋めた。傳一卷と著す
 (後魏太武末年。沙門道藥從疏勒道入。經懸
 度。到僧伽施國。及返。還尋故道。著傳一卷。
)と。楊銜之曰魏收も曰慧生行傳の不完を
 みとめていす。しかし經由した國國の順はた
 しかたものであつたからこそ、楊銜之はその

と基本とし、各圖の内容だけを上の二番により補ったのである。宋雲・慧生の行歴から可洛陽伽藍記が書かれるまで、おそらく二十数年かたつていないのである。楊銜之は東魏武定五年（五四七）に洛州へ出張し、そこで北魏昔日の洛陽の大伽藍を記録することをおもいたつたのである（至武定五年歲在丁卯。余因行役。重覽洛陽。……京城表裏。凡有一千餘寺。今日寥廓。鐘聲罕聞。恐後世無傳。故撰斯記。）。はつきりと道藥によつたところ

はこの旨を「道藥傳云」と記した。宋雲家記によつたところにはその明記がないのは、この條が宋雲の行歴として述べられているからである。宋雲の行歴に關して述べながら、その基本を「慧生行傳」によつて、その備わらぬところだけを宋雲家記を用いたことなれば、宋雲・慧生は常にその行歴をともしたとみななければならぬ。

「洛陽伽藍記」が宋雲の行程と先先の圖を「慧生行傳」を軸に宋雲家記で補い、一方、

現行の魏書にの朱居國以降乾陀國までが慧
 生行傳に所載の列國そのものであるとみると、
 慧生は、朱居、渴槃陀、鉢和、波知（波斯）、
 賒彌、烏菴、乾陀と進んだことが判る。そ
 宋雲は口洛陽伽藍記にの順、朱駒波（右の
 朱居）、漢盤陀、鉢和、嗽達、波知、賒彌、
 烏場（右の烏菴）、乾陀羅の順に進んだこと
 になる。兩者を比較したとき慧生ルートに嗽
 達がみえないのは、魏書に西域傳で朱居以
 下七國の前に嗽達がおかれるからである。そ

の嗽達國傳の末に、先にあげた「初熙平中。
 肅宗遣王伏子統宋雲沙門法力等使西域。訪求
 佛經。時有沙門慧生者。亦與俱行。正光中還
 へ行ったたからである。中華書局標點本は、こ
 の「」内の文を直續の「其國去漕國千五百里
 去瓜州六千五百里」と逆轉させ、しかも兩者
 の間に行間をとって、「初熙平中……」が朱
 居以下の説明のどとくに改變してゐる。しか
 一、「其國……」は口北史に編纂のとき隋

書にから移録されたのであるから、原に魏書西域傳の體裁からみれば、この改變は蛇足だといふべきであろう。宋雲・慧生の行程中、一方だけに嘸達が脱落し、他はいつたり一致してゐる、その不自然さは、このようにして解決された。

長澤和俊は、宋雲と慧生が鉢和國まで行動をともにし、鉢和で別れた宋雲は嘸達へ、慧生は烏婁(場)へ赴き、宋雲が烏場へヒンドウ(クシユ)といふで西からもどり、烏場で二人は

再會したといふ考を發表されたことがあつた。一かゝり、二人が常に同行したことは右のとおりであつたが、もうひとつ氣にかかるとは、長澤氏の高説の根據である。魏書西域傳鉢和國の記事である。すなわち、この國から一道が嘸達へ、一道が烏婁へいくといふ記事である(有二道。一道西行向嘸達。一道西南趣烏婁)。鉢和から二つの方向へ道がわかれる、鉢和は嘸達と烏婁への分岐地點だといふ記事がなかにゆえに二人を離別させることにおす

がつくのであるか、想像をも絶するからであ
 る。口通典と卷一九一邊防七の西戎總序に、
 後魏に至り太武帝は董琬を西域へ使いた
 せた。かえってきき言いに、西域は三地
 域から成り、……その西域に出るには四
 つの道がある。……莎車から西へ一百
 里いくと葱嶺に至り、西へ千三百里で伽
 部（培）に至るのがひとつ。莎車から西南
 五百里で葱嶺に至り、西南へ千三百里で
 波路に至るのがひとつ。至後魏、太武帝

使董琬西域。還且言。其地爲三域。……
 其出西域。更爲四道。……從莎車西行
 一百里至葱嶺。西千三百里至伽部爲一道。
 自莎車西南五百里至葱嶺。西南千三百里
 至波路爲一道。
 と。いま西域に出る四道のうち、直接わいわ
 北にかかわる二道だけをとり出してみた。そ
 北は、莎車（ヤールカンド）から漢盤陀（ヤ
 ーシユクルガーン）へ行き、そこから伽部（
 ワッハーン）からシユグノーン方面へ至るル

トと、漢盤陀から波路（鉢廬勒、ルギト）へ至るルートを言ったものにほかならない。散騎侍郎董琬と高明とが鄯善（カラシヤフル）經由で烏孫（天山北麓）に赴き、そこから董琬は破洛那（フェルカーナ）、高明は者舌（チヤルシユ、タシユケント）まで行ったのは、太延三年（四三七）であり、この時代は、前に述べたように佛教僧が繁く動いた時代と同時代である。董琬らが傳えたこの地方の交通路は、結局佛教僧たちが往来した

たルートについてもはっきりと漢盤陀から波路へ至る一途ありとのべるように、当時葱嶺の西、西南へ行く普通のルートにすぎない。鉢和から二道ありと魏書西域傳、ひいては慧生行傳にもあったのは、單にこのように當時の大道がフツハーンで二手にわかれました事情を記したためである。宋雲・慧生が別れた證據ではない。宋雲・慧生はフツハーンを西行してエフタルの本地へ行き、そこから波路、賒彌と進み、鉢廬勒へはいかずに烏場へと

去ったことになると。日魏書に西域傳も賾彌を
 のべた中に、「東に鉢廬勒がある。路は峻
 く、鐵鎖に縁つて度了。下には谷底も見えな
 い」(東有鉢廬勒。路峻。緣鐵鎖而度。下不
 見底)とあり、日洛陽伽藍記にも同じように、
 鉢廬勒を立して一國として敘述せず、賾彌の
 東方に存在するといふばかりである。宋雲等
 がそこへはついに達せなかつたといふ記事と
 あいまって、これらはギルヤトへはいかなか
 ったのである。たゞかに鉢廬勒はターシエク

ルカーンからカラコルムに入ってウツペイヤ
 ーナからガンダーラへいくには要衝にあり、
 法顯らはいかなかつたらしいが、智猛などは
 行き(智猛傳の波倫)、當時南進する大道に
 あつて名がよく知られたところであつた。一
 か、宋雲・慧生はトハリスターンのエフ
 タル王庭へ急ぐ關係上、普通に行歴僧たちが
 使つた南下のルートはたまたま使わなかつた
 のである。そのような状況の中で、か小りの
 ルート上になくとも古來名高かつた鉢廬勒が

り鳥場へ行くルートと特に書きとめたのであ
ろう。

鉢和は、唐に護密（日唐書上巻ニニ一）下を
どしといひ、玄奘は達摩悉鐵帝と表記し、玄
奘より数十年前、六世紀後半にここを通つた
達摩笈多に関する傳記では達摩悉鬚多（日續
高僧傳上巻ニ）と表記した地方であり、皆馱
多と塞迦審との二大集落があり、玄奘通過時
は皆馱多が主城であった。この川は今のハンド
ウードとみり水、ワツハーンを西流するアー

ベリパンジヤの南岸にあり、おそらく塞迦審
へその後中心を移し、日唐書上に塞迦審が主
たる集落と記す所に至つたのであろう。今
のイシユカーシムラシイ。ハンドツードの西
南西、アーベリパンジヤが北流する屈曲地點
左岸に位置する。西南方へカルダーブ峠をこ
えるとゼバークに至るワツハーンの西入口と
して重要な土地である。宋雲らの時代、玉の
居るところは山に因つて城をつくつていたと
いひ。

鉢和からさらに西を指して嘽達（歌達、エ
 フタル）國へはどのようなるトをとったか
 こハにフイテは何も判明しない。口洛陽伽藍
 記ハは、エフタル國のありさまを敘述して
 了。

田畑は廣廣と多く、はるかに山澤を望む。
 城郭に住居を定めるのではなく、集團移
 動して統治してゐる。毛織物で家屋をつ
 くり、水と草に従って轉居する。夏にな
 ると涼しいところへうつり、冬になると

温暖なところにおもむく（土田庶行。山
 澤彌望。居無城郭。游軍而治。以氈爲屋。
 隨逐水草。夏則遷涼。冬則就温。）

と。また、口魏書ハ西域傳嘽達國の條も、

衆は十萬ばかりで、城邑は無く、水と草
 とに依り隨ひ、氈で家屋をつくる。夏は
 涼しい土地へ遷り、冬は暖かいところへ
 いく。その妻たちを分けて、各各別別の
 幕營におき、その間の距離は二百里とか
 三百里である。その王はあちこち經めぐ

って、一箇所にひと月ずつ居り、冬の寒
 い時分には三箇月場所をかえないへ衆可
 十萬。無城邑。依隨水草。以麩爲。夏遷
 涼土。冬逐暖處。分其諸妻。各在別所。
 相去或二百里三百里。其王巡歷而行。每
 月一處。冬寒之時。三月不徙。一
 と。各地にオールドがあった。その間の距離は
 二〇〇里の場合も三〇〇里の場合もある。エ
 フタル族の諸集團が各地に散在していたので
 ある。エフタル王はそのオールドを一箇月ずつ

滞在しながら巡回し、冬季三箇月は冬營の場
 所に滞在していたのである。宋雲・慧生がエ
 フタル王を訪れたのは、北魏の國使として、
 詔書を手渡す役割を負っていたからである。
 王は大きな毛織物のテントに居た。一テ
 ントの大きさは一辺四十歩もあり、ま
 わりは艶鮠をめぐらして壁とっていた。
 王は錦衣を著て、金牀に坐っていた。一
 金牀は一四羽の鳳凰で脚をくっくっていた。
 大魏の使者を見て、再拜し跪ぎ詔書

を受けた（王居大氍帳。方四十步。周廻
 以氍毹爲壁。王著錦衣。坐金牀。以四金
 鳳凰爲牀脚。見大魏使人。再拜跪受詔書。
 と。訪れた時期は「十月之初」である。すな
 わち太陽暦でいえば「一月初中旬に當る。季
 節はエフタル王が冬營地に即ち歸着していた
 ことと語っている。宋雲・慧生が訪れたのは
 その夏營地ではなかった。この時期は現代に
 おいてもこの地域の牧民が冬營地にもどった
 あとである。宋雲・慧生が訪れたエフタル國

の景觀は、「田畑は廣廣と多く、はるかに山
 阜を望み、川澤がひろがった場所」である。
 宋雲よりの「六世紀中葉に分解寸前のエフ
 タル國を訪れたガンダーラ出身のジナグプタ
 によると、エフタル國は「野はむな廣しく、民は
 すくない」（至厭怛國。既初至止。野曠民希）
 （「續高僧傳」卷二、闍那崛多傳）と。「洛
 陽伽藍記」の言うところと同類である。エフ
 タル王の冬營地は、平坦な地貌で、川澤あり、
 牧畜に適し、山阜を遠望する自然環境にあつ

た。鉢和たすワツハーインの西方にあり、いま
 もなおドウラニー系パシユトゥン族などの有
 かな夏營地であるシユグフリンヤバダフシヤ
 ー以西にこの環境を求めることが自然であ
 る。(4) フアイザードはバダフシヤーの西
 入口であり、その西のタラカリン地方ハタ
 ツハル地方はいま夏營地と冬營地との間にあ
 り、移動の道中、通過地である。またバルフ
 と中心とする地方はいま牧民の根據地として
 は自然環境が許さない。そうすると右の條件

に合致する地域はクンドラズ(スルハーフ) 流域、すなわちその河口たすカライエハザールから中流バグラーンに至る地域となろう。この川の流域はアフガニスタン王国成立後ヒンドウーフシユ南方のカンダハール地方から政策によつてドウツラニー系パシユトゥン遊牧民が入植し、いまか小川の冬營地となつてゐる。六世紀のおわりごろ西突厥はエフタルの勢力をそいで、活(大唐西域記)、大唐大慈恩寺三藏法師傳にみえる。隋書

圖 22

西域傳の吐火羅と同處。ただし、^四大唐西域
 記の觀貨邏は廣域であり、吐火羅はその一
 地方^五を南牙と^一、トハリリスターンへ觀貨
 邏^一支配の要と^一した。しかし、七世紀中葉に
 唐が吐火羅道置州縣使を派遣してこの地方を
 唐の西域行政の中へ名目上組みこんだとき、
 エフタルは太汗を統率者として活路城を中心
 とする根據地と^一つて^一いた。^六その勢力はテユ
 ルクが治を中心^一に二四地方を保ったの^一に對し、
 一五地方を保有^一して^一いた。^四隋書西域傳に

みえ^一吐火羅は烏澹水^一（ダリヤ^一イ^一エ^一リア^一
 ム^一）の南にあり、吐火羅と挹怛^一（エフタル
 との距離は二〇〇里で、その水が北と南にな
 り^一ん^一で^一いた。^五トハリリスターンの自然環境を
 み^一よ^一と^一ク^一ン^一ド^一ウ^一ズ^一流域は城郭を多數存在させ
 う^一る^一状^一況^一にあり、そこが牧民の冬營地として
 もまたトハリリスターン中も^一つ^一とも^一良^一好^一な^一場
 所^一である。活^一リ^一吐^一火^一羅^一が^一テ^一ユ^一ル^一ク^一ト^一ハリ^一ラ
 ャ^一フ^一グ^一の^一治^一所^一と^一して^一縛^一窮^一河^一側^一にあり、そ
 の^一部^一域^一が^一河^一の^一南^一岸^一に^一あ^一つ^一た^一と^一（^四大唐大慈恩

寺三藏法師傳(卷五)となると、是れはもはや疑もなく、カライエ「ザール」にあていゝる。そ「ト」ト「ハリ」スターンをも少くとも七世紀中葉に「テ」ユルクとわけあつた「エ」フタルの根據地は、吐火羅の南方、すなわちカライエ「ザール」の南方、バグライン平野と「イ」川澤にめぐまれ、山阜を望む地に求めらるるのである(詳しくは附論「ト」ハリ「スターン」の「エ」フタル、テ「ユルク」と「その城郭」)。

次に、宋雲・慧生の行程は「エ」フタルから波

知につづく。波知から賒彌、賒彌から烏場である。日魏書西域傳は、波知を「鉢和」の西南にあり、土地はさまく、人はまぎしく、山や谷によりすがつていゝる(在鉢和西南。土地人貧。依託山谷。)といふ。日洛陽伽藍記にも「く」にはほしてもせまく、七日で行きすが、いといと山にすみ、(境土甚狭。七日行過。人民山居。...)といふ。賒彌は日魏書「ト」は波知の南にあると、日洛陽伽藍記は、この國でよく葱嶺と出るとする(8)。

方、玄奘は歸途は活から東行し、二日で曹健
 にいたり、そこから山にはいって東行三〇〇
 餘里で呬摩咀羅につき、またそこから東へ二
 〇〇餘里で鉢創那（鉢鐸創那）すなわちバダ
 フシャーンにいたす。ここまでは東へ東へと
 進んでいり、バダフシャーンから次の淫薄健
 へは東南行す。ここ二〇〇餘里。いまのヤム
 ガーン地方である。ヤムガーンはジヨルムか
 らハズラトサイエドに至るコクチヤ上流域
 であり、中心はジヨルムである。ヤムガーン

の南がクラーンである。⁽⁹⁾ 大唐大慈恩寺三藏
 法師傳曰（略して）慈恩傳曰と。淫薄健
 から東南に進み屈浪弩に至るとす。屈浪弩
 すなわちクラーンとは、北はサレサング、
 ラージユワルド鑛山地帯の山峽を通り、南は
 タガール川とムンジャー川が合流する地帯
 までの地方である。玄奘はここから北東へ五
 〇〇餘里いき、達摩悉鐵帝へはひり、臥駄多
 についたのである。宋雲らの行程にみえし波
 知は、こかに相應する名稱を玄奘行程中に檢

索するこゝがどきない。ーカ。波知は鉢和
 (達摩悉鐵帝)の西南にあるのであるから、方向
 としていまのゼバクからムンジャー・タガ
 才合流地點の間に求めらるはずである。そ
 こでマルクザアトヤシヤザアンは波知を
 セバクとチトラールとの間にあった小國であ
 るといふ⁽¹⁰⁾。ゼバクとチトラールとを結ぶ路は
 ドーラ峠でヒンドウクシユとこえる山岳地
 帯であり、記録にのこりいふほどの國は存立
 しがたい地理である。スタインはまた波知を

ヲクヤヤ上流とするが、その理由は波知の南
 にあるといふ餘彌をクナール上流地域にあつ
 たからである。ーカ。モレ宋雲・慧生がク
 ナール上流に行つてゐるのであれば、そこか
 ら河をい到下つてサガラハラに行くのが自
 然であり、鳥場・乾陀羅から行く必要はなか
 ったであらう。
 餘彌は波知の南にあつて、ようやく葱嶺を
 あたへ、この場合ヒン
 ドウクシユがワフハーインの方へのびる左の

東脈である。ヒンドウークシユ東脈がワツハ
 ーンの南と境をいたことは、達摩悉鐵帝が
 兩山の間にあること（曰大唐西域記）、鉢
 和の南界に大雪山があること（曰洛陽伽藍記
 曰）でわかる。曰隋書曰には傳を獨立して互
 てず、曰通典曰（卷一九三、邊防九）に隋の
 ときに知小たといふ劫國は、葱嶺の中にあつ
 て、その西と南とはともに賒彌と接するとい
 う。すなわち曰通典曰に、一劫國。隋の時こ
 ねを聞く。葱嶺の中に在り、西と南とは俱に

賒彌國界と接す（一劫國。隋時聞焉。在葱嶺
 中。西與南俱與賒彌國界接）。したがって、
 波知は鉢和の西南にあつて山谷に依託するの
 であるからヒンドウークシユ東脈中にある、
 また劫國もヒンドウークシユ東脈中にあつた
 ことになる。賒彌は劫を西と南とからとりか
 こむこともわかった。劫がヒンドウークシユ
 中にある、賒彌が葱嶺をよじやく出たところ
 にあるとする記事は、却かり賒彌の北（ない
 しは北西）にヒンドウークシユがかかかっ
 てい

たこととを示すものである。そうして魏書には、賒彌の東に鉢廬勒があるとす。すなわち、ギルギトの西方に賒彌があり、賒彌の北東に劫があつて、こゝより三國はみな鉢和の南に位置してゐるのである。また、賒彌は烏婁たしウツデイヤーナの北にあり（魏書西域傳に、烏婁國在賒彌北と）、鉢廬勒と烏場とは一路でおすばれてゐる。フツハーンとウフテイヤーナとの間に、鉢廬勒、劫、賒彌はあり、鉢廬勒の西で、劫と賒彌とを求め、さ

らにこの二國はヒンドウクシユに一部かかり、一部出たところにも求められる。とすると、自然地理から、劫はマストウジ、賒彌はチトラールでなければならぬ。こゝ以外に集落を認められた地域はないのである。自烏庫吉は賒彌をマストウジといたが、マストウジへ西方から宋雲・慧生が到達しようとするには必ずチトラールを経由せねばならない。チトラールを経由しなからんことを記さず、マストウジに至るとは考えられないし、マストウ

ージにもー至っていったら、ギルギトをまわら
 なくてはウツデーヤーナに至らない。ーか
 ギルギトたゞ鉢廬勒にはっいに至る能わずと
 いてい。たとくギルギトでなくとも、ダ
 シルは通りがらをえない。ーかー、ダシルに
 ついて宋雲・慧生は無言である。ゼバクとク
 ラン・オ・ランジャー間のサングレ千流域
 と波知とみると、そこからドーラ峠をこえて
 チトラールに出、チトラールからデーイルを
 へてスワート流域に出るのが、いちばん自然

な旅程である。サングレ千流域からスワート
 流域にむかじいとが、なほをあやまってマス
 トウージ方面へ東進するであらう。
 鳥場に至ったかれらは、ようやくこの地方
 の風土にふれて一息ついたありさまが日洛陽
 伽藍記にうかがえる。王城の西南五百里
 に善特山があった。甘泉・美果、經記に見ゆ
 山谷は和暖に、草木は冬に青い。時はあたか
 ち孟春。あたたかい風がわたり、芽を小さく樹
 々に鳥さえずり、蝶は花ばたけにとひかいて

いた。宋雲は遠く絶域にあって、このかくわ
 ーい景色も目のあたりにし、故郷をつかーさ
 はますばかりであった。そのため持病が出て
 纏綿としていく月もすゞーてーまった。
 カヤノの呪術にたのんでよーやくよくなつた
 のであつた。(五城西南五百里有善特山。甘
 泉美果見於經記。山谷和暖。草木冬青。當時
 太簇御辰。宋雲遠在絶域。因矚此芳景。歸懷
 之恩獨軫中腸。遂動舊疹纏綿經月。得婆羅門
 呪然後平善。)と。經記とは太子須大拏經。善

特山とはスガ一十太子の舊迹である。このウ
 ヲデイヤ一十からカンガ一ラ、ナガラハ一ラ
 入カハ一は行つた。揚街之は、乾陀羅の次に、
 道榮(藥)傳を引用して、慧生行傳と補綴し、
 那迦羅阿の記述を進めている。シヤガア一又
 は揚街之が道藥傳によつていふことに疑問と
 も、このことは宋雲がナガラハ一ラに行つ
 たことを證するものではないと(13)た。日洛陽
 伽藍記四卷五の宋雲らの行歷記事と隋書四
 經籍志にのるほじに流布した日慧生行傳とを

軸に再構成したことはさきにも述べた。各國の本末、山川、里數が省略され、また「西胡の風俗は大周小異だとして詳録していかなかった」（『法陽伽藍記』卷五末）この行歴傳は、宋雲家記や、時代こそ半世紀ほど前のものだが、ちよいと補綴に便利であつた道藥傳で補充された。この水は銜之がサハリの行歴内容を一層充實させ、正しくしようと企んだ結果にほかならない。たとえば、玄奘の傳記『大唐大慈恩寺三藏法師傳』の場合である。慧立のつく

つた原本が散つていたので再構成する任に當つた彦棕は、缺を『大唐西域記』で補つたらしいが、そこにあつた傳聞國はすべて省略し、路次の諸國を實際に近づけようとして努力したあとをみるこゝができた。ナガラハラのの記事が宋雲時代の實情を示していないことは、みとめられよう。しかし、宋雲らが行かなかつた場所とは言えないのである。また、『洛陽伽藍記』に「惠生在烏場國二年」とあることをもつて、慧生がウツティヤーナに宋雲と

賒彌より到着したのち引き続き二年滞在した
 證據にはならない。なによりもまがず慧生は、
 宋雲とカンダラに行き、雀離浮圖にもうで、
 雀離浮圖一軀・釋迦四塔變を銅でつくらせ、
 また雀離浮圖のそばの石塔で吉凶をうらなっ
 て、⁽¹⁴⁾ ころからである。そして鳥場に二年滞在し
 たままナガラハローには行かなかつたとす
 りわけにもいかなない。上來めたごとくカンダラ
 ラまできた佛僧はナガラハローへ足をのぼす
 ことを通例としたからであり、また慧生行

傳は自身が日洛陽伽藍記と宋雲行歴記事の根
 本資料だったから、日洛陽伽藍記にナガラ
 ハローが再構成されていゝことは慧生行傳
 にもその水があったことを示すものである。
 宋雲・慧生行程中、本論旨にかかわるル
 トは結局次のおりである。フツハローから
 クンドウズ河流域のバグラーンへ、そこより
 東歸してサングレチ流域からドーラ峠を經、
 チトラール、ティールから現スワートへ入った
 カンダラへ出て、インダス東方でその工

フタルテギンにも詔書を渡し、ナガラハリー
 まで行ったのである。このルートは四一五世
 紀にインド中國兩方面の行歴僧が使ったウツ
 テイヤータ・ガンダラ・ナガラハリー行き
 通路とはいささか異なっている。前行者の使
 わなかった波知や賒彌を通ったのは、當時中
 央アジア西疆最大の遊牧國家であったエフタ
 ルに北魏の國書を渡す外交目的をもってカハ
 リがエフタル本據地へ行ったためである。こ
 こで注意すべきことは、カハリがエフタルま

で行きながら、そこから南下せず、東行した
 點である。エフタル王に面謁したのは、バグ
 ラーン平野であった。そこからスルハーブ河
 沿いに南下すれば、溯上してパルミヤーンに
 出、シバル峠をこえてゴルバンド流域に出、
 カリピニーからナガラハリーへと進めたはず
 である。ヒンドウクシユを横断してから、波
 知、賒彌に行ったと考えたことは實際に馬鹿
 げている。この道を使わず、ヒンドウク
 シユの北側を再び東指したのは、カハリがエ

フタル勢力圏を少くともカンガラーまでエフ
 タル王麾下下の護送のもとに行つたからである
 じ。魏書西域傳の朱居、渴槃陀、鉢和、
 賒彌、乾陀はみなエフタルに附屬した地方で
 あつたことが明記されてゐる。すなわち、朱居
 は嘽達に役屬し、渴槃陀は嘽達到に附き、鉢和
 もまた嘽達の統べるところとなり、賒彌もま
 た嘽達到に附き、乾陀は嘽達の破るところとな
 つてゐた。波知については記述を缺くが、
 其の王總攝する能わざとしい、やはりエフ

タル傘下であつたことをにおわせてゐる。ウ
 ヲデーヤーナもまたエフタルに附くとは言わ
 ないが、そのより南のカンガラーが牛取られ
 ていたのにウツデーヤーナが無事であつたは
 らがない。宋雲はウツデーヤーナ王にも詔書
 を渡して、(國王見宋雲云、大魏使來。膜
 拜受詔書)。ウツデーヤーナ王がエフタルの
 派遣した人であつたか、在地の王であつたか、
 此はわかりにくいが、詔書を渡したのが、
 エフタル本國、カンガラーのエフタルに付

ンであつたことを考えると、ウツティヤナ
 だけ例外とみることも不自然である。この
 ようにしてエフタルがガンダラ以北をどこ
 までおさえていたかを知ることができず。そ
 れにつけて想いおこされるのがキダラのこ
 とである。寄多羅と名づける大月氏國の王は、
 勇武にして兵を興し、大山を越え、南のかた
 北天竺を侵し、乾陀羅以北の五國はことごと
 く寄多羅に役屬したといふ（其王寄多羅勇武。
 遂興師。越大山。南侵北天竺。自乾陀羅以北

五國盡役屬之。『魏書』西域傳。『通典』卷
 一九二、邊防八、大月氏の條。大月氏に屬
 する寄多羅の北天竺侵入も、同じく遊牧族であ
 るエフタルのガンダラ侵入も、その侵略の
 パターンは同じであつたはずである。ガンダ
 ラ以北の五國とは朱居・渴盤陀・鉢和・餘
 彌・鉢盧勒・波知・烏菴・劫・陀羅のうちか
 ら五國を指したものとみられよう。その中で
 朱居や渴盤陀は天山北麓の蠕蠕とキダラと
 のかわりいかんにより、五國中にはいらな

五國盡役屬之。と想起させよ。この五國とは
 朱居、渴槃陀、鉢和、賒彌、その下に鉢盧勒、
 波知、烏菴のいふの五國であつたろう。朱居
 とか渴槃陀と牛耳つたかどうかは、天山北麓
 の蠕蠕と寄多羅とのかかわり方いかんによろ
 じ。
 こりよじに時の勢力にのつた旅程であつた
 とみると、波知・賒彌が宋雲・慧生のルートを
 にありわれることは必然の結果であつた。そ
 北さえ除けばウツデーヤータに行き、カンダ

かつたかもし小ない。陀歴・劫は魏書に
 みえぬ小國で、五國の中にこゝ小また入るほど
 のものではなかつたかもし小ない。こゝいっ
 たガンダーラ以北の役屬國は單にエフタルヤ
 キダーラの勢力圏を示すばかりではなく、北
 インド侵入の経路をも示唆するものであろう。
 このよゝに、宋雲・慧生の旅程が時の勢力
 に據つたものであつたとみると、波知・賒彌
 がそのルートをみえるのは必然の結果である。
 この特殊事情を別にすると、ウツデーヤ・ガンダ

1うに行くといふ前世紀以来の大道が六世紀
 二〇年代までは少くともかわつていなかつた
 ことを證する。そして西は十カラハ1うまで
 であつた。こゝもまた從來の行歴僧たちのル
 1トと同じであつた。不思議にも巡禮者をふ
 くめた佛教側の記録ばかりでなく、中國の官
 撰の史書もまたヒンドウ1クシユ西賑やその
 南麓に關する情報を缺いてゐる。さきへのバ
 た葦琬・高明のもたらしめた西域情報もここ
 再確認しておく。かゝりが歸國して傳えたこ

とは、西域に出る四道の存在であり、そのう
 ちの二道が葱嶺の西と西南に出る道である。
 ひとつは、ヤールカンドから葱嶺へおそく
 法顯の情報からみて、この葱嶺とは漢盤陀、
 渴槃陀であらう、そこからワツハー1ンもへ
 1シユグノ1ン方面に至る。もうひとつは、
 ヤールカンドから漢盤陀國を通り、西南へギ
 ルヤト方面へ至る。前者はトハー1リスター1ン
 方面に行く道、後者はギルヤトからカンガ1
 1方面に行く道を指してゐる。トハー1リスター

ーン方面に出る道とは宋雲たちが往路エフタ
 ル本地へ行った道であり、ギルギトからカン
 ガーラ方面へ出る道とは、行歴僧たちが一
 く使った道である。董琬らがえた五世紀前半
 末におけるこの情報に、行歴僧ばかりがこ
 いった道を使って當時インド佛教の中心であ
 ったカンガラーへ出たのではなく、ごく普通
 のインド行き交通路だったこととあきらかに
 してゐる。

おそくとも四世紀から六世紀宋雲時代まで

タクラマカン周縁部とインドとをむすぶ常道
 は、カラユルム西脈とヒンドウークシユ東脈
 とが交叉するカラコルム道ともよぶべき道であ
 った。この道路が困難をきわめた自然の中
 にありながらも頻繁に利用されたのは、佛教
 徒にとつてはカンガラーが當時のインド佛教
 の中心だったからである。このような道をも
 ったカンガラーに達したひとが、こゝまた當
 然のごとく行ったのは、東のカーシユミール
 でもなく、カンジス流域でもなく、なんと西

のナガラハいらであつた。一かもそこかり更
 に西へ足を運んだあとは皆無である。他の巡
 歴僧はいさしりず、トハリスターンの南部、
 ヒンドウクシユ越えにごく近づいた宋雲・
 慧生さえ、たとえエフタル勢力圏内を通行し
 たからだとしてもなお、トハリスターンも
 東指してカラコルム道に引きよせらるよう
 にしてカンガいらに行き、そしてナガラハ
 ーに行つた。このよくなすべての情況からみ
 て、ヒンドウクシユ西脈をこえる道は、六

世紀二〇年代ころまで、いたつてローカルな
 ものにすぎなかつたといえよう。このことは
 ヒンドウクシユ西脈の道路が無かつたとい
 うのでもなく、また彼此往來する佛教僧が利
 用しなかつたとして、そこに佛教がなかつたこ
 とをいふものでもない。一か、ここに四、
 五、六世紀と南北をむすぶカラコルム道は至
 近ルートであり、トハリスターンからヒン
 ドウクシユ西脈をこえてインドに至るル
 ー
 トは大變な大廻りである。大廻りもとらず、

至近ルートを採用することはあたり前のことである。カラコルム道がかくも使われ、ヒンドウ
 ークシユ道が全く顧られなかったのは、単に
 近道だったとか、廻り道だったとかの理由か
 らであらうか。そうではなかったのである。
 宋雲よりあとで、カラコルム道とヒンドウ
 クシユ道とは完全に役割を交替する時代が
 きた。そしてこの交通路の變化は、六世紀にお
 けるヒンドウークシユ南北の諸情況の轉變を
 反映したものであった。

第二節 六世紀宋雲以後の巡歴僧

宋雲・慧生以後の佛教僧のうごきをここで
 とりあげる。四世紀から五世紀にかけて大
 きな動きをみせたインドと中國との間の佛教僧
 の往来は、この時期になっていちぢるしく停
 滞した。中國からインドへ赴いたことはいな
 い。インド僧で中國へ渡ったことは、これもま
 たさわがって減少した。そのいとたちと四
 代三寶紀にももとに、四代唐内典録にも、
 續

高僧傳曰、曰古今譯經圖紀曰、曰開元釋經錄
曰なほを参考にいつつ拾いと次のとおりであ
る。

(1) 優禪尼國の國王の子、月婆首那が大同年
間(五三五―五四五)に北齊から梁へ入り、
曰大乘頂王經曰を譯した。

(2) 西天竺優禪尼國の三藏法師波羅末陀が梁
の大同一二年(五四六)八月一日に南海に達し、
太清二年(五四八)閏八月にはじめて建業に到着
した。

(3) 南天竺の三藏法師曇摩流支が北魏洛陽で
宣武帝(四九九―五一四)のため譯經した。
(4) 北天竺の三藏法師菩提流支が弘法のため
遠く葱左に^{のぞ}往み、北魏永平のはじめ、五〇九
年ころ華北にいたった。

(5) 中天竺の三藏法師勒那摩提が北魏正始五
年(五〇八)に洛陽にいたった。

(6) 北天竺の三藏法師佛陀扇多が北魏正光六
年(五二五)から東魏元象二年(五三九)ま
で洛陽の白馬寺、鄴の金華寺で譯經した。

(7) 南天竺國波羅奈城の婆羅門瞿曇般若流支が東魏元象のはじめ(五三八)から興和の末(五四二)まで鄴で譯經した。ただし、口續高僧傳には熙平元年(五一六)からとし、口開元錄にはこの年次を採る。

(8) 北齊の沙門統、北天竺烏場國の三藏法師那連「提」耶舍(那連提黎耶舍)。

(9) 北周明帝代(五五七-五六〇)に波頭摩國の三藏律師攘那跋陀羅が闍那耶舍とともに長安の婆伽寺において口五明論を譯した。

口歷代三寶記 卷一一、口內典錄 卷四にみえ、「口周の二年出す」とする。口續高僧傳 卷一は、「口周の文帝の二年に至り、波頭摩國律師攘那跋陀羅有り。周言は智賢。耶舍岷多等と共に口五明論を譯すとある。

(10) 北周武帝のとき(五六〇-五七七)、摩勒國の沙門達摩流支が宇文護のために婆羅門天文の卷を譯した。口內典錄 卷五はこれと天和年間(五六六-五七二)とする。

(11) 北周武帝のとき、摩伽陀國の三藏禪師闍

那耶舍が弟子闍那崛多・耶舍崛多とともに長安の四天王寺で譯經した。

(12) 北周武帝のとき、優婆塞の三藏法師耶舍崛多が闍那崛多とともに宇文護のために譯經した。

(13) 北周武帝のとき、北天竺提(健)達國の三藏法師闍那崛多が譯經した。

(14) 達摩般若。父は般若流支である。

(15) 北天竺烏場國の三藏法師毘尼多流支が五百由旬を遠しとせず、錫を振って方と巡り、

中國にやっつけてとどまった。日内典録には、開皇二年(五八三)二月に日象頭精舍經、七月に日大乘方總持經を譯出、李道寶・曇皮(般若流支の次子)が傳語したとする。曇皮の名は日續高僧傳にみえない。

(16) 北天竺烏場國三藏の達摩崛多、隋言法藏として日内典録に卷五にみえる人と、日續高僧傳に卷二は、「達摩笈多。隋言法密。もと

南賢豆羅囉國の人トクシヤトリヤトとする。

日開元録には、日内典録に、日翻經圖に(現

行可古今譯經圖紀には別一に「北天竺鳥場國の人と云うは非なり」とする。

この一六入のうち、(3)(4)(5)の三人は宋雲以前にかかわるひとである。またどのようなるトで中國に來住したかわからない。とくに(4)の菩提流支は葱左に泣んだのであるから陸路をとったわけであらうが、委細不明である。

(14)は中國居留者であり、問題外である。(1)の月婆首那は梁へ北から入ったけれども、その北齊へどいいうルトでいつ入ったか不明である。

波羅末陀(真諦)は、梁の武帝が扶南からきた使を張汜に送りせたとき、名徳三藏と大乘の諸論・雜華經などを求めさせ、扶南は波羅末陀に懇請して經論をよっていかせることになり、海路梁へ至ったひとである。大同二年八月一日に南海に達し、太清二年閏八月に京邑に到着し、武帝の頂禮をうけ、寶雲殿で供養されたといふ(日續高僧傳卷一)。(6)の佛陀扇多是、五二五年から白馬寺で譯經に従事した。北インド出身といふから多分ス

ソートとかカンダラの出であるが、來歴はわからない。宋雲慧生と同時代人である。宋雲往訪以降にはまず般若流支であるが、五一六、五三八年というように鄴におけり譯經開始年次に兩説あり、そのうえやってきたルートに至つては何もわからない。毘尼多流支は、日續高僧傳の卷二によると、那連提黎耶舍の傳にみえ、一時にまた同國の沙門毘尼多流支あり。隋言は滅喜なり。五百由旬と遠しとせず、來りて盛化を觀る。開皇二年（五八一

二)、大興善に於て日象頭精舍と日大衆總持經の二部を譯す。給事李道賓傳「詔」し、沙門法纂筆受し、沙門考琮序を制するとあり、那連提黎耶舍と同じ北インド烏場の出身であったが、いつ中國に入つたか、五八二年より前とだけわかれば足りである。はつきりするのには次の三人である。

北インドのウツディヤーナに生まれた那連提黎耶舍（ナレインドラヤシヤス）が北齊の鄴に入つて文宣帝の禮遇をえたのは、天保七

年（五五六）、カ水が四〇歳のときであつたと、口續高僧傳口卷一ヤ口開元錄口卷七にみえる。口遂算して五一七年の生ま水と考えらる。口内典錄口卷五は、開皇五年（五八五）に九〇餘歳で譯出を完了し、同九年（五八九）に示寂したとする。口歷代三寶紀口卷一ニにもとづいたらしむ。口一ハ一ニ水にもとづくと歴史事實と合わぬ。一七歳で出家し（五三三）、二一歳（五三七）で具足戒を受け、五夏を満したのち（五四一以後）、遊方へのぼり、佛鉢

佛衣、佛頂骨、佛牙、佛齒をみたというから、ポルシヤポラ、ナガラハーラに行き、また天梯、石臺、龍廟、寶塔をみたというから、中インドにも行き、竹林寺（竹林精舎）で一〇年をすごした（口續高僧傳口）。そしてウツダイヤーナに歸つた。はやくとも五五〇年ころである。歸國したカ水は、寺が野火に焼かれたので、水をきつかけにいて六人でゲル一ポをつくり、雪山の北における弘法を志した。雪山の山頂に至ると二路あり、人道

はけやく、鬼道はたやすい道であった。か—一旦ふみこむと殺害に遇うので、そのむかし聖王が路の入口に毘沙門天の石像をつくり、手で人道をさし示させてあった。同伴のひとりがあやまって鬼道に入ってしまったので、ナレインドラヤシヤスはしまったと思ひ、観音の神呪をとえながら一〇〇歩おつてみたが、すでに鬼害にあつていた。自らは呪力のおかげでこの厄難をのがれ、人道をすすんだがこんどは山賊にあつた。もつぱら観音の

神呪を念じると賊と相対しているのに賊は目が見えず、靈衛をこつむつたといふ。路を循つて東へ東へと指し、苜苜國に到つた。そこで突厥の亂に遇い、西方へもどらうにも路は通じず、故郷にもどる氣持を絶ち、流轉して北方は泥海のほとりに至つた。そこは突厥から七〇〇〇餘里も北であつた。そこに居ても氣持はおちつかず、遠く北齊の疆域に身を投じ、天保七年(五五六)に京鄴に届いた(日續高僧傳卷二、大正五〇、四三二a-c)。

ナレインドラヤシヤスがウツテイヤナを出て雪山の北へ行くべくどのようなるトをとったか、傳記は無言である。イカイ、カハが佛景（影）、佛鉢、佛衣、頂骨、牙齒、神變一に非らざるをまいて一会發起、瞻奉したのほ、さきに言ったように五夏學律ののちであり、一旦歸國したのちに雪山の北へ行ったのであるから、再びカンカイヤナガラハラへと南下、西進したのではあるまい。雪山山頂でグアイシユラグアナ石像をみていじ。

グアイシユラグアナ像のことは他の人の傳記にみえないが、曇摩密多がカンカイヤナを發するや迦毘羅神王が衛送したといひ（日高僧傳五卷三、大正五〇、三四二〇一三四二〇）。

兩神格は異なるが、どちらにも佛教にとりこまれた外神が道中の安全を計るために利用さ小ていゝところが注意さ小い。とくにグアイシユラグアナは北方護神である。となると、ナレインドラヤシヤスはウツテイヤナからすぐ北上し、カラユルム道を通ってタクラ

マカン西縁地方に出た可能性が大きい。そうして、口續高僧傳口では、経路を示すことな
くすぐに芮芮國に至るといい一文もつなげて
い。又逢山賊。專念前呪。便蒙靈衛。
賊來相突。對自不見。循路東指。到芮芮國。
と。そのころエフタルが朱居「波」へヤ
ルカンド、渴槃陀へターシエクルカーン
を葱嶺東方ではおさえていたこと、前節でふ
かたとおりであい。そのエフタルは柔然と婚
姻關係にあり、北方の脅威に對處すると同時

に協同關係にあつた。口魏書口蠕蠕傳に明示
さいている。「婆羅門（蠕蠕の主阿那瓌の從
父兄で侯力發。阿那瓌が北魏に來奔後に推さ
れし彌偶可社句可汗となり、のち高車に破ら
れた）はついで部衆と謀叛して、噉達に投じ
た。噉達は三たが妻つたが、みな婆羅門の姉
妹であつたからである。』（中華書局標點本、
二三〇二頁）と。このようなエフタルと柔然
といつた二つの遊牧勢力の關係からみて、ナ
レーンドラヤシヤスは、タクラマカン西縁地

方からまっすぐ天山北麓へと足を投じ、モン
ゴリア中央部の柔然可汗庭へいったとみてよ
いのであろう。

ナレンドラヤシヤスは、柔然に至るか、
至らぬうちに、突厥の進撃に本喰わしてしま
った。北齊の天保三年（五五二）二月に、突
厥はまず土門伊利可汗を首長として、柔然を
攻略していた。二月に阿那瓌はやぶらひ、
自殺してしまった。天保四年（五五三）二月己未に
は、突厥はまたまた柔然を攻め、柔然は國

をあげて南へと奔る（『北齊書』卷四、中華
書局標點本五六―五八頁。『周書』卷五〇突
厥傳、上記標點本九〇九頁）。そのよりのち、
天保六年（五五五）に木杆可汗侯斤（燕都）
は柔然の主である鄧叔子と闘って、これを破り、
鄧叔子は西魏にのしかけていった。この一連の
事件を「突厥の亂すに値」（値突厥亂）と（
大正五〇、四三二―末）は接する。ナレンド
ラヤシヤスの鄴都到着は五五六年であり、ま
た故郷ウツデーヤーナ出發は早くとも五五二

年であるニとを考慮したとき、か水の大廻りの旅が長くとも四年であるニとは注目に値する。か水は天平寺で傳譯をおこなひ、五六六年には可大集月藏經四等七部を完了したが、北齊討滅と法難とによつて地を東西にさけ、寧息に違なかつたが、隋の興了や詔をうけ、大興善寺に入り、開皇二年（五八二）一二月に翻經を創開し、可蓮華面經を出した。次に闍那崛多である⁽¹⁵⁾。この人はガンダラに生まれ、ポルシヤポラに居た。可本國に寺

あり、名づけて大林と曰ふ。その寺で得度した。可大唐西域記四卷三に、烏仗那國の主城耆揭釐城の南ニ〇〇里の大山のまわに、摩訶伐那（唐言は大林）伽藍があつたとす。あるいはガンダラのポルシヤポラで生まれ、ウツダイヤナのマハーヴァササंगाーラーマにて出家したのかもしれない。嗜那耶舎と師 upādhāyā と、闍若那跋達囉を阿遮利耶 acārya として得度した。爾後勉學に年を積む一方、インドには聖境靈迹がなお現存して

いので嗜那耶舎ととも具さにこけりを礼
観してまわつた。ニ七歳で具足戒をうけ、三
夏をすびしたのち、師徒志を結んで遊方弘法
せんと一〇人一團となり、カンガラを出發
す。その經路は、續高僧傳卷二によれ
ば次のとおりである。

路は迦臂施國に由る。そこに一年滞在し
た。迦臂施國王は闍那崛多の先生である
嗜那耶舎に手あつく請うて耶舎を法主と
し、説教をもらつた。(16) その利益は

きわめて広く中きわたつた。さてかいら
はさらに巡歴に専念することになり、そ
こで大雪山の西のふもとをわたりすぎた。
大雪山はもとより天險の峻極である。厭
怛國にゆきつき、途次にはとどまらず、こ
こにはじめて滞在することになった。こ
の國は野は空莫として人口は稀薄であり、
必要とする食糧をつくるといふことかな
い。そこで闍那崛多はとうとう具足戒を
捨て、力を竭して王につかえた。(17) かいら

はしばしばエフタルにとっての重大な時
局に直面したが、⁽¹⁸⁾長壽の神さまである冥
靈にたすけられ、幸にもわがわいの
がれた。また、渴囉槃陀や于闐などの國
國と經て、しばしば夏雨寒雪などきいし
い自然に遭遇してしばらくとどまること
もあつたが、とうに佛法がひろまってい
くこともなかつたから、永くは住まな
かつた。また、吐谷渾國に到達し、すぐに
鄯州にゆきつゝいた。そはちようど西魏

大統〔後〕元年であつた。艱危をへたけれ
どもみな心のはいよいよはげんだ。カン
ダラを出發して跋涉するごと、ここに
三載。一〇人中過半数が路次に亡くなり、
残るは四人、わがわがに生きながらえてこ
こ鄯州についたのである。北周明帝の武
成の年（武成元年、五五九年）にはじめ
て長安に届き、草堂寺にやどつた。師徒
遊化してやっと來心をはたし、あらため
て淨壇に登つて再び具足戒を受けた。（

路由迦臂施國。淹留歲序。國王敦請其師。
 奉為法主。益利頗周。將事巡歷。使踰大
 聖山西足。固是天險峻極也。至厭怛國。
 既初至止。野曠民希。所須食飲無人營造。
 岨多遂捨具戒。竭力供侍。數經時艱。冥
 靈所祐。幸免災橫。又經渴囉槃陀及于闐
 等國。屢遭夏雨寒雪。暫時停住。既無弘
 演。栖寓非久。又達吐谷渾國。便至鄯州。
 于時即西魏大統八後一元年也。雖歷艱危。
 心逾猛勵。發蹤跋涉。三載于茲。十人之

中過半亡沒。所餘四人。僅存至此。以周
 明帝武成年初屆長安。止草堂寺。師徒遊
 化。已果來心。更登淨壇。再受具足。
 闍那岨多是明帝の別敕によつて送られた四
 天王寺に居住せしめられた。以後新經を翻譯す
 ることになったが、武成二年（五六〇）夏四
 月辛丑、明帝は延壽殿で崩御したので、大々
 的に翻譯事業を中止することができず、口十一面
 觀音經口と口金仙問經口など、梵本に闕ある
 ものを補なつただけであつた。そのうち天和

年中（五六五—五七一）に譙孝王宇文儉が出
 づ益州總管になつていくのに請われて同行
 し、蜀に三年いた。そこでは益州の僧主を任
 じられ龍淵寺に住し、日妙法蓮華經普門品
 重誦偈、日種種雜咒經、日佛語經と譯
 出した⁽¹⁹⁾。武帝の建德三年（五七四）五月の廢
 佛に遭遇した。武帝は救へ下して長安へ引き
 まどし、重く爵祿を如えて儒禮に従ふようせ
 まつたが、死を覺悟で肯ぜず、あまりの貞亮
 に帝は怒んで、放逐した。そこで甘州（張掖）

528

から突厥へ出た。

一方、北齊では武平六年（五七五）に竇暹
 ・道邃・僧曇ら一〇人が一團となって西域に
 採經し、梵本二六〇部をえて歸國しようとし
 て突厥庭まで来たところ、齊が滅んだことと
 知つた（五七七年）。ちよいとそこで突厥庭
 に留められ水ていた閻那崛多りに出會つたので
 ある。竇暹らは隋が興つて開皇元年（五八一）
 一二月に京邑へかえつた。自分たちのまたら
 した梵本が何であつたかは突厥庭で閻那崛多

529

らが名稱だけは譯してやっていたので判っていたが、いざ開皇五年（五八五）に大興善寺の曇延ら三〇餘人が譯そいとしても音義乖越して通じない。ここに救あって闍那崛多らの招請がおこなわれたのである。

日續高僧傳には闍那崛多の没年を開皇二〇年（六〇〇）、七八歳とする。これに従えば生年は五二三年、受戒は五四九年である。ガニガリーラ出發は三夏とすしたときであるから五五一年。鄯州（青海樂都）まで三載と要

したから鄯州着は五五三年か五五四年である。ところが、右に見るとおり鄯州到着は、西魏大統元年（高麗本）とか西魏の後の元年（宋元明各本・宮本）という。前者は五三五年であり、後者ならば五五七年であろう。五三五

經の序には、「大隋仁壽元年平西の歲、普曜寺沙門上行の請うところによつて、遂に三藏崛多・笈多二法師とともに大興善寺において天竺多羅葉本と重勘したるへ大正九、一三四C」とあり、闍那崛多が仁壽元年にまだ生存していたことを傳える。さらに曰開元録の編者智昇は、「仁壽の末に崛多が東越にながされた」とする。曰内典録にも同様である（大正五五、五五〇b、二八〇a）。智昇は曰續高僧傳にも信用せず、闍那崛多傳末に「自開

皇五年訖仁壽之末出護國等經」とつけ加えた。いまかりにこ小に従つて、仁壽の末（六〇四）と七八歳としてみると、生年は五二七年、受戒は五五三年。三夏學律ののちのガンターラ出發は五五五年。その年から鄴州まで三載と要したのであるから、鄴州にいたのは、五五七年か五五八年である。シャヴァン又は、不思議なことにガンターラではなくカーピシと出發したのがニ七歳であつたとし、こ小に三年を單純加算し、五五七年に鄴州到着と

計算して開皇二〇年七八歳没と肯定した。ガ
ンガ一ラの出発點であることを忘れ、出發以
前の學律三夏を忘れたのである。⁽²⁰⁾

闍那崛多の一行は出發時の一〇人が、鄯州
到着のとき四人になつていた。四人には師僧
である嗜那耶舍とア一ヤールヤである闍若那
跋達囉とをまず擧げることができ、闍那崛
多傳には北周廢佛に際し甘州から闍那崛多が
突厥王庭へのがれたことを述べて、そこに「
和上」と「智賢」の名がみえるからである。

すなわち、「路、甘州を出で、北のかた突厥
に由る。闍梨智賢、西に還りて滅度す。崛多
及び和上、乃ち突厥の爲に留めり。未だ久
しかりざりし間、和上、遷化し、雙影孤寄、
安んずる所を知らず。和上は嗜那耶舍、
智賢は闍若那跋達囉である。和上は突厥庭に
つくや遷化し、智賢は西方へ遠い旅立ちを
してしまつた。雙影のうち他の一人は耶舍崛多
である。歴代三寶紀の卷一一は、耶舍崛多
・闍那崛多の二弟子と嗜那耶舍（闍那耶舍、

可歴代三寶紀にによる一が可定意天子所問經
 五卷以下六經と大家宰宇文護のため四天
 王寺に譯したにこと、および耶舍崛多カが小寺同
 學闍那崛多とともにやは宇文護のため可
 金光明經更廣壽量大辯陀羅尼品五卷以下三
 經と譯したと、のべてハハ大正四九、一〇
 〇b1c)。智賢すなわち闍若那跋達囉（可
 續高僧傳の表記。可歴代三寶紀と卷一一と
 可内典録の卷四は攘那跋陀羅と表記）が可五
 明論に（聲論、醫方論、工巧論、呪術論、符

印論の五）一卷と闍那耶舍とともに譯したこ
 とは、さきに(9)で示した。このとき耶舍崛多
 と闍那崛多とが傳説の役と果したといふ（大
 正四九、一〇〇b)。このよりに闍那崛多
 Jīnagupta は、その師たる嚩那耶舍 Jīnayasas
 兄弟子の闍若那跋達囉 Jīnabhadrā、年長の同
 學耶舍崛多 Yasogupta とともに鄴州にいたり、
 北周から隋にかけて四人とも譯經史に名をと
 どめたといふ、きわめてめずらしい例である
 同時にここに注意したいのは、四人の出身地

である。ジナヤシヤスは摩伽陀國三藏禪師、
 ヤシゴグアタは優婆塞國三藏法師、ジユニヤ
 ナバトラは波頭摩國三藏律師、ジナグアタが
 捷達國三藏法師とい(21)。ジナグアタはガン
 ーラの宰相ヅアジユラパーラを父とし、
 シヤゴラに居し、他三人に依つてマハーガ
 ナサンカーラーマで出家したのである。イン
 ド各地の出身者がガンガラーに鳩集していた
 ことを知る事ができるのである。

次に達摩笈多である。(16)に記したすうに、

日内典録には「達摩崑多」とし、「達摩笈多」
 としない。出身地もウツディヤとしい
 る。日開元録には「小りと非とした根拠を示
 さないが、日續高僧傳にも日開元録にも
 ウツディヤへ行つたとも書かず、またウ
 ツディヤにしかかゝることを明かす字句も
 ない。ウツディヤ出身だとする日内典録
 にもすてがたいが、いま陳垣日釋氏疑年録
 (巻三)に従い、すをわち日續高僧傳に從
 い、「達摩笈多」とし、羅囉國の人とする。

曰成唯識論述記に安慧（ステイラマテイ）
 は羅羅國のひとたとい（22）、義淨曰大唐西域求
 法高僧傳に卷上の玄照が羅茶へ行かす小たと
 あ（23）曰大唐西域記に卷一一に伐臘昆（ガア
 ラビー）は北羅羅國たとあり、摩臘婆國（マ
 ールワー）は南羅羅國たとあり。とこには摩
 臘婆の大都城が莫訶河（マヒー河）の東南に
 據るとみえうので、この大都城は現バローダ
 （ガアトードラ）であ（24）。ガアラビー國は西
 アールワー國は東であり、この兩國とあわせ

たううないしラタとは、キャンハイ灣奥の中
 心にした大地域である。
 達摩笈多 Dharmagupta は、二三歳にして中
 インドの韃靼究撥闍城（カーニヤクブジヤ、
 現カナウジ）に住き、とこの究牟地像伽囉磨
 （クムダ寺）で落髮出家し、ニ五歳で具足戒
 と佛駄笈多（ウパードヤヤ）・舊笈達多・
 普照（以上パーキヤールヤ、なお普照だけは
 サンスクリット名を）續高僧傳には示して
 ない）にうけ、そより三年をそこで過した

のち、普照が吐迦（タツカ）國王の招請に應じたのに随伴してそこへ行った。タツカ國、タツカデーシヤは現シパールコトを中心とする地方である。すなわちカーニヤクブジヤから北西へ進んだのである。一年後に普照はカーニヤクブジヤにもどったが、かれはそこの提婆鼻何囉へデーヴァ・グイハラにのち四年住んだ。そのようにしていろいろな大小乗の國や佛寺をまわり、見聞も一層あつたのであり、タツカデーシヤにはそのころ、北

路の商人が多数きて、東方に「大支那國」があることを傳えた。はじめそれをきいても、はつきりと信じることもなかつたから、まじやそこへ行ってみようといふ氣にもならなかつた（北路商人頗至於彼。遠傳東域有大支那國焉。初雖傳述。不甚明信。未作來心）。しかし、自分の志は遊方といふことにあり、このあたりにこのろをつなぎとめることとてなかつたから、クいに迦層施國（カーピシー）まで往つてしまった。吾人をグループと

てカーピシーにとどまったのである。その
 王寺にとどまった。ガルマグアはついに
 四人を將いて國城の中で二年いた。寺寺と
 遍歴してつぶさにその學問を觀た。カー、
 遠く遊化する心はやはりなおおちつかない。
 カーピシーはちよび北路と會合する地點で
 あり、雪山へヒンドウークレユ)北側の貿易商
 人のキヤラヴァンがみなここにあつまつてく
 る。ところが商客の滞在する旅舎へサライ
 びなんとまた、支那大國では佛教が興盛して

いるときき、みんなの氣持は一致して、中
 國へ行つてみることに決まった。これはたんに
 中國で佛教がどういふふうにおこなわれて
 いるかを觀るのではなく、一切衆生を利益し、
 佛經を弘めるためであつた(但以志在遊方。
 情無所繫。遂往迦脣施國。六人為伴。仍留此
 國。停住王寺。笈多遂將四伴。於國城中二年
 停止。遍歷諸寺。備觀所學。遠遊之心尚未寧
 處。其國乃是北路之會。雪山北陰商侶咸湊其
 境。於商客所又聞支那大國三寶興盛。同侶一

心。屬意來此。非惟觀其風化。願在利物弘經。
 カーピシーからすすんで、雪山の西足、
 薄伽羅國、波多又拏國（可開元録は沙多又
 拏國とする）、達摩悉鬚多國（可續高僧傳は
 三本、宮本に従う。高麗本は鬚にフくる）を
 わたりすぎ、こわりの國國ではどこにも久し
 く住まず、ただ風土や諸寺、その儀式を知り
 ことごとく足わるとした（便踰雪山西足。薄伽羅
 國。波多又拏國。達摩悉鬚多國。此諸國中並
 不久住。足知風土諸寺儀式）。そわからう渴羅

槃陀國にいき、一年とどまり、沙勒國に行つ
 て二年、沙勒王の造つた王寺にとどまり、こ
 こから一人が故郷へかえつた。次に龜茲國に
 行き、王寺にとどまって二年すみ、王の引き
 とどめをのぞきりきつてひそかに一人の僧を
 つれて烏耆國へとぬけ出し、そこの阿爛拏寺
 （可續高僧傳は三本、宮本は嚧につくる）で
 二年すまして、よりやく高昌に至り、諸寺を
 客遊して二年とどまつた。この僧侶は漢言
 を學んでいた。さらに伊吾へ行って一年とど

まったか、難に値って西南にのが小たが、莫
 賀延磧に入りこみ、水と求めても。はら観世
 音呪を誦し、夜雨をえてよみがえり、ついに
 瓜州にいった。玄奘はのちにこゝで道を失い、
 観音菩薩を念じたが、悪鬼去らず、般若心經
 (観音はこの經の主題)も誦してはじめて救
 じたという。ガルマグプタが誦したのも、觀
 世音呪というからには、般若心經の最後の神
 呪であろう。ガルマグプタは同伴二人とこゝ
 と通ったが、到着したときは一人であった。

ついで帝旨をこゝむって開皇一〇年(五九〇)
 冬一〇月に京城に入り、その名利に所位とな
 った。煬帝が東都を造營すると、洛水南濱の
 上林園に翻經館を設けて譯經に當りせた。二
 八年間に七部三三卷を譯了し、唐の武德二年
 (六一九)に洛陽で示寂した(又至渴羅槃陀
 國・留停一年。未多開導。又至沙勒國。同伴
 一人復還本邑。餘有三人。停住王寺。謂沙勒
 王之所造也。經住兩載。……又至龜茲國。亦
 停王寺。又住二年。……其王篤好大乘。多所

開悟。留引之心旦夕相造。笈多係心東夏。無志潛停。密將一僧間行。至烏耆國。在阿爛拏寺。……又經二年。漸至高昌。客遊諸寺。其國僧侶多學漢言。雖停二年。無所宣述。又至伊吾。便停一載。值難避地西南。路純砂磧。水草俱乏。同侶相顧。性命莫投。乃以所齎經論。權置道旁。越山求水。冀以存濟。求既不遂。勞幣轉增。專誦觀世音咒。夜雨忽降。身心充悅。尋還本途。四顧茫然。方道迷失。踟躕進退。乃任前行。遂達于瓜州。方知委曲。

取北路之道也。笈多遠慕大國。跋涉積年。初契司徒或留或歿。獨顧單影。屆斯勝地。靜言思之。悲喜交集。尋蒙帝旨。延入京城。處之名寺。供給豐渥。即開皇十年冬十月也。……煬帝定鼎東都。敬重隆厚。至於佛法。彌增崇樹。乃下敕於洛水南濱上林園內置翻經館。……笈多蘊其深解。遂闕陳弘。始於開皇中歲終於大業末年二十八載。所翻經論七部。合三十二卷。……至武德二年。終於洛水。……
 夕ルガグバ夕示寂年は右のとおりであるが、

没年齢がわからぬので、生年がとらえられ
ない。一か一迦臂施、沙勒、鳧兹、烏耆、
高昌に於けり滞在がそれこれ二年。渴羅槃陀
と伊吾とが各一年である。二年をあしかけと
みると、少くとも七年、そつくり二年間とみ
ると一二年をこえない路次の滞在である。た
からタツカデーシヤを出發したのは、五七八
年以前である。

一古人のインドから中國へわたった佛教僧
のうち、出身が北インド以外であるのが一〇

名にのぼすが、半數が北インドに何らかの關
係をもち、そこから中國にわたった。そつうい
つたいとたちのうち、ルートも確定できずの
はきわめて少ない。一か一、そこにあらわれ
たルートは宋雲以前にはなかつたものである。
ナレインドラヤシヤスの場合、ウツデーヤ
十から北上して雪山をこえて、漠北に進んだ
らしい。ウツデーヤに出發は五五二年をく
だらない。柔然可汗庭にいたのは五五五年を
くだらない。鄯に至ったのは五五六年と確定

してゐる。そのころはまだカラコルム道が以前と同じ状況にあり、同じように使われていたのである。ナレインドラヤシヤスがあとにしたウツダイヤナと山ひとつを境にし、またかれにおくルてお登するに三年、ガンダラをまたジナグアタラの一行は、もうカラコルム道を使つてゐない。五五五年の出發であるから、ほとんどナレインドラヤシヤスが北齊の都へ入らんとしてゐたときである。かれらは西進してカーピシー、大雪山の西のふ

もとをわたり、エフタル國で滞在し、ターシユクルカーシンへ進んだ。かれの傳記には、わがわが一路はカーピシー國に由ると記され、從來のルートたるカラコルム道をとらなかつたことをこゝ記してことわつてゐる。次にその後約二〇年たつてタツカデーシヤの中心であるシパールコトを出發したガルマガプティ行は、シパールコトで大支那國とのことをききながらガンダラから北上せず、またガンダラには少くとも傳記では一言もふれ

ず、遊方の目的地としてシアールコトからカ
 ーピシーへ行った。中國へわたったのは結局
 カーピシーで再度いんなところか知ったから
 で、むしろたままたま中國行きは決定したの
 にすぎない。タツカデーシヤから遊方の旅に
 出ようとしたとき、當時としては第一にカー
 ピシーであったことを傳記の文章は傳えてい
 り、そののとろがな人も注意を引くので
 ある。タツカデーシヤからカーピシーまで道
 は、タクシヤシラー、インダス渡河、カンダ

ーラ、ナガラハラーを経由せねばならない。
 とろが傳記にはそのいれもあらわれない。
 ジナグアタの場合も同じであり、ガンターラ
 の西、ナガラハラーが去てこない。そこは宋
 雲以前巡錫の樞要地であったから、そのあら
 われないのが不思議である。略傳のためか。
 彦琛の日達摩笈多傳は四卷へ大正五〇、ニセ
 ハ（一）にはあったかもしれない。ヨ 續高僧傳
 四のタルマクアタ傳には、それ以外の人の傳
 記には見られなないインド語表記や、その解説

がまじり、その點からみて彦琮の『達摩笈多傳』を節略したのではないかとおもえる。いずかにせよ、節略抄記されたものの中に、カーピシーがとりたてて採録されたものも、カーピシーが以前とまた意味がふかかろう。カーピシーが以前と異なつて、意味をもちはじめたことを明示するからである。

第三節 ヒンドゥークシユ西足道の

登場

ナガラハローが宋雲以後、そしてナレインドラヤシヤス出發の五五二年以前には、昔とかわらない位置を佛教徒たちに與えていたことはしる。ナレインドラヤシヤスが具足戒をうけたころ、すなわち五三七年前後、宿老たちが佛影を感慕し、佛鉢、佛衣、頂骨、牙齒のこもとをうけさすのをヤシヤスは聞き、

可水もいぢみたいたものだと思つたことが、
 日續宮僧傳にみえてゐる。「二十有一得受
 具篇。聞諸宿老歎佛景迹。或言某國有鉢。某
 國有衣。頂骨牙齒。神變非一。遂即起心。願
 得瞻奉。」と。佛鉢がポルシヤパウにあり、佛
 影がナガラハールにあつたことはすでに言
 までもない。七世紀はじめのころ玄奘も佛影
 を見はしたが、佛影窟の所在も不確かだ、よ
 うやくそこに行きつゝいたけ小どもきわめて見
 にくかつたことを日慈恩傳の卷ニは示してゐ

る。「法師はそこに往つて禮拜しようとおも
 い、道をきくと、可あ水はてて、そのうに盜
 賊が多い。この二、三年來行つても見えない
 場合が多い。だから行くはともまばらだ。」と
 一（法師欲往禮拜。承其道路。荒阻又多盜賊。
 二三年已來人往多不見、以故去者稀疎。）あ
 れほどに巡禮僧をよつめ、慧遠として遠く渴仰
 した佛影がこのありさまであつた。玄奘は往
 つて禮拜したいと思つたが、カーピシー國か
 らついできてきてく水たカーピシー國王派遣の護

衛ははやく自分の國元にかえりたいのでうろ
 うろーているのをこのまない。行かせてくれ
 ようとしない。玄装は「如来真身の影は億劫
 にも逢いがたいものだ。ここまで来たのに往
 って禮拜しないという法はない。ゆるゆる先
 に行つてくれ。私は佛影窟にいっただうすがか
 えつてくるから」と言い、ひとりじわかして
 燈光城へナガラハラの圍城）に行き、とあ
 る寺へ入つて道順をきき、いっしょに行つて
 くれとひとを求めたが、一人もいこいとい

者がいない。と、やく一人の子供が、この寺
 の莊園が佛影窟の近くにあるから、送つてい
 っつて莊園まで行くといふので、よくやくこの
 子供とつれだつて行き、莊で宿をとることにな
 った。老人がいてその場所を知っているとい
 うのでお登りしたのは迷についた翌日である。
 途中賊にあつたが、連中も何とか説得したの
 でついてきた。窟は石澗の東壁にあり、西む
 きに開口していたが、中とうかがつてもくら
 くして何もみえない。送つてきたグラフィマンの

老人は、つまづいて入って行って東壁へ（奥壁）
 にふれたら、もどつて五〇歩のところまで、ま
 つづぐ乗とむくと佛影がそこにみえよとい
 う。玄奘は入って足をたよりにすすみ、五〇
 歩ばかりいって、はたして東壁にさわった。
 さわりおゆるや、却行して立ち、誠をつくし
 て百拜あまり禮拜をくりかえしたが、全然見
 えな。自分に障罪が多いのだと自責の念に
 かり水で、かなしみ、またなやむ。なおも至
 心に勝鬘經などの諸經を禮拜しつつ誦し、讚

佛偈頌などもやり、讚もやり、禮拜をやった
 りして、また百拜あまりをした。東壁を見る
 と鉢ほどの大きさの光があらわれ、ひかいて
 きえた。悲喜にもごもに更に禮拜すると、復
 盤ほどの大きな光があらわれ、またきえた。
 ますます感蒸を増し、世尊の影を見ずにはこ
 こを去るものかと、さらに二百拜餘もおこな
 うと、とうとう窟全体があかしくなつて、如
 來の影が皎然と壁に在るのが見えた。佛身と
 袈裟はみな赤黄色で、膝以上がはつきりと、

華座以下はぼーっとしていた。左・背後に
 は菩薩・聖僧などの影もまたみなとろって
 たへ大正五〇、ニニ九〇一ニ三〇a。一應
 玄奘は佛影をみたことはみたが、すでにカー
 ピンシーの人は行ってみようともせず、ナガラ
 ハーラの僧も誰一人玄奘を案内しようとする
 人とはいなかった。玄奘一人は中国でも古来
 名高いこの場所を見ずには居なかった。か
 北のみ特別だったのであり、佛影窟巡禮はあ
 りをたつていたというべきであろう。だから

ジナグアタヤダルマグアの傳記がその節
 略してしまつたのだとは言いきれない。ナレ
 ーンドラヤシャスののち、古世紀中ほどより
 のちにナガラハーラが従前の姿でなくなつて
 しまったことが豫想さ小よう。そのことは、
 ひとりにこぼりではなく、ガンダーラについ
 てもタクシヤシラーについていえる。その
 上のべる前に、ジナグアタヤダルマグアの
 とつた道すじについてもう少しくわしく検討
 しておきたい。

ジナグポタのルートは、ガンダーラ、迦
 施、大雪山西足、厭怛、渴囉槃多あり、ガ
 ルマガポタのルートは、タツカデーシヤ、迦
 臂施、雪山西足、薄佉羅、波多叉拏、達摩悉
 鬚多、渴囉槃多である。どちらもカーピシー
 からヒンドウイクシエを西の小もとでわたり、
 厭怛なり薄佉羅へと進み、バダフシヤーンか
 らワフハーインを通り、ターシユクルカーインに
 至るルートである。ジナグポタのルートに厭
 怛、エフタル國がみえ、ガルマガポタのル
 ートに國名として厭怛國がみえないのは、ガル

488

トに國名として厭怛國がみえないのは、ガル
 マグポタがそこを通らなかつたのではない。
 國として中國が認承していたエフタル、宋雲
 らが訪れたエフタル國がすでにきえ去つてい
 たからである。中國がみとめる國としてのエ
 フタルは五六〇年代の末にはすでになかつた。
 才なわち西突厥がその勢力をそいで、トハー
 リスターンに身内を送りこんでいた。現クン
 ドウズ北西、アームー河南岸のカライエハザ
 ールにかはりは鎮押していた。(25) エフタルは

489

かゝるのたみに消え去つたのではなく、かゝる
 りのもともとの根據地に依然として居た。宋
 雲がおとづれたところであり、ジナグロヤが
 おとづれたところである。ガルマグロヤが通
 ったのは、西突厥南進後のエフタル國である。
 それをエフタル國と記さず、薄佉羅國と記し
 たのは、上の理由によるが、そこが薄佉羅で
 あると記された直接の理由は、エフタルの寄
 る城郭名ないし地方名をもつていたからであ
 る。それが現バグラーン Baghlan とよばれる上

地であり、クシャーンの大神殿スルフコタル
 出土の碑銘にもみえる Bago-Lango である。⁽²⁶⁾
 カロピシーからエフタルないし薄佉羅まで
 の間にある、雪山へ大雪山の西足とは、言
 うまでもなくヒンドクシユの西方の麓で
 ある。それに関連して玄奘の歸路の大雪山こ
 れは西足においてであつたかどうか。西足し
 の實際の位置を求めるとに参照すべきである
 う。これは弗「佛」栗特「氏」薩憐那「ガズナ」と
 カロピシーとの間にある地域からカロピシ

一の玉城へ行つた。七日の無遮大會を王がお
 こなうのにつきあつてから、北東へ一ヨージ
 ヤチ行き、瞿盧薩謗城へいき、カーピシーの
 邊域小邑およそ數十所をへて、大雪山の波羅
 犀那大嶺へハワク峠を象とにもこえ、安
 坦羅縛國へアングラーバ中流域へ下つた。⁽²⁷⁾
 したがって、カーピシーからパンジュシール
 河をさかのぼりきつてハワク峠をこえ、アン
 グラーバへおりたのである。これはヒンドゥ
 ークシユ山脈をほとんど中央部で横断したも

のではない。
 のであり、といていつ西足の名に値するも
 のではない。
 この點を検討するために必要なのは、當時
 の中國における西域情報であり、その第一が
 隋代に編纂された西域圖記である。編者
 である裴矩の傳へ、隋書の卷六七に編纂の
 経緯が示されてゐる。
 煬帝が即位すると東都を營建した。裴
 矩は職として府省を擔當し、九〇日で成
 就した。そのころ西域の諸蕃が多く張掖

にやつてきて中國と交市していた。煬帝は裴矩に交市を管掌させたのである。裴矩は煬帝が遠國を經略する氣持の強いことを知ったので、いろいろな地方の商胡が來るとかかたりをいふなつてその國の風俗や地理をきき出し、西域圖記三卷を撰述して、入朝してたてまつたのである。煬帝即位。營建東都。矩職修府省、九旬而就。時西域諸蕃多至張掖。與中國交市。帝令矩掌其事。矩知帝方勤遠略。

諸商胡至者。矩誘令言其國俗山川險易。撰西域圖記三卷。入朝奏之。通鑑曰卷一八〇、隋紀四、大業三年の末尾には、西域諸胡多至張掖交市。帝使吏部侍郎裴矩掌之。矩知帝好遠略。商胡至者。矩誘訪諸國山川風俗及庶人儀形服飾。撰西域圖記三卷。合四十四國。入朝奏之。仍別造地圖。窮其要害。とあり、地圖記には四十四國に及び、地圖つきであつたことが知れる。西域圖記曰編纂年次をはつきり傳へし資

料はすくなく、そのうゑに諸書さちまぢである。司玉海四卷一六に引く裴矩傳は、大業二年。西域諸國至張掖交市。令矩護視。乃訪諸商胡國俗山川險易。撰西域圖記三卷。合四十四國。別造地圖。とし、撰出が大業二年なのか、交市の事實がこの年なのか、さだかでない。日書唐書四卷六三の裴矩傳は、この間のことと大業初年と同三年との間に記している。一かゝり、その三年の記事は、恒岳親祭の記事であり、日隋書四煬帝紀、日通鑑四卷一

ハ一は恒岳親祭と大業四年八月とする。だから日書唐書四の記事は日西域圖記四撰出年次とさだめるには不安定である。また日通鑑四は右のとおりで、大業三年末尾に裴矩の外交記事もかなり整理した形だおいていゝ。司馬光は左小を四年以後とはなていなかつたことがわかつたばかりで、後に立たない。日西域圖記四をつつたのは裴矩の吏部侍郎時代である。これは諸書にはつきりして、仁壽二年八六〇二一秋八月に文獻皇后獨

孤氏が崩じたとき、牛弘と齊禮にのつとつて
 喪禮をとどこおりなく行い、吏部侍郎となつ
 た。ついで大業元年（六〇五）三月に東都管
 建の下詔あり、彼は府省造營擔當を命じられ
 て九旬で完了し、このあと吏部侍郎のまま下
 張掖に出張し、諸胡交市を管掌した。西域
 圖記にもよとめ、張掖かりかえり、奉った。
 煬帝は悦んで物五百段を賜い、毎日裴矩を召
 して親ら西方の事と問い、かれに西域外交と
 一任した。これによって吏部侍郎から民部侍

郎となり、民部侍郎の役を行わないうちにす
 ぐさま、黄門侍郎に遷轉した（帝大悦。賜物
 五百段。毎日引矩至御坐。親問西方之事。矩
 盛言胡中多諸寶物。吐谷渾易可并吞。帝由是
 甘心。將通西域。四夷經略。咸以委之。轉民
 部侍郎。未視事。遷黄門侍郎。隋書に裴矩
 傳に。吏部、民部、黄門といつ移つたか明示
 したものはない。通鑑に大業二年（六〇六）
 秋七月の條に、黄門侍郎の裴矩が牛弘、蘇威、
 宇文述、張瑾、虞世基、裴蘊とともに官吏選

叙の任に當った記事がある。大業二年秋七月以前に黃門侍郎になつてゐたことがわかる。張掖出張の時期も諸書に明らかでない。大業二年正月に、東都完成と期して監督者に褒賞が下された(隋書と煬帝紀)。張掖は九月で自分の任務を果したから、それは三月から九日の後の六月あたりである。大業元年六月から大業二年六月までの間に、張掖出張・西域圖記の作成が求められた。正月の褒賞まで張掖が大興域内にいた可能性があると

すこと。玉海の「大業二年」が生きてこよう。大業二年二月は六〇六年二月中旬である。おそらく西域圖記は六〇六年七月までに仕上げたはずである。⁽²⁸⁾
 西域圖記にも見られた情報は、したがって七世紀の初めのものである。本文も圖も早くに散逸したが、隋書と張掖傳に再録された自序がきつめて重要な情報を提供する。そこに當時の文明地域であった東ローマ・ササニヤン朝・シルシヤ、そしてインド方面に

至る三つのルートが出てゐるからである。

敦煌から出て西方の海に至るまで、およそ三道をなす。その水が水に要害の地がある。北道は、伊吾から蒲類海、鐵勒部、突厥可汗庭を經て、北流する河水とわたり、拂菻國に至つて西海に達する。中道は、高昌、焉耆、龜茲、疏勒より葱嶺をわたり、又鍛汗、蘇對沙那國、康國、曹國、何國、大小の安國、穆國を經て波斯に至つて西海に達する。その南道は、鄯

善、于闐、朱俱波、喝槃陀より葱嶺をわたり、また護密、吐火羅、挹怛、帆延、漕國を經て、北婆羅門に至つて西海に達する。

北道はハミからバルクル湖、カラクタグ地方へ北上してボグドゥオラ北麓ルートを經て、エルトウズ谿谷に入り、草原ルートを従つて東ローマ方面へ行くルートである。中道はハミを經由し、トルファン、カラシヤフル、クチヤと天山南麓を通つて、カーシユガルヤ

鳥什からフェルカーナ越えをし、ソグドの各
 城市を西へ次いで、サーサーン朝ペルシアに
 行くルートである。南道は、チヤルクリク、
 ミーラーン、ホタン、カルガリクなど、タク
 ラマカン南縁を通過してターシユクルカーンへ
 登り、そこからワツハーンを経てトハリリス
 ターンに出、南下してヒンドウリフシユ中の
 パーミヤーンを通り、カール河流域に出、
 ルートである。五世紀北魏の董琬報告にみよ
 四ルートにはヤールカンドからパミールへと

進み、そこからギルギトへ出るもの、またワ
 ツハーンからシユグノーン方面にあるものが
 あった。宋雲らもトハリリスターのバグラ
 ーンまで行きながら再び東指した。佛教資料
 以外でこの情報につぐものが、七世紀はじめ
 の情報による西域圖記にはほかならない。
 そこには右の情報と異なり、カラコルム道は
 既に見えず、かわってトハリリスターンから
 ヒンドウリフシユをこえて北インドへとある
 ルートがはっきりとあらわしてありである。

西域圖記ののちほ二〇年、玄奘がと
 ったルートはこれと同じであつたことを示す。
 往路アルメズ（坦密）からアイム河をわた
 った玄奘は、活國に到着する。「活」とはク
 ンドゥズ北西、アイム南岸のカライエ「ガ
 ール」附近に國城をもつた地方である（附論
 参照）。そこから縛喝へバルフに西行した
 のはさきさいを受けただりであるが、バルフか
 らはヒンドクシクシ中をバミヤンへと
 南下し、そこから東へカーピシー、ラグマー

505a

ン、ナガラハいら、カンガいらと進んだので
 ある。歸路もアングラからホストないし
 ナフリンを通つてカライエ「ザール」へ去、そ
 こからターラカーン、バダフシヤン、フツ
 ハーンと進んでいゝ。就中ラグマーンから東
 は、玄奘が各國の國名をはじめて記すときに
 夾注にのべたよりに、「北天竺の境疆」である。
 才なわち西域圖記に「北婆羅門」である
 から、トハリスターンからこの北インドへ
 の道は必ずバミヤンを通過したのである

506

圖 30

西域圖記のルートは七世紀はじめにたまたま張掖で得られた貿易商人の情報であったけれども、すでにカラユルム道にかわってヒンドウークシユ西脈のルート、すなわちパルミヤーンをとおってカーピシーを経てインドの北西部へはいりルートが確立していることを傳えた。カラユルム道がきえ、これにかわってヒンドウークシユ西足道が登場したのである。ジナグアタヤダルマグアタ傳にあらわした「雪山西足」とか「大雪山西足」とは、

とは、パルミヤーンないその附近を通過する謂である⁽²⁹⁾。

ヒンドウークシユ西足道がなにもこのときたまたま史書に浮上してきたのでないことは、七世紀中ごろから六〇年代にかけてこのあたり⁽²⁹⁾の状況を傳えている「大唐西域求法高僧傳」中の玄照傳にあらわれている。玄照は二回のインド行きを費行して、第一回はソグドから鐵門を通ってトハリスターンへ觀貨羅に出、そこから吐蕃へ行つて文成公主に會い、

その援助のもとに北インドのジュルンドゥル
 (閼蘭陀、玄奘は閼爛達羅と表記)へ行き、
 中インドへ行った。トハリリスタンから吐
 蕃へ行くみちで「葱阜」とわたった。フツハ
 ーンと通過したのであろう。かゝる中インド
 で王玄策に會つた。歸國した王玄策の奏上に
 よつて玄照は高宗の敕旨をうけて歸國する。
 往法苑珠が文成公主にあつたのは、文成公主
 降嫁の六四一年以後と「い」ことになす(可舊
 唐書四卷一九六)。歸國した玄照が高宗に拜

謁したのは麟徳年間(洛陽行幸のときであつ
 たと「い」)。それは麟徳二年(六六五)春正月
 壬午の二とである(可舊唐書四卷四)。歸國
 した玄照は、長年婆羅門の帶歸を命じられて
 出發する。六六五年以後と「い」ことになる。
 ギルギト經由でカシユミールに行こつた
 のである。長年婆羅門はそこに居たからであ
 る。北インド界までくると王玄策が婆羅門を
 つれて歸國するのに出會つた。玄策や婆羅門
 は玄照に羅茶へ行つて長年薬をとつてきてく

水とたのむ。さてここは西インドなる羅茶へ
向う彼のルートは不思議な大迂廻をすること
になる。

三人が去会ったのは北インド界だといつか
り、法顯傳に從えばガレルあたりである
う。ガレルが葱嶺をわたった最初の北インド
の國としていふからである。ガレルがギルギ
トから南下してカニガールへ去らず、ワツハー
ンへ北上し、トハリリスターンに去、カーヒ
シへとヒンドウクシュをこえ、ナガラハ

ーラを通つてシンドウへ去、ラクへ到着した
といふ。羅茶で玉の禮敬を受け、四年をすぎ
し、南インドをまわつて雜藥を仕入れ、ポド
ガヤ、ナールンダーへ進み、ナールンダーで
義淨とあつた。中國へもどらうとしたが、
泥波羅道は吐蕃がふさいいで通水ず、一方カー
ロシの途は多氏がせまつて通過しにくかつ
た。但泥波羅道吐蕃擁塞不通。迦畢試途
多氏投而難度。……そこで仕方なくラージ
ヤグリハなごマガダの豎迹に想いをはせてい

るうろ、中インドの蒼摩羅跋國で病をえて死
 んでしまった。カーピシー方面がアラブのイ
 スラーム勢力におさ水出したりは、ヒジュラ
 紀元三〇年へ六五〇にアブドゥツラーカイ
 ガン「アーミールがホラーサーン太守になつ
 たららで、ムアーウィヤがウマイヤ朝初代
 カリフへさき一六八〇になる。シース
 ターン太守にイブン「サムラーが再び任命さ
 れ、カーブルに進撃し、カーブル「シヤハ
 このムスリム軍に對するため、ザイギリス

インのラトビールと協同して當り、水を撃
 退するとともにカーブルからホストまでを再
 び自らの手にかえした。⁽³¹⁾
 玄照の兩度の旅行をみると、ワツハーンが
 らギルヤトを経て吐蕃へ行ったり、ギルヤト
 とカダレルまで行ったのにワツハーンからト
 ハーリスターンに出、カーピシーヤナガラハ
 ーラへ彼の傳記に如來の頂骨禮拜のさまがみ
 える)を通じてシンドゥへ行き、マールワ
 ヲアラビーへ行つて、水をみる、水をみる、

カラコルム道を南下してカンガールに至る。トを光壁に避けていたことがわかる。玄照が茅二回インド行かり歸國せんとして、カーピシの道がアラブ、イスラームの進撃により通じがたかったというのは、ちようど六六〇年代に當っていたことと示している。しかもこの注目すべきは、インドから中國へわたる陸路が、一にネパール道、二にカーピシ道といつて、ニツクかなかつたこと、すなわちこの兩道が南北をむすが大道であったこと

とである。長年葉を求めて南下すれば近いはずのカラコルム道もその中途まできていなから使わず、北上し、そして西進し、そして山をこえて東進して南下するといふ大廻りをとらざるをえない、そして大廻りでもその方が容易であったのは、カラコルム道が使えない大きな理由があったのであろう。

ナレンドラヤシャスが五五二年にウツデーヤ、ナも去、五五五年に柔然可汗庭で突厥の攻略にあつたちようどそのころ、ジナグプ

タラの一行は、ナレインドラヤシヤスが使ったカラコルム道には見向きもせず、カーピシ、パーミヤーンを通りて、トハリスターンのエフタル本庭に至った。ほんの数年のちがいでヒンドウクシユ西足道がひらかれたのである。ジナグポタはテユルクの攻略にあったエフタル王庭から東へタリシユクルカーンへわたっていった。ガルマグポタはそれから二〇年ほどのち、すでにテユルクがおさえられたトハリスターンにパーミヤーン經由至った

たが、テユルクの屯所には近づかず、やはりエフタルの地を通ってバダフシヤーン、ワフハリンへと進んだ。七世紀はじめ、商胡たちもカラコルム道もさけていた。当時の大道はジナグポタ、ガルマグポタの使ったと同じ道で、ワフハリン、トハリスターン、パーミヤーン、カーピシ、北西インドとイールトであり、貿易商人も巡歴僧たちもこの道にみな引きよせられたのである。下って六三〇年代、四〇年代、そして六〇年代と、ヒンド

ウーグシユ西足道はかわらなかつた。四世紀、五世紀、そして六世紀前半までいくたのひとたちが通行したカラコルム道はここに廢絶し、ローカールな途路と化し、これにかわつて六世紀後半からヒンドウーグシユ西足道があらたに歴史の舞臺にのぼつてきたのである。

第四節 エフタルとガンダーラ

タキシラのダルマラージカリーの僧坊で六體分の人骨が埋葬の形をとらず、原位置で出土した。この人骨をB " S " グハの分析をもとにエフタルおよびエフタルが殺戮した佛僧と断定し、ガンダーラヤタキシラに侵入したエフタルがガンダーラ佛教に終焉を與えた下手人であるとしたのは、J " マーシヤルであった。確かに彼が根據とした『洛陽伽藍記』にエフタル

ルがガンガラーを占據したとみえていゝ。あるいは佛教典籍もミヒラクラーな暴虐な王が佛教を破壊したとし、インド石刻資料もフーナにミヒラクラーな一時の暴君がいたことを傳えている。一か、實際にエフタルがガンガラー佛教をマーシャルが豫想したように武力をもつて破壊したか、はなはだいたかわりい。エフタルのガンガラー侵入をもつてガンガラーにさしも隆興した佛教の終焉をみようとするマーシャルは、侵入年次を四六〇年と

ろにみている。マーシャルによれば、パルティア治下に生起し、キガラー、クシヤーンとともに従來の石彫とあわせて石膏型抜き彫刻がおこり、エフタルの侵入によつて四六〇年ころ、ガンガラーをはじめとする北西インドの佛教、佛教造形活動もおわつたといふ。このよくなマーシャルの説明は一見説得性に豊おかにみえる。それまで定まらなかつたガンガラー佛教彫刻史にひとつの枠組と與えた點は評價されるものであつたらう。そのため

に、部分的には不都合なところを認めつつも、マリーシャル以後大きな変更をこの枠組にせまううごきもなかった。

日本ではまた一九五五年に山田龍城博士が『蓮華面經』をエフタルが北西インドにおける破佛と直接語了經典として注目され、北西インドの佛教の凋落とエフタルフリーナなる外來異民族の蹂躪に原因すると補強された。⁽³³⁾
ナレインドプラヤシヤスが五八四年に譯出したことになって、いゝ『蓮華面經』の、その骨

子となる物語は、ゴリラナ外道の弟子『蓮華面』なる者が、佛法破壊の誓願を起し、ヤガト王家に生れ、ヒラクウ王（寐岐島俱邏）と成り、カシユミール國傳來の佛法興隆のシンボルなる『佛鉢』を破壊する。それによつて世は濁亂の様相を呈し、佛法は滅亡する。その後佛力によつて佛鉢は回復され、ヤガト大道が再び輝くに至るといふことを以て、經典の物語は終結となつてゐる。これによつて解るよ様に、蓮華面はヒラクウの本生で

あり、インドを征服したフリーナ（Freina）族の王が、本經成立の根底となつてゐることは明瞭である。⁽³⁴⁾

すゞにグプタ朝のスカンダグプタの對フリーナ戦を示すビーターリ石柱銘によつて、五世紀中ころにはフリーナ勢力がグプタ朝にとつて外來の對抗勢力になつてゐたことがいへる。⁽³⁵⁾ フリーナのトーラマリーナ王の貨幣にはグプタの標識である孔雀を打ち出し、グプタの繼承者であることを示してゐる。また、ナー

ハマダー河のエーラン碑文はトーラマリーナ第一年の年紀をもち、死せるマハーラージャマートリヴァシヌの弟、ダーヌヤヴァシヌによつてグイシヌ寺院建立を傳へる。⁽³⁶⁾ トーラマリーナをついだミヒラクラガイインドへの一部に君臨したことは、グワリオリ碑文にあらわし、第一五年にシヴァ神關係の寺院を建立したといふ。⁽³⁷⁾ このよゝないインド側の同時代資料をみると、フリーナ勢力がグプタ朝に對して打撃を與えた點はいろいろと見えて、

ヴィシユヌヤシグアといつたヒンドウ教に
 對する彼らの關心はうかがえりけ小ども、佛
 教を破壊した主人としてその面影は感じられな
 い。そのことについて碑文が無言であること
 は注目に値しよう。
 ミヒラクラが破佛者にしてあげられたの
 は、口蓮華面經口における寐岐曷羅俱邏の名(38)
 が碑文のミヒラクラと同一視さ小たかりであ
 り、またさらに、口付法藏因縁傳口卷六に、
 罽賓において寺塔を毀壞し衆僧を殺害した口

彌羅掘と碑文のミヒラクラとをいつしよに
 してしまつたためである。口また比丘がいた
 名づけて師子といふ。罽賓國において大いに
 佛事をなした。そんなときその國に彌羅掘と
 いふ名の王がいた。邪見ばかりがおそろしく
 さかんで、佛法をうやまい信じよ心かない。
 罽賓國に塔寺をこわし、多くの僧侶を殺した。
(彌羅掘が)
 よくきれり劍でまつて師子比丘を斬ると、
 なしには血がなく、ただ白い乳が流水出した。
 付法藏の人にはここにあとをたつた口付法藏

因縁傳の卷六、復有比丘。名曰師子。於罽賓國大作佛事。時彼國王名彌羅掘。邪見熾盛。心無敬信。於罽賓國毀壞塔寺。殺害衆僧。卽以利劍用斬師子。頂中無血。唯乳流出。相付法人於是卽絕」と。さらに曰大唐西域記の卷四に磔迦國（タツカデーシヤ、ガルマグポタ傳の叱迦）の奢羯羅城で數百年前に「摩醯邏矩羅王」がおこなった殘虐な破佛が記さ小ていじ。ヨライジヤタラソギニロニハ九一三ニ四頌（スタイン第一卷）にもさヒラクウの

暴逆がみえてい⁽³⁹⁾る。曰大唐西域記のヤロライジヤタラソギニロはすでに同時代資料ではなく、曰蓮華面經にも曰付法藏因縁傳にも罽賓における破佛のべ、インド碑文が示す地域とはむすびつかない。またもっとも注意する必要のある點は、佛教を破壊したといふ暴逆なミヒラクウが登場するのが、みな佛教側の文獻だといふ一點である。そこで、エフタルがフーナと同一視さ小、フーナの暴君ミヒラクウに佛教が一時に停頓し

た責任をおわせてしまった。お寄せたのは佛
 教側であったとい、一豫測がえらわよう。エフ
 タルはトハリリスターンの本地から北西イン
 ドに手をのばし、デギンを派遣し、そのため
 北西インドの人民が混乱した、混乱したのは
 エフタルが鬼神につき、佛教を積極的に後援
 しなかつたからである。宋雲・慧生の記録は
 このことを語る。いわく、

ここはもと業波羅國といつたが、歌達に
 滅ぼされた。かくてエフタルは一教勲

を立ててガンガラーの王とした。エフ
 タルの一治國以來二世たっている。一い
 まのガンガラー王は一生來凶暴で人を殺
 すことが多く、佛法を信じないで鬼神を
 まつることを好む。一この一ガンガラー
 國のいとたちはみな婆羅門種である。佛
 法を崇奉し好んで經典をよんでいたから、
 急にこんな王を戴き、はなはだ迷惑であ
 る。一そんなエフタル王は一勇力を自
 負してカシユミラーと領土争いをし、兵

と連ねて戦鬪し、すでに三年たっている。
 王は軍象五〇〇頭をもち、象一頭に兵士
 一〇人ものせ、象の鼻に刀をしばりつけ、
 敵と戦いませじえる。王はいつも國がか
 いにいて、一日中歸らない。ひと心とは
 老いつか小、だれもがなげきうらんとい
 る（ハ）洛陽伽藍記に、本名業波羅國。爲
 歌達所滅。遂に救勲爲王。治國以來已經
 二世。立性凶暴、多行殺戮。不佞佛法。
 好祀鬼神。國中人民悉是婆羅門種。崇奉

佛法。好讀經典。忽得此王。深非情願。
 自恃勇力。與罽賓爭境。連兵戰鬪已經三
 年。王有鬪象七百頭。一負十人。手持刀
 植。象鼻縛刀。與敵相擊。王常停境上。
 終日不歸。師老民勞。百姓嗟怨。
 エフタルはガニガラと席捲し、救勲を送
 りこんで支配したのである。遊牧國家の普通
 の支配形態である。そういつたエフタルがガ
 ニガラとを治めて、三世を経たとき、宋
 雲・慧生はそこを訪れたのである。正光元年

(五二〇) 四月中旬のことであつた。宋雲當
 時の生來凶暴なエフタル・テギンは二代目か
 三代目である。だからここにきて佛法に關心
 がなく、エフタルの神をまつるテギンの時代
 をむかえ、カンタラでは弱りはしてしまつ
 た。いつか、こんなテギンが支配したか判り
 ようかないが、五二〇年時點ですでにカシユ
 ミーラと交戦して三年たつていたのであるか
 ら、五一七年より前ではあつたらう。冒頭に
 のへたマリーシャルはこの記事に依據してカン

ターラ佛事全般の終末を四六〇年としたので
 ある。四六〇年とは、⁷世と三〇年(卅)と
 の意にとり、五二〇年から六〇年(二世)を
 引いて得られた年次である。二世前にはじめ
 てエフタルがカンタラを襲い、佛事を壊滅
 したといふのである。しかし、ここで判るこ
 とといえは、エフタルがカンタラに手をの
 ぼし、エフタル・テギンに支配させ、そして
 宋雲當時二代目が三代目のテギンだといふこ
 とがある。この二代目が三代目のテギンが

立性凶暴。多行殺戮。なのであり、不信佛法。好祀鬼神。なのである。そのために佛教徒たゞ被支配層は「深非情願」であつたのである。師老民勞。百姓嗟怨。はエフタル「テギンの對カシユミ」領土戰による徵發、經濟上の逼迫を示すものである。したがつて、洛陽伽藍記の一文の意味するところからは、エフタルのガンダラ占據の當初はもとより、宋雲時代のエフタル「テギン」に至るまで、カハラが現實に佛事を直接破壊したとす

る理由をさがすことはできまい。いわゆるガンダラの「エフタル破佛」は、諸種資料を同じ次元でとらえ、合糅したことに由来する虚妄である。

宋雲はガンダラを巡歴し、いろいろな佛事を見た。そしてその佛事が依然としていつかりしたものであり、衰亡のきざしもうかがえないことは、從來たれも注意しなかつたし、また無視してきたから、ここでもとりなして注意しておきたい。すなわち同じ洛陽伽藍記

此中の記事そのものが、はつきり次のごとく
言つていふのである。原文は周祖謨校點に従
つた（洛陽伽藍記校釋、北京中華書局、一九六三）。

於是西行五日。至如來捨頭施人處。亦有
塔寺。二十餘僧。復西行三日。至辛頭大
河。河西岸上。有如來作摩竭大魚。從河
而出。十二年中以肉濟人處。起塔為記。
石上猶有魚鱗紋。復西行三日。至佛沙伏
城。川原沃壤。城郭端直。民戶殷多。林
泉茂盛。土饒珍寶。風俗淳善。其城內外

凡有古寺。名僧德衆。道行高奇。城北一
里有白象宮。寺內佛事。皆是石像。莊嚴
極麗。頭數甚多。通身金箔。眩耀人目。
寺前有一繫白象樹。此寺之興。實由茲焉。
花葉似棗。季冬始熟。父老傳云。此樹滅。
佛法亦滅。寺內圖太子夫妻以男女乞婆羅
門像。胡人見之。莫不悲泣。復西行一日。
至如來挑眼施人處。亦有塔寺。寺石上有
迦葉佛跡。復西行一日。乘船渡一深水。
三百餘步。復西南行六十里。至乾陀羅城。

東南七里。有雀離浮圖。……上有鐵柱。高三百尺。金盤十三重。合去地七百尺。……塔內佛事。悉是金玉。千變萬化。難得而稱。旭日始開。則金盤晃朗。微風漸發。則寶鐸和鳴。西域浮圖。最爲第一。……雀離浮圖南五十步。有一石塔。其形正圓。高二丈。甚有神變。能與世人表吉凶。以指觸之。若吉者。金鈴鳴應。若凶者。假令人搖撼。亦不肯鳴。惠生旣在遠國。恐不吉反。遂禮神塔。乞求一驗。於

是以指觸之。鈴卽鳴應。得此驗。用慰私心。後果吉反。惠生初發京師之日。皇太后勅付五色百尺幡千口。錦香袋五百枚。王公卿士幡二千口。惠生從于闐至乾陀羅。所有佛事處。悉皆流布。至此頓盡。惟留太后百尺幡一口。擬奉尸毗王塔。宋雲以奴婢二人奉雀離浮圖。永充灑掃。惠生遂割行資。妙簡良匠。以銅摹寫雀離浮圖儀一軀。及釋迦四塔變。於是西北行七日。渡一大水。至如來爲尸毗王救鴿之處。亦

起塔寺。昔尸毗王倉庫為火所燒。其中粳米焦然。至今猶在。若服一粒。永無瘡患。彼國人民須禁日取之。以下は道榮傳によ

了那迦羅阿國の條）
宋雲はエフタル「テヤンの幕營で國の詔表を手渡し、王の案内でとある寺に案内され、そこにおけり了供給ははなはだ薄いものであった。その水から宋雲らはカンガラ國內巡禮をはじめめる。その記事が右の文である。一文の意味は大約下のとおりである。トその水から西

へ五日行き、如來が頭を捨てて人に施したところと、ここに至った。ここにストラパーと像院あり、ニロ人ばかりの像がいた。また西へ三日行き、シンドウ大河に至った。（中略）また西へ三日行き、佛沙伏城へ現シヤラパーラスリガリ）に至った。川原はよくこえていて城郭はまっちりとこのついで。いといとにはびわい、戸数も多く、林はよくしげり泉の水も中たか下あり。めずらしい産物が多く、いといとにはかむり氣なく、まごころがある。

ヴァールシャプア域内外には古くからの由緒あ
 る寺があり、名僧、徳あるひともし居て、行は
 けだかい。此一里に白象宮だったところがあ
 り、寺にいまはなっている。この寺の中の佛
 像その他はみな石像で、莊嚴はきわめてうる
 わしく、数もけなはた多く、つま先から頭頂
 まですっかり金でまわって箔おしりしているから
 見る者にまばゆいばかりである。寺の前には
 へむかしこの國がシビ國だったとき、太子スダ
 ーが布施心さかんで、父王の寶だったか敵

に與えてしまった。白象をつないでいたとい
 う樹がある。寺のおこりは實にこじいこと
 に由来する。(中略) 寺の内には太子夫妻が
 自分の子供たちまでバラモンに布施してしま
 う圖があり、このあたりのひとたちはこれを
 見て悲しみの涙をながさぬといふことがない。
 また西へ一日行き、如來が眼をえぐりとって
 人に施したといふ場所、今のチャールヤダに
 至った。ここにもストゥーパと僧院がある。
 この寺の石にはカーシヤバ佛足跡がある。ま

た西へ一日行くと、船で幅三〇〇歩ほどの深い川を渡る。そこからまた西南に六〇里いくと、ガンダラー城、今のペシヤールに至る。東南七里に雀離浮圖の名で古来しるれる大塔がある。一の中略一塔の中の佛像その他はみな金・玉でつくられ、千變萬化、とても筆舌につくせぬものではない。あさいがさしのぼると相輪の金盤がかがやき、風がわたると寶鐸が和して鳴る。西域のストウーパ中、第一級のものである。雀離浮圖の南五〇歩に石のス

トウーパがある。形は圓形、高さは二丈。はなはだ奇跡があり、吉凶を占うのに使っている。指でふれて吉なら金鈴が鳴り、凶ならゆさぶっても鳴らない。洛陽を出發した日に胡太后は救して五色百尺の幡と一〇〇〇口、錦の香袋と五〇〇枚もたせて下さり、王公卿士も幡二〇〇〇口だったか、惠生はホタンからガンダラーにかけてあらゆる佛事のところにもないきわたるようになら、ここにきて急になくなつてしまひ、胡太后下賜の百尺幡

一口が残ったばかりなかつたが、それもシビ
 王のストリパーに奉納してしまつた。宋雲は
 奴婢二人を雀離浮圖におき、永く清掃の用に
 あつたから、恵生はついに旅費をさき、工人
 の上舟をえらんで銅で雀離浮圖一軀をシヤカ
 四變處のストリパー等、要するにストリパーの
 ミニアチャモつくらせたのである。こ小より
 北西へ七日行き、大河をわたり、如來がシビ
 王であつたとき、鶴の身代りになつて鷹にくわ
 へて鶴を救つたところに至つた。ストリパー

と僧院がたつていた。(後略)。
 宋雲らの見聞からは、どうみても、ガンダ
 ラの佛教寺院のありさまは衰退どころか、
 ますますさかんである。シヤカの四變塔は從
 來どおり、まぢんとあり、僧院も附隨してい
 た。ガンダラ平野の中心に位置する佛沙
 伏城に関する記述などはまたた繁榮を保ち
 つづけていたことが察せられる。これを讀ん
 で、エフタルが直接手をくだしてガンダラ
 佛教をほろぼしたとは、たれしも思はないで

あろう。エフタルはガンダーラを支配するに
 當って佛教と直接彈壓したり、自ら祀る鬼
 神をおしつけたのではなかつたろう。佛教と
 いふものにかかわりあわなかつたのである。
 支配者の護持をうけない宗教がそのまゝ無事
 に永續するはずはない。エフタルのガンダー
 ラ佛教に對する消極性が興えた影響の方が大
 きかつたはぶである。

ここでもいささか注意する必要があるのは、
 宋雲の訪れたエフタル「テギンの幕營の所在

にある。ここを根城にカシユミールと領土争
 いを三年もつづけていたその幕營である。幕
 營から宋雲たちは西へ西へと進んでガンダー
 ラ巡禮をおこなっている。幕營から五日行程
 が捨頭施人處である。これは法顯が竺刹尸羅
 才なやち截頭といつたごとくへ大正五一、八
 五八〇、タクシヤシラーで、今のタキンラ
 である。タキンラから三日行程でインダス渡
 河點に至る。玄奘はシヤールバズリガリから
 烏鐸迦漢茶城にいたり、そこから烏仗那へ北

上し、再び鳥鐸迦漢茶域にもどってインダス
 と渡渉して坦又始羅へタクシヤシラー一國に
 いたつたから、宋雲らの渡渉地點もそこであろ
 う。鳥鐸迦漢茶域すなわちワラージャタラン
 ヤニールにいひ Udhāyānīdāpura、いまのフンド
 村落に相當す⁽⁴⁰⁾。そこから西へ三日行程で佛
 沙伏城につき、さらに一日行程で挑眼施人處
 に至る。挑眼施人處は玄奘によると、布色羯
 羅伐底城へアシユカラーヴァデー、今のチャ
 ールサダの北一の北四、五里に相當するから、

佛沙伏城、今のシヤールバズカガリから西一
 日行程でついたところは、チャールサダにあ
 る。チャールサダから一日行程で深川に至
 り、そこから西南へ六〇里で乾陀羅城、ハシ
 ヤールに到着してゐる。
 法顯は捷陀衛へチャールサダと竺刹尸羅
 間と七日行程と書いてゐる。宋雲らの行路を計
 算しても、タクシラーインダス間が三日、イ
 ンダス・シヤールバズカガリ間が三日、シャ
 ールバズカガリ・チャールサダ間が一日で、總

計七日である。兩者の一致は偶然ではなく、法顯や宋雲がそれか個人として所要した時間数を記録したのではなく、少くとも當時の現地における城郭間の距離表示法であった可能性がある。この兩者の一致をてこにするとき、エフタル、テギンの幕營はタクシヤシラーから東へ離れること五日行程の場所である。洛陽伽藍記には、その幕營地をふくめ、タクシヤシラーも含めてガンダーラ國とわいていえる。エフタル、テギンがおさえた全域をガン

ダーラ國と見たてよいのである。従来なんと、この理由もなかにエフタル、テギンはガンダーラの佛教徒を苦めていたのだから、テギンはやまい意味のガンダーラ、すなわち法顯が捷陀衛國といつたチヤールサダあたりとか、宋雲による乾陀羅城へバシヤールとかに腰をおちつけていたと思ひこんでいなかったか。とすると、それは大變な思ひ込みというほかない。エフタル、テギンはカシユミラーとの戦いといふことがあつたにしても、

タキシラよりはるか東方にいたのである。タキシラ・シャラバズガリが六日行程であるから、ほとんど是れをタキシラから東へとった場所にテギンはいたことになろう。その正確な位置はとうてい定めがたいが、直線距離に直してタキシラから計ると、現ジェルムJhelum 附近に達する。とすると、エフタルTarnギンはジェルム河ないレソルトレインジまでをおおっていったことになろう。ジェルムはスリーナガル盆地からアリンケを通り、同名

圖 31

の河に沿って、西南へぬけ出てきた平野部の要衝であり、東にカシユミールの塙壁ピールパンジャール山系の山麓部、西にソルトレインジの東足をひかえ、ジェルムを中心にしたところがカンダラタキシラ方面からパンジャール平原へぬけ出す主要な門戸にあつてゐるのである。この自然環境は、エフタルがカシユミール勢力の平野部に對する進出を防止するためには恰好な場所、地點であつたとはいふことを示してよい。大唐西域

記によれば、玄奘往訪時代のカシユミール
 はインダス東方のタクシヤシラー、ソルト
 レインジ山中のドウミアールに比定しうる僧
 訶補羅へシンハプラ、ハザラに比定しう
 る鳥刺叉へウラシヤー、ポーンチに比定し
 うる半笈蹉へバーノーツア、ラージヤウリー
 に比定しうる曷邏闐補羅へラージヤプラを
 役屬させていた。⁽⁴¹⁾ インダス東岸からソルト
 レインジまでをカシユミールは自國の麾下と
 しておさえていたことがわかる。のちにのべ

了ようにエフタル勢力の退潮にもなつて、
 宋雲當時に係争中であつた地域全体がカシユ
 ミールに編入された姿をよむことができよ。
 ガンダラといふ呼稱も、したがって玄奘に
 よると、インダスの西側までである。日大産
 西域記に健駄邏國の條は、その疆域を「東西
 千餘里。南北八百餘里。東臨信度河」と記し、
 とくにその東界を玄奘が示したことにほ、
 加
 のような前代の背景があつたからであろう。

第五節 エフタルの盛衰と交通路の

變化

エフタルの盛衰を語る資料は極端にすくな
く、また断片ばかりであるが、その零細な資
料の中からみえてくるのは次の諸点である。
まず、宋雲らがエフタルの王庭からガンダー
ラのテギンに至る諸地方を訪れたころ、エフ
タルの勢力は、北は敕勒へテユルク、東は
ホタン、西はサーサーン朝ペルシアに及び、

南は牒羅にいたっていた。四〇餘國が朝貢し
た。宋雲がガンダーラの幕營に滞在中、その
テギンのところにも跋提國が獅子を獻上して
きた。口洛陽伽藍記卷五は右のことも記録
している。⁽⁴²⁾口魏書西域傳には朱居、渴槃陀
など葱嶺の東南をも牛耳っていたことが見え
北は漠北にわたりをつけて柔然と婚姻關係に
あったこと、さきに記したとおりである。一
方ソグドからマルギアナ地方といつたエフタ
ル王庭のあるトハリスターンの北、北西の

オアシス城市もその影響下にあった。康國傳
 (『魏書』)にこの國がエフタルに役屬して
 いたとみえる。漢北との婚姻関係によつてソ
 グド地方を確保することが可能であつたので
 ある。

これにさき立つ數十年前、エフタルはヤズ
 ドがルドニ世治下のサーサーンとホラーサー
 ンで深く接触し、ヤズドがルドニ世軍を幾度
 か敗走させた。停戦の條件として必ずエフタ
 ルはサーサーン銀貨を上納させ、エフタルは

得たところのヤズドがルドニ世サーサーン銀
 貨の上に自らの刻印を後刻して(countermark)、
 自らの貨幣として通行させ、あるいはサーサ
 ーン貨をそのまま使用したのである。エフタ
 ル刻印をもつたサーサーン銀貨には、即にし
 ヤーパールニ世へ三〇九一三七九)、ワルブ
 ラーン五世へ四二〇一四三八)が發行したも
 のが知られていすが、この事實は直にエフタ
 ル勃興の歴史をさかのぼらせるものではない。
 (43)
 銀貨年代と後刻印の年代とは必ずしも合致し

ないからである。パーロイズ、カワ
 ドーゼ、ワルカーシユ、ホスロー一世とい
 った五世紀中頃から六世紀にわたるサーサー
 ン銀貨に打ちあさした刻印は、このころもつ
 とエフタルの勢力が擴張したことを物語る
 ていよう。就中ペロロイズ貨上に刻印したま
 のがもっとも多い。ペロロイズがエフタルと
 の境界をしばしば侵し（あるいは逆であつたか
 もしれないが）、そのため両勢力間の抗争が
 しばしばおこつたからである。ペロロイズは

捕囚され、身代金として膨大な量のペロロ
 ズ銀貨がエフタルの要求に従つて動いた。ペ
 ロロイズの子、のちのカフロード一世はペロロ
 イズの身代金が支拂われるまで二年間、エフ
 タル王庭に人質として拘束された。ペロロ
 ズはその後、エフタル戦を再開したが、四八
 四年、メルグアルドで敗死したのである。
 ペロロイズ代のサーサーンはこのように對東
 方關係ばかりでなく、国内も不作・飢饉、災
 害が永續して極端な混亂状態にあつたとわ

北子。ペーロースにわつたカワード一世の
 貨幣には四八四年（ペーロース最後の年）と
 示すものがあるものの、そのものは杜絶えて
 四八八年から四九七年までのものがつき、
 再び三年杜絶えて、四九九年から五三一年ま
 でがそろって⁽⁴⁴⁾いる。カワード一世は既に即位
 したものの、上のよきな国内情勢を反映して
 カーレン家はアルメニアで叛亂し、ペーロー
 スの兄ワルカーシユと王とした。ワルカーシ
 ュは四八四年から四八八年まで在位した。追々

れたカワード一世は、以前ペーロースの身代
 りに居たエフタル王庭に遁走し、エフタルの
 絶大な援護のもとに四八八年にワルカーシユ
 と下して復位したのである。その後カワード
 一世は宗教問題で貴族と対立して幽閉され、
 再びエフタルの下に逃亡し、その庇護下にあ
 った。カワードの長兄ザーマスはその間推
 戴されて三年間王位についた。カワードはこ
 のたがもエフタル軍とともに歸還し、完全な
 エフタル傀儡王として五三一年まで在位した

のである。⁽⁴⁵⁾ 宋雲らがトハリリスターンヤガン
 グーラを訪れた時期のエフタル王は、このよ
 うなカワード一世をサーサーン朝ペルシアに
 送りこんだ、遊牧國家の統轄者であり、ガン
 グーラの好戦祀神のテギンはこの王の麾下で
 あった。四夷のうちで最も強大だといふ由縁
 である（『洛陽伽藍記』）。

エフタルがはじめて中國へ朝貢したのは、
 四五二年の對ヤズドガルドニ世戰終結後の四
 五六年である。このうちエフタルの入朝は五

569

〇七年まで空白となる。その空隙において、
 北魏太安五年（四五九）、和平元年（四六〇）
 として太和元年（四七二）と入朝したのは、
 居常、車多羅である。居常・車多羅をキダ
 ラの月氏とすると、このころエフタルはフル
 シヤポラに據ったキダラーの子に對していま
 だ進軍せず、カンダラーを中心とする北西
 インドは平穩だったろう。トハリリスターンの
 大月氏王キダラー（寄多羅）はかつて「勇武
 げ軍勢をもつて大山をこし、北インドに侵入

圖 32

570

いてガンダーラ以北の五國を役屬させていた
 へ大月氏國。……其王寄多羅勇武。遂興師。
 越大山。南侵北天竺。自乾陀羅以北五國。盡
 役屬之。日魏書曰大月氏國傳。百初本による
 との五國がさきに述べたようににガンダーラ以
 北ワフハーソンにいたる地域であるとすると、
 キダラーはヒンドゥーシユ東脈部、カラコ
 ルム西脈部のいわゆる懸度を通ってガンダー
 ラを中心にして北西インドをおさえたのであ
 る。そうして、その子供にプルシヤアラ（富樓沙

域)を根域にして管統させたのである(日魏
 書曰小月氏國傳)。七世紀、西突厥統葉護可
 汗の長子が吐度設としてトハリスターンの
 地にしてそこを統べたと同じ状況である。そ
 からバグラーン平野に勃興したエフタルが寄
 多羅を驅逐し(寄多羅爲匈奴所逐。日魏書曰
 小月氏國傳)、また寄多羅の版圖が北方では
 蠕蠕と近接していたのでしばしばカハラにお
 かされた結果(北與蠕蠕接。數爲所侵。日魏
 書曰大月氏國傳)、西方へ移徙し、薄羅城な

なる地域へうつたのである。一時に勃興し
 たエフタルはキダラと同じルートによりガ
 ンダーラに入ってこれをおさえた。魏書に
 乾陀國傳は洛陽伽藍記に乾陀羅國の記事と
 ほとんど同内容であり、その都城東南に雀離
 浮園ありとするところからみて、都城はプル
 シヤプラであり、すなわちキダラの子が監
 統していたところである。したがってエフタ
 ルはテギンを派遣してキダラの子を驅逐し
 たのでなくてはならない。とすると、車多羅

入朝の太和元年(四七七)以後にエフタルの
 ガンダーラ占據はおこったはずである。
 一方、サマルカンドの朝貢もエフタルの盛
 衰とつながりがある。サマルカンドの朝貢を
 表で見ると、エフタル勢力の強盛だった時代
 とあいだに前後二時期に集中している。これ
 をもつてエフタルがソグド地方に支配権を確
 かにもつた時期、もうでなかつた時期をみる
 とすれば、少くとも四六〇年代から六世紀の
 初めはじめまでエフタルは漠北にわたりをつ

けて對柔然關係といまだ完全なものにしてい
なかつたのみりぬる。すなわちエフタルが完
全にソグドを掌握したとき、サマルカンドの
對中國朝貢貿易を制限し、自らの朝貢貿易を
優先したとみるからである。ソグドが自由に
そのような遠距離貿易を行ふことができた時
代はエフタルが柔然にいまだわたりをつける
ことができず、ソグド諸都市を柔然の手中に
まかせていた時代である。エフタルに先立つ
キダール月氏が蠕蠕に北方を接し、ために

ばーば侵入をこうむつたのであるが、エフタ
ルが勃興してもなおばーばは以前ほどでは
ないが、そのような状況が続いたのである。
エフタルは四五〇年代後半にはじまり四九
〇年代まで斷續してサーサーン朝とかわる
一方、その後半の四七〇年代末にはカニダ
ールに侵入して北インドをおさえた。六世紀に
なつてサーサーンをカワード一世を媒介とし
て完全に牛耳るようになり、そのころまでに
はソグド地方も掌握し、まさに「四夷のうち

でもっとも強大と化した。北魏正始四年（五〇七）から北周明帝二年（五五八）まで、北朝に對して一七回の朝貢をおこなう一方、南朝に對しては、梁天監一五年（五一六）に厭帶夷栗陀王がはじめて使節を送ってから大同七年（五三七）まで六回の朝貢をおこなった。南北兩朝に對する朝貢をあわせると、五一・五一二・五一三、五一六・五一七・五一八・五一九・五二〇、そして五二四・五二五・五二六のように連年になつた。五一〇

年代から五二〇年代にかけてエフタル勢力が安定し、北は勅勒、南は牒羅、東西はホソンからパルシアをおさえたありさまをいふことができた。一かゝり、三〇年代後半になると變潮をきたし、五四〇年代にはわずか一回の朝貢、五〇年代には二回に激減し、五五八年をもちつて朝貢のいかにあつたと絶つた。

突厥の木杆可汗侯斤は、西魏恭帝二年（北齊天保六年）才なわち五五五年に柔然を破り、西魏に奔らせ、結局鄧叔子一派と討滅する。

とともに、木杆可汗は西方の厭達を破り、土境を拡大した。すなわち小水のように、柔然の彌偶可社句可汗婆羅門の姉妹三人がエフタル王の妻であり、エフタルが柔然と姻戚関係をむすぶことにより、北側の脅威を除いていた。このものをべたが、柔然を破った突厥がエフタルにその鋒先をむけたのも、兩者の関係を絶つことにあった（魏廢帝二年一五五三一三月科羅へ乙息記可汗一遣使獻馬五萬匹。科羅死弟侯斤立。號木汗可汗。……乃率兵擊鄧叔子。

滅之。叔子以其餘燼來奔。侯斤又西破厭達。……以上日月書曰異域傳下。ジナグプタリがカーロシリーからパリーミヤーンをこえてエフタル王庭にいったのは、カハらがガンダラを出発したと同様、五五五年であったとおもわれる。ジナグプタはそこで一時艱難に遭遇した。これはまさしく木杆可汗のエフタル攻破を指したものとおもいからである。柔然のうしろ立てをなくしたエフタルは北方にあらたに興ったテュルクの脅威とつけよことにな

ったが、一方では五三一年にカワードとい
 エフタル同然のサーサーン王を失い、あつた
 に立ったホスロー一世は漢北西方に據つた室
 點密と婚姻關係をもち、ホスローは室點密の
 娘婿、エフタルを北・西から鉄撃したので
 ある。五五八年に室點密はジャシユ、フエ
 ルガナ、サマルカンド、キシユを席捲し、さ
 らに五六二年ごろ再び室點密はエフタルを攻
 め、五六八年までには完全にその力を失われ
 め、アムール河以南に勢力を及ぼし、いること

となつた。(46) テュルクは通設の詰強を送りこ
 じエフタルの地をおさえてしまつたので、
 隋書(吐怛國傳)、その部落は分散してしま
 った(西域圖記)。西域圖記の
 序に吐火羅・吐怛と併記してあらわゆる吐怛
 は、分散後のエフタルがもとの本據地を保つ
 た状態を指し、半世紀後に嚧達部落活路城を
 唐が大汗都督府としたそのエフタルもまた右
 と同地である。ナレインドラヤシヤスは、エ
 フタルがテュルクに攻破されるころに

エフタルの息のかかっていたウツデイヤーナ
と離れて乘然王庭にいき、そこでテユルクの
攻略にみい、ジナグポタラはエフタル本庭へ
いったものの、やはりテユルクの襲撃に會い、
ダルマブポタはエフタル分解後のバグライン
平野を通ったことになった。

カンタラからキタラの子を駆逐して四
八の年代にはすでにそこをおさえたエフタル
は、本據地トハリリスターンからヒンドウ
クシユの東脈、カラコルムの道をおさえ、そ

の地をすべて役屬させて北西インドに至るル
ートを確保していた。五二〇年代に宋雲らが
バグライン平野のエフタル王庭に至りながら、
南下すれば早いはずのルート、パルミヤイン
・カーピシーといったヒンドウクシユ西足
道をとらず、バダフシャーン、サングレチ流
域からチトラール、ウツデイヤーナを経てガ
ンタラのテギンに至ったのは、まさにエフ
タルの北西インド支配のあり方も示したもので
あった。カー、本據とするトハリリスタ

ーンにテュルクが南進し、そににおいてもエ
 フタルの勢力が大いに広がることになって
 みると、ガンダラー、テギンの存立も危くな
 ったのである。ジナグマタが従前頻繁に利用
 されたカラコルム道へと北上せず、西方、カ
 ーピシーへと向ったのは、ナレンドラヤシ
 ヤスのほんの数年のちであつたが、カラコル
 ム道が、テュルクの攻勢に對應せざるをえな
 かつたエフタルにとって、すでに手はずとせ
 ざらぬえない状態だつたことを物語す。一日

保護を失つた交通路がすぐに不通に近い危険
 な状態におち入ることは、ヒンドウイクシユ
 をサラング峠で横断する近代ハイウェイが一
 九六四年一月月に開通するや、從來古くから
 つかわれたゴルバンド流域からシバル峠ま
 えスルハーフ流域に至る幹線路が至るところ
 で通行の困難をきたしたことからあきらかで
 ある。
 前節でみたようにガンダラー佛教はエフタ
 ルの侵入によつてすぐさま打撃を受けたので

はない。また宋雲當時のエフタル「テギン」が
 自ら佛寺を破壊したのでもない。しかし、約
 一〇〇年のあと、玄奘は『大唐西域記』にお
 いてカンダハラを次のように記している。
 なわちその卷ニ健駄邏國の條に、
 健駄邏國。東西は千餘里、南北は八百餘
 里である。東は信度河に臨んでいす。國
 の大都城はフルシヤアラとよび、周圍四
 十餘里である。王族は嗣を絶ち、カレヒ
 シー國に役屬していす。都城の中はあは

はて住む人もすくない。宮城の一隅に千
 餘戸あるばかりである。……異道を敬信
 するひとは多いが、佛教を信ずるものは
 すくない。むかしからここはインドの論
 師がいたところ、那羅延天、無著、世親、
 法救、如意、脅尊者が輩出し、その本生
 處であった。寺の数は千餘所もあるが、
 無残にうちこわれてあははて、くさは生
 いしげりいらさぬしい。いろいなスト
 ヴーパも多くはくずれおちていす。とこ

ろがヒンドゥー教の神祠などは百単位で
かぞえるほどあり、異道のひとたちが雑
居してゐる（章巽校點本四七頁）。

ガンガラー國內の佛事について、ポシユカ
ラーヴァテイの北にあつてケルマトラータへ
法救しが『雜阿毘達磨論』をつくつたといふ
寺はあれにまかせ、宋雲の「白象宮」寺に
ついては一言もふれず、ヒンドゥー神像に對
する尊崇は實に具體的にのべているのである。
すなわちポシユカララーヴァテイ西門外におり

る天祠、ヴァルシヤポラ北東五〇里山頂の大
自在天婦像（マヘーシユヴァの神妃像）、そ
の山麓の大自然天（マヘーシユヴァ）祠な
ど代表的なものである。このよふな佛教の修
調さはガンダラーのみならず、ナガラハラー
においてモストゥーパがこわい、あれてゐる
し、ウツデーヤナでは「蘇婆伐窣堵河を夾
んで」と一千四百の寺があつたが、多くは已
にあらはて、むかひは僧徒が一萬八千いたが、
いまよりやく減少してゐると。タクシヤシ

ラーモト三寶を崇敬する。寺は多いが、僧は
 少なく、寺はあれ方がはなはだしい。シンハ
 プラ城の南にはアシヨリ力造立といふストウ
 ーパがあり、装飾は破損し、靈驗はなお引き
 つづいていいるが、そばの僧坊には僧侶とな
 かった。パルノーツアの寺も荒廢するところ
 が多かった。

このように七世紀三〇年代、ナガラホーラ
 からガンダーラ、ウツディヤ、タクシヤ
 シラーからソルト・レインジのシンハプラに

わたり、佛教は昔の面影を失っていたのであ
 る。五二〇年ころまでは無事だ、六三〇年代
 にこのようなありさまであるとすると、北西
 インドの、かつてのインド佛教のセンターは
 この百年ほどの間に完全にその地位を失墜し
 ていたことになる。ここで注意されるのは、
 ダルマガポタの旅程であろう。かれはタツカ
 デーシヤからカーピシーへと途中のタクシラ
 ヤガンダーラ、ナガラホーラをまわった。顧慮
 することなく急いだのであった。カーピシー

こが目的地であった。タツカデーシヤから
 遊方せんとする佛教僧にとつて、カーピシー
 が少くとも西方向の地ではただひとりの佛教
 の隆盛する國であつたことを、續寫僧傳の
 のかれの傳記は語っている。とすると、ガル
マグアタが通過したころ、すでにタキシウか
 り十がうハ一うにいたる寺院は荒廢に歸して
 いたとみられよう。ガルマグアタのタツカデー
 ーシヤを發はおそくも五七八年である。五七
 〇年代後半にはこのあたりの佛教はもういけ

なかつたのである。このことは、カラコルム
 道からヒンドウークシユ西足道へと、いゝ交通
 路の大變化の時期にかかわつてゐる。カンダ
 ーウを中心とする地域の佛教の低迷と交通路
 の變化とが密接にむすびつくものである。佛教
 停滞の原因はエフタルの勢力失墜にある。ガ
 ンダーウはエフタル、テギンの占據によつて
 徐々にその富を吸収され、鬼神を祀つて佛教
 を護持しないエフタルにより、佛教の基盤で
 ある僧院生活とそれを支持する經濟力を低下

させていった。もともとインダスを東界とするガンダラーの平野は、東西一〇〇キロ強の中に、ポルシヤポラ、ポシユカラীগアティグアルシアポラ、ウダバーインダポラと四つもの城市の存立を許すほど豊饒な土地である。それだけ多くの城市、そしてその城市の多さが示す生産力・商業力がガンダラーにはあった。あったからこそエフタルも、キダラーもあるいはクシヤーンもヒンドウクシユの北からここを掌握すべく南下し、インドの富が

北上する出口でもあるガンダラーをおさえたのである。これは相つぐ山陰の遊牧國家にあっておさだまりのパーティーであった。ホグドゥオオラー北側の遊牧國家が山の南トルファンをおさえ、伊吾をおさえ、さらにはひろくカラシヤール、キジルをおさえた状況と同類のパーティーである。クシヤーンヤキダラーの場合と大いにちがったのは、エフタルが佛教を信奉しなかつたことである。富は吸い上げられるばかりで還元水なかつた。それでもなお

エフタル勢力が隆盛であった五〇年代から五二〇年代まではまだ従来とかわりなかったが、エフタル分解のきざしとともに、徐々に疲弊しつゝあったガンダラは一擧手に昔日の面影を失つていった。五五〇年代のなかばかり本據地トハリスターンの中で外壓をこらへ、動搖しはじめると、まずカラコルム道が手いすになり、ガンダラのテギンとの通路が不通になった。ガンダラの商業經濟は、ダルマガブタ傳にうかがえよう。東南の

タツカデーションヤへ移り、またカーピシーへうつつていったのである。

第六節 佛鉢の消失

ガンダーラがインド佛教の中心地となったとき、本地垂迹の考えとともに多くの本生處がつくられ、青石の「四天王奉鉢」の佛鉢がつくられ、佛法不滅の象徴として護持された。しかし、六世紀五〇年代後半から七〇年代にいたって、エフタル勢力の退潮と占據による疲弊との結果、ガンダーラ社会秩序が混乱すると、佛教も停滞を余儀なくさされていった。

従来交通路上インドの門口であったガンダーラはその地位をいちぢるしく低下させ、カーピシーあるいは東南のタツカデーションヤにゆずっていくことになった。ガルマグプタ傳にみたとおりである。このようなガンダーラ全體の不調は、佛法の基軸であった佛鉢の隕滅をもよほしたのである。玄奘は「大唐西域記」に健駄邏國の總記の末尾において、「王城のなか、東北にともある建物の土臺が残っている。その水はむかし佛鉢をのせていた寶臺のあった

ところだ」と記し、
 如來涅槃に入ったのち、
 鉢はこの國に流轉し、
 數百年しきたりいおう
 供養したか、諸國を流轉して、
 いま波刺斯にあ
 る」とのべたのである。
 (王城の東北有一故基。
 昔佛鉢之寶臺也。如來涅槃之後。
 鉢流此國。經數百年。式遵供養。
 流轉諸國。在波刺斯)。
 玄奘はいつたこともないサーサーン朝パルシ
 アの王宮に佛鉢があるとして、
 (波刺斯國。周數萬里。國大都城號蘇刺薩儻那。
 ……釋迦佛鉢在此王宮)。
 荒唐無稽である。カンガラー

と、ないしカンガラー佛教とサーサーン王家
 とをとりつなぐなにもものも歴史上存在しない
 し、カンガラーはた小かによって征服された
 ため荒廢したのではないから、佛鉢が戦利品
 としてサーサーン王家へもたらされたとい
 うことも考えがたいからである。
 一か、ここに佛鉢殞滅の原因をカンガ
 ラの國主ミヒラクラーによる
 破碎に歸せしめた
 説話がある。蓮華面經
 二卷にはほかにな
 い。ミヒラクラー(寐岐曷羅俱邏)の本生名を

名にとつたこの經典は、上下二卷より成り、涅槃間近かのシヤカが阿難に佛法付囑の因縁をとり形式をとつてゐる。まづ(1)如來の三十二相、そのほか殊に妙なる相を觀想すべきこと、そして(2)滅後に身をけしつぶのじごく碎き、そいつてびきた碎身舍利を龍・夜叉の各世界、殊り全部をジヤンブドワイパーに分布せしむること、さらに(3)佛法を自ら三十三天、娑伽羅龍王宮、徳叉迦龍王宮、黑色龍王宮、夜叉世界にそつち小付囑してまわすことを説

く。さらには未來際に正法が亂れるありさまを具體的に阿難に示し、かゝるに正法護持の心をいだかゝむるのである。ところが、下巻において突如としてミヒラウラウ本生譚が付説される。まづガンダーラの樂土をのべて、

我涅槃の後、其の國熾盛にして安隱豊樂

である。須弥山の四方にある四大洲のうち

北方の大洲ウツタラクルのじときであ

り。佛法はさかんで、修行の最高段階に

ある羅漢が多く住み、また計り知れない

ほど多くの如來の弟子がいた。このジャ
 ングドグイパにいた羅漢はあたかもトウ
 シク天にいたごとくである。……もろも
 ろの羅漢はひとところに集まって如來の
 説いた十二部經に廣く論釋をつくって
 いる。そのガンガラーはあたかもインド
 ラがいたトライヤストリムシヤの中の歡
 喜園のようであり、清涼なアサダアタ
 タ池のようである。またピンドラハバ
 ラドグアージュヤラもみなガンガラーに住

みたいと願っている。……如來の説く法
 はみなことごとく撰集して廣く行われ、
 流布している。大正一、二、一〇七五
 ころ。……
 いかにも經典らしい誇大なところがある
 う。……
 すぐれて佛法がさかんであつたかは判る。と
 ころが、この經典はついで五天子減度ののち
 にポラナ外道の弟子たる蓮華面、聰明で智
 慧があり、天文に通じ、色は金色のようにか

かやく蓮華面を登場させ、佛法破壊の誓願をおこしせられたのである。阿羅漢を供養したために世世端正の身をうけ、ついに最後に身は國王の家にうまわれ、みづから國王となり、ミヒラクラヒと名づけて鉢を破碎し、もとの悪願を達成するのだといふ。ために世は混濁のきわみに達するへ大正一三、一〇七五C。

山田龍城博士はミヒラクラヒの現實の破佛といふ歴史事實をいちはやく經典化し、中國に當時流

行した法滅盡思潮のうらづけにしたと解さ小たのである。⁽⁴⁷⁾ 一かゝり、山田龍城博士の子息山田明爾氏は、ミヒラクラヒの破佛とその周辺を發表し、インド碑銘等ミヒラクラヒ関係資料と詳細に検討した結果、ミヒラクラヒの名があらわれるインド碑銘のフリーナと、宋雲らの行歴記事にみえたるエフタルとは別個の勢力であり、中インド、マールワールからカシユミールに及んだのがフリーナであり、カンガールからパンジヤードに及んだのがエフタルであるとした⁽⁴⁸⁾。

ーたがって、フリーナ勢力にはミヒラクラが存在
 するが、宋雲が會見したエフタルとミヒラク
 ラとする證據は皆無である。宋雲らが正光元
 年（五二〇）にカンガラーに至る三年前から
 エフタル、テギンはジェルム邊でカシユミ
 ラと紛争し、またこのテギンが破佛をした證
 左かないこと、破佛は五二〇年までに
 徐々に進行したこと、さきにのべたとおりで
 ある。山田明爾氏の見解に立つと、フリーナの
 ミヒラクラをカンガラー破佛の主人公と考へ

了ニともまたできないのである。六世紀は北
 インド、中インドともフリーナ、エフタルなど
 により社會混亂があった。それによる佛教停
 廢もカンガラーではおこった。佛教側はミヒ
 ラクラと、一時の中インド霸王の暴逆を利
 用し、これを佛教平珍の原因にとりあげ、ミ
 ヒラクラ本生譚をでっち上げ、法滅畫思潮の
 いううちをおこなったのである。
 日蓮華面經を譯出したといはナレインド
 ラヤシヤスといふことに諸經錄とも一致した

見解をとっている。ナレインドラヤシヤスは
 さきへのべたごとく、五一七年に生まれ、五
 三三年に出家、五三七年に受具、五四一年か
 ら五五二年くらいまでインド遍歴、五五二年
 にはウツナイヤーナを去登して北上したので
 ある。一方、山田明爾氏によると、^{ミヒラクラは}中インド、
 マルワ時代が五一七年から五三二、三年ま
 で、ちよほどナレインドラヤシヤスが出家
 するころまでに當る。ミヒラクラはその頃、
 カーシユミーラに入り、五五の年ころまで

にいたといふ。ナレインドラヤシヤスはウ
 ツナイヤーナにおいてインド巡歴の旅にのぼつ
 たのであるから、北インドのエフタルや中イ
 ンドのフリーナによる社会混亂を熟知していた。
 一か、五五二年ころに北方へ旅立ったナレ
 インドラヤシヤスが、ミヒラクラを主人公に
 した『蓮華面經』なる經典をすでにたづさへ
 ていたとは、といてい考えら小ない。完全に
 同時代の現實の人間を主人公とした原典が、
 ナレインドラヤシヤス出發にさきだつてすが

に存在したとは考えがたいのである。
 ナレインドラヤシヤスとしてフーナのミヒラ
 ウラの非道暴逆、北中インドの社会状況まで
 は十分承知していた。そのようなことが鄴都
 に五五六年に入ったのである。中国でも當時
 社会混乱へとくに華北における北魏分裂以降
 不安は、慧思などの佛教徒をしていち早
 く反應せしめ、また末法という考え方をうけ
 とめる積極的な態勢が中国ですでに準備さし
 こんだといふ。川勝義雄氏は理解さした。(49) 正像末

の諸を三時思想としてはつきり用いた最初
 の經典である。大乗同性經四卷が譯さした
 のが、北周天和五年(五七〇)。譯者はジナ
 ヤシヤスである。點も注目さしたところである。
 「法滅盡關係の經典のすべてを吸収し、その
 うちに時代の世相をとり入れ、かくするこ
 によって正像末の思想を集大成した(50) ところ
 の大集經四の一部、月藏分が北齊天統二年
 (五五六)にナレインドラヤシヤスによって
 譯出さした。これは中国における法滅盡思

潮によりどころとなった。

—か—注意したいのは、蓮華面經にが齊に
 おける譯出ではなく、隋、開皇四年（五八四）
 になつてからの譯出だといふ點である。蓮
 華面經の下卷は、ミヒラクウによつて破壊さ
 れた佛鉢が再びもとどおりに修復されて、本
 道が再びかがやくとして全卷をおえり。破鉢
 は一旦北方へ移り、そこで大いに供養されて
 のち、波羅鉢多國に向う。北方と同じく大い
 に供養をうけ、佛力により、また衆生の善根

の感應によつて自然にもとにもどり、まゑと
 何ら異ならない形狀に復する。もとどおりと
 なつた佛鉢は、娑伽羅龍王宮、四天王宮、三
 十三天宮、焰摩天、兜率陀天、化樂天へと順
 次めぐり、娑伽羅龍王宮にかえつてくる。そ
 こはジャンブドグリーパその他十方にある佛
 鉢や佛舍利がみなあつていふ。鉢は舍利
 とともにこの地から金剛際のところにある、
 彌勒佛所に至り、五色の光明を發する。彌勒
 ・三藐三佛陀は正めに四寶塔をたて、中に鉢

と舍利がまつり水るといふのであるへ大正一
 二、一〇七六a一〇七七b。破鉢が北方
 のどこへ行つたのかは判じがたいが、次の波
 羅鉢多は現實の地方である。日大唐西域記
 卷一一の鉢伐多である。殷賑をきわめ、寺も
 一〇ヶ所ほどあり、僧徒は一〇〇〇人ほどい
 た。その寺のうち四つにはアシヨールカ王が建
 したのだといふストウパーもあつた。ヒンド
 ウー教もジャイナー教もさかんで神祠や寺もあ
 つた。タツカデーシヤを宗主國として仰いで

いた。タツカデーシヤはガンダラーの凋落に
 かわつて遠距離貿易の中心としてあらたに北
 インドで重きを如えていつたところ。パルヴ
 アタはタツカデーシヤとともに榮えたのであ
 る。カニンハムはカシユミール南部のジヤ
 ムーに比定したが、正鶴をえてい⁽⁵¹⁾る。parvata
 [skt.]の意からは當然そのあたりである。玄
 奘のインドにおける就學の主たるところは、
 ナーランダであり、カシユミールを以ては
 じまるが、パルヴアタでも正量部の根本阿毘

達摩などの興ずんで二年停留したほどの土地で
 ある。⁽⁵²⁾このようなパルヴァで一旦こわれた
 佛鉢が修復された事實を、蓮華面經に記すべ
 しいとするとして、この經典はガンダーラの佛
 教が停廢したのちについて情報を提供して
 いることになる。そして波羅鉢多といっ
 た從來文獻にまづあらわしたこなかつたよう
 な地域名をわざわざ使用するにと自體、佛鉢
 の運命の實際をあらわしたものと、この經典
 をみてよいのである。

とすると、ナレインドラヤシヤスとの經
 典なり、そこにあらわした事實とはどのよう
 にかかわるのであるうか。ガンダーラ佛教の
 停廢が決定的になったのも、さきにみたよう
 にダルマガプタ出發前後とみる立場に立てば、
 佛鉢のその後などナレインドラヤシヤスがウ
 ツデーヤ十出發の五五二年以後の事件であ
 る。そこまでの情報をナレインドラヤシヤス
 がもっていたとはとても考えられないことであ
 る。ここでもともにもどってその譯出年次に

住目一よう。そのはさきに諸経録に開皇四年
 つ五八四とみえていと記しておいた。だ
 が、四年とはっきり記すのは、開皇一七年撰
 の口歴代三寶記と、そして唐代の口大唐内典
 録と、口開元録とであり、開皇一四年の口法
 經録とや仁壽二年の口彥棕録とは、前者は
 録さず、後者はたゞ「大隋開皇年耶舍譯」と
 するばかりである。譯出年次にもうひとつす
 っきりとしないものがあるのである。佛鉢の
 そのごのあり方がこの經典の譯者とされるす

レインドラヤシヤスの關知しない時代に屬す
 るなら、この經典のその部、分はナレインドラ
 ヤシヤスが作製したのではなく、か小よりの
 ちに中國に至り、ガンガラ佛教廢絶のあり
 さまと佛鉢のありかを知った者が作製した
 とみる方が自然であろう。その資格をもった
 人は、ダルマガプタにほかならない。ナレ
 インドラヤシヤスは開皇年代に口大集經と日藏
 分のほか、口蓮華面經とをも含めて八部と譯
 了して開皇九年（五八九）に死んだ。翌年

ガルマグアタは隋に至つてい子。かれはカン
 ターラにかわつて浮上してきたタツカデーシ
 ヤカリカーピシーへと直行し、カンターラ佛
 教停廢後をやってきた人である。蓮華面經
 凸の構成をみると、ほぼ上卷だけで法滅盡を
 説く經典としての體裁をそなえていゝ。いか
 にもミヒラクラ本生譚と佛鉢破壊譚とは上卷
 から獨立した内容である。そのうえニ水が齊
 譯でなく隋譯であるから、一層上卷・下卷と
 が獨立の作製たゞ零團氣もつよめる。おそら

くナレインドラヤシヤスは上卷だけを完成し
 たものとしておいた。經の名稱も別にあつた
 かもし小ぬ。その後ガルマグアタはミヒラク
 ラ本生と佛鉢破壊譚をつくつてその水を蓮
 華面經凸とし、のちナレインドラヤシヤスの
 分とガルマグアタの分とが一本とさ小るに至
 ったと考へる。

第七節

ナールランダーとヴァラビー

一七世紀はじめに編纂されたターラナリタ
 のコインド佛教史には、アシヨールカがそこ
 にあったシヤリリポトラ「チヤイテイア」に布
 施し、僧院も建立した場所としてナールランダ
 ーが登場する。降ってナールガルジュナがここ
 で學び、高僧であったこと、またナールガルジ
 ュナと同時代のグラフマンたスーヴィシユ
 フが一〇八の僧院も建てて大小乗教の衰退と

防いだといふ。四世紀にはマードヤミカ派の
 アールヤデーヴァもナールランダーに關係し、
 五世紀にアサンガが晩年をすこし、ヴァスバ
 ンドゥもそれをうけついでここに居住したと
 してゐる⁽⁵³⁾。以上の記事はおそらくナールランダ
 ーがマハラーガイハいらとして擴充されたの
 ち、次第に附加増廣されてきた傳承にすぎな
 いであらう。なぜならば、發掘の成果も歴史
 の文獻もこれを正確にうらづけるどころか、
 遂にナールランダーが佛教教學ないしインド學

術の中心になるのは随分おくれることもしめていりからである。

まづ法顯傳にうかがうことが出来る。麻耆竭提國の巴連弗邑、すなわちパータリポトウの南三里にあるアシヨールカ造立のストゥーパ邊にはなはた嚴麗なるマハーヤーサッサンガラーマおよび小乘寺があることを法顯は言っている。そこは僧衆六七百あり、威儀庠序は觀るべきで、四方の高徳の沙門、學問のひとが義理を求めんとすれば、みなこの寺に

もうで、またそこに婆羅門の子師、文殊師利と名づける人がいて、國內の大徳沙門、もうその大乗の比丘がみな宗仰する人がいた。またこのあたりには近接して、アシヨールカ王がつくった八萬四千塔のうり、最初に作った大塔があった。城南三里餘と法顯はしるすから、ちよいど上の兩寺の附近である。この塔の前には、佛脚迹もあり、また一つの石柱もあつたし、塔の北にややなほアシヨールカ王の泥梨城があり、城中に獅子をおいた石

柱があつたと書いてある。これより西南のかた
 行くこと一ヨリジャナに、⁷那羅聚落^レがあ
 る。ナ一ランダーに擬せられる聚落である。
 この聚落はシヤ一リアポトラの本生の村で、シ
 ヤ一リアポトラはこの村に歸つて示寂した。そ
 こにシヤ一リアポトラがあつたとい⁽⁵⁴⁾。
 タ一ラナ一タが言^レシヤ一リアポトラ^ハチヤ
 イテ一ヤヒカ、アシヨ一カが建立した僧院と
 かを法顯は記さないが、⁸それらはシヤ一リアポ
 トラ塔附近にあつたものかもしれない。いず

かにせよ、⁷那羅聚落^レは、シヤ一リアポトラ
 とのつながりのうちに固定できよう。A¹ゴ
 一シユは言^レ、⁷マハースダツサナジャ一タ
 カ^レには、⁷ラ一ジヤグリハ近邊の邑として、⁷
 ナ一ラ^レをあげ、⁸そ^レがシヤ一リアポトラ出世
 の地であることと言^レい、⁷マハ一ヴァスト^ラ
^レには、⁷ラ一ジヤグリハから半ヨ一ジヤナ^レ
 地にあるナ一ランダーグラ一マがシヤ一リアポ
 トラ生誕の地としてみえる⁽⁵⁵⁾。ゴ一シユは⁷
 ナ一ラ^レ(⁷那羅)こそがナ一ランダーである

と、法顯の記述にはシャリポータ塔のほかに何らほかばかりいモニユメントがみえな
 いから、ナランガリの佛教地としての興隆
 は法顯以後であるともみている。スクマール
 ダットものちにナランガリが佛陀の行動と
 むすびついて聖地となったことを認めつつも
 佛教の中心地としての出現は、グプタ以後で
 あるとい(56)これに對してH.D.サンカリ
 了は、法顯はナランガリを含むすべての國
 全般にわたって簡略な記載しかしていないか

り、ナランガリについてほとんど記してい
 ないことを以てそのいまだ興起していない證
 據にはならぬとい(57)
 足立喜六は、法顯の「那羅聚落」とナラ
 ンガリ寺とは無關係だとみる立場である。(58)
 大唐西域記の卷九は、舍利弗本生涅槃の地を
 迦羅臂拏迦 Kalāpīṅka 村とよび、因陀羅執羅婁
 訶 Indraśailaguhā なる山の西方三〇餘里による
 とす。法顯は「那羅聚落」と舍利弗本生村
 として、いさから、迦羅臂拏迦村と那羅聚落と

は同じものである。那爛陀寺と迦羅臂拏迦村とは同大唐西域記とを檢するが、別處であるから、一那羅聚落と一那爛陀寺とはかわりがないといふことになる。ここが注意したといふのは、法顯のパータリポトラとそれより南方に関する記述である。サンカリアは法顯の記述が簡略である點やナーランダーのマハーウイハというところの記述がそこにみられないとする點をあげたけれども、法顯のパータリポトラ以南の記述は、城南三里におい

て比較的詳細である。他に若干を記したところがある。パータリポトラとラージャグリハなレグリドラクラーとの間に關する法顯の記述をみると、パータリポトラ城南三里のアシヨカ王塔他の佛寺關係記述はこのあたりではもっともくわしい。そのようなくわしい記述から大ナーランダーが脱落して、いまはかえってナーランダーが法顯のころまだまだ後世のような盛況を呈して、いなかたことを示唆する。となるとナーランダーがマハー

ヲハ一ラとしての體裁をととのえだしたの
 はいつか。成立事情にっいてのもくわし
 いのは玄奘関係の文獻である。『慈恩傳』に
 佛涅槃ののち、この國の先王シヤクラ
 テイテイヤ（唐言は帝日である）は佛を
 おしだいしあげてこの伽藍を造つた。
 王が崩御したあと、その子のブツダゴ
 タ王（唐言は覺護である）は帝王の大業
 をうけつぎ、その南にまた伽藍を造つた。
 子のタタীগタ王（唐言は如來である）

のときに、ついで東の方にまた伽藍を造
 った。子のパールテイテイヤ（唐言は
 幼日である）のとき、ついで東北の方に
 また伽藍を建てた。のちこの支那國から
 聖僧が行き、この寺に供侍してゐるのを
 パーラーテイテイヤ王は見て、心に歡喜
 とまじ、位を捨てて出家した。パール
 テイテイヤ子のブアジュラ（唐言は金
 剛である）が位をついで、北の方に伽藍を
 また建てた。そのうち中インドの王はそ

のそばにまた伽藍を造った。このように
 して六人の帝王があいつけてつおつおと
 そのわかれ造營（造營）といつた。煉瓦でもつて
 その外側をつみあげ、かこつてひとつの
 寺とし、それら全体を通じて門をふとつ
 づくつた。庭はそのわかれ別にあり、八院
 をこの煉瓦壁の中に分かつている。……
 中の建物は佛院も僧坊もな四階建てで
 ある。……インドの寺は敷えは限りな
 いが、壮麗さ崇高さではこのナールンダ

一寺が最高である（佛涅槃後。此國先王
 鑠迦羅阿迭多唐言敬戀佛故。造此伽藍。
 王崩後。其子佛陀毘多王唐言纂承鴻業。
 次南又造伽藍。至子怛他揭多王唐言。次
 東又造伽藍。至子婆羅阿迭多唐言。次東
 北又建伽藍。後見聖僧從此支那國往赴其
 供。心生歡喜。捨位出家。其子伐闍羅金唐言
 剛嗣位。次北又建伽藍。其後中印度王於
 側又造伽藍。如是六帝相承。各加營造。
 又以甄壘其外。合為一寺。都建一門。庭

存別開。中分八院。……諸院僧室皆四重
 重閣。……印度伽藍。數乃千萬。壯麗崇
 高。此為其極。大正五〇、二三七b)。
 とあり、口大唐西域記口卷九にも、口佛涅槃
 の口ち未だ久しかりずして此國の先王鑠迦羅
 阿迭多が、この伽藍を建てた。その子の佛陀毘
 多王もついでこの南に伽藍を建て、咀他揭多
 毘多王はついでこの東に伽藍を建てた。婆羅
 阿迭多王が位をつくとこの東北に伽藍を建て
 た。その王の子伐闍羅が位をついたのち、信

心貞固でまたこの西に伽藍を建立し、その後
 に中インドの王はこの北にまた大伽藍を建て
 た。そので周垣をつくって一門をあけた。鑠
 迦羅阿迭多がたてた伽藍には今佛像を安置し
 ている。L (章聖校點本二一六一七一七頁要約)
 兩書とも鑠迦羅阿迭多王がナランダー寺の
 もとをつくったひととす。義浄も、口大覺
 寺の東北のかた行くこと七驛ばかりにして耶
 爛院寺に至る。……乃ち是、古の王、室利鑠
 羯羅跋底、北天の苾芻たじ曷羅社槃「社」の為

に造りし所なり。レヘ大正五一、五〇とし、
 シュリールンシヤクラーティヤが北インド
 のビクシユ、ラージヤヴァンシヤのため造
 ったといひ、フヅリて、此の寺の初基、わす
 かに方堵を餘す。其の後、代代の國王、苗裔
 相承け、造製は宏壯にして、則ち賸部洲中
 當今以て如うる無きなり。レヘ此寺初基纔餘方
 堵。其後代國王。苗裔相承。造製宏壯。則賸
 部洲中當今無以如也。レヘ大正五一、五〇と
 のベ、玄奘は二の寺の初基の状態を言わな

い。シヤクラーティヤの堂に佛像をまつ
 ったといはれ、いはかりであるが、義淨は、方
 堵を殘すばかりだといふ。いむれに、ともシ
 ヤクラーティヤには、子と孫と相
 つないで王家が増廣し、宏大化していったあ
 りさまが判る。グプタ朝の帝王は多様な名稱
 で知られ、シヤクラーティヤが、マ
 ヘーンドラーティヤの別名をもつグプタ
 第四代のクマーラグプタに相當することは、言
 じまでもない。

佛陀述多 *Buddhagupta* は、グプタ紀元一六五
 年（四八四）の年紀をもつエーラン石柱碑文
 により、碑文がゴッゴゴプタの治世代に當る
 ことがいられる。治世は四九四、四九五年と考
 えられている。⁽⁵⁹⁾ ゴプタ朝は第五代スカンダカ
 プタを最後に分裂し、以後の王統は不明な部
 分が多い。タターガタゴプタなる王はゴプタ
 王統譜には全くしるわれないが、パーラーティ
 ティヤはナラシンハゴプタの別名であること
 が判っている。グアジユラにいても判らな

い。したがって玄奘の言いとおりにはゴプタ王
 統が繼承されていったかといかは、碑文その
 他に明證を見出すことができないのである。
 一かし王名の同定はともかくとして、ナーラ
 ンダはゴプタ朝第四代クマラゴプタの治
 世においてこの王の布施によつて一院が興え
 られて基礎がたき、よりどころができたこと
 はたしかである。クマラゴプタに關してし
 りわすものと早い年紀は四一五年であり、
 王の崩御は四五五年であるから、⁽⁶⁰⁾ 法顯が四〇

0年代の最初の10年間、ナールンギ
ーにっつて無言であったりも当然のこととい
わねばならない。

ナールンギーは五世紀(の第三)四半期にやっ
と僧院が建立され、五世紀から六世紀にかけ
て僧院を次第にふやし、したがって僧衆の鳩
集をみていったと推測することが出来る。こ
慈恩傳や大唐西域記によると、引きつ
づく五王の施與があつたが、中インドの王
の布施によつて全體をとりかこむ焼き煉瓦積

みの垣壁がつくられ、玄奘往訪時代の景觀と
なつたのである。ナールンギーが、玄奘の言
うごとく、大乘を學び、十八部をも兼ね、俗
典ヴェーダ等の書、因明、聲明から醫方術數
に至るまで研習し、義淨の言うようなマハ
ーガイハラー、室利那爛陀莫訶毘訶羅(Srinagar)
Mahavihara (義淨は吉祥神龍大住處と譯す)
とよばれ、に小さわしい佛敎學なインド
學術のセンターとなつたのは、次第に僧院敷
をまいて、ついに中インド王により一つの広

大なる寺域をもつに至った時點と相前後したと考へらる。

この中インドの王について高田修氏は「戒日王なるべレトとするが⁽⁶¹⁾、スクマールガン

トのゴトク、マンガソール石柱碑文に記す水

たヤシヨীগアルマンとみるいともい⁽⁶²⁾る。ヤシ

ヨীগアルマンは、この碑文をも含めてマール

ワ地方マンガソール出土の三碑文にみえて

いるにすぎない。そのために従前事迹その他

あきらかな部分のすくない王であり、永續性

に乏しかつた一時の霸王とみられ、その在位

は五三〇一五三五年とみられて⁽⁶³⁾いる。玄奘の

いうところをみても、もし「中インドの王」

が戒日王であるならば、これは玄奘在印時代

の北中インドの強大な支配者であり、「中

インドの王」といつたあいまいな記述を殘さ

ぬはずである。ヤシヨীগアルマンがどのよう

なかわかりえない。たかかわから

ない現在、「中インドの王」の正確な同定を

さしつかえなければならぬ。ヤシヨীগアル

マンであるならばその年代は古世紀前半、或
日王であるならば、かれの即位年と考えられ
ている六〇六年以降であるが、⁽⁶⁴⁾即位当時の戒
日王は東部パンジャブの小王であるから、
ナールンガーに關與するのは版圖を擴張して
いった六二〇年代とみられるよ。

ナールンガーに對して西インドのグアラビ
ーに關する情報は⁽⁶⁵⁾どうか。マイトラカ朝はグ
ハセーナ一五五三一五六九)時代にサウラー
シムトラの東部だけでなく、今日のダワール

カー、すなわちサウラーシムトラの西端まで
勢力を伸張し、さらにマールワール西部までも
進出して、⁽⁶⁵⁾とも繁榮した。この西インドの
王朝の興起は、グプタ朝のスカンダグプタ(一
四五五一四六七)の死後に急速に衰弱したグ
プタ朝にかわって各地で興った、ポストリグ
プタ期の地方獨立國のひとつとして位置づけ
られる。サウラーシムトラのグプタ朝のセー
ンパティ(軍司令)であったバツヤラカは、
四七〇一四八〇年ころに獨立して今のグアラ

に當るヴァラビーを首都としてマイトラカ朝の基をひらいたのである。ついでバツターカの子孫、ドゥルヴァセーナ一世（五一九一）の姪、ドゥツグーの名をもつ僧院が碑銘にあらわれてくる。この僧院は、ドゥツグーのために、ドゥルヴァセーナ一世が五二五年に建設したものである。僧院は次第にこれを中核として施與され、ついにドゥツグー、ヴァーハ、マンダラとよばれる廣大な僧院群が形成されることになった。これ

は、ナランダーの成立と同じく、支配者の入水とともに次第にその偉容をととのえ整備されていったのであり、マハーヴァーハラと言われるに至ったことを示すものである。マイトラカ朝の布施を示した銅板銘文書は現在まで二三個にものぼるといふ。

ナランダーもヴァラビーもともに五世紀末ないし五世紀中ごろを遡ってその隆盛を誇るものではない。右の年代ごろにやっとなり、六世紀前半に次第

に體裁もとのえ、六世紀後半から七世紀は
 じめにかけマハーヴィハラとしてインド
 學術のニ大中心になつていつたことがい
 へよう。インド歴遊中の玄奘はヴァラホ
 行つたように、大唐西域記の卷一にその
 状況と記してゐる。しかし、もつとも得意と
 すべき佛教に関する記述は、國全體の記述と
 もどもいちぢるしく限定されてゐる。いわく
 伽藍は百所あまり、僧徒は千人あまり
 といふ。多く小乘正量部の法教を學んでい

つ。天祠は百を數え、異道も實に多い。
 如來は在世によくここに遊化なつたの
 で、アシヨールカ王は、佛がとどまつた場
 所にみな標旗をたて、ストウパーを建立
 した。過去三佛の座所や經行し、説法し
 たところは、あちこちに遺迹が入りまじ
 つてゐる。……國城のすぐ近くに大伽藍
 があり、アーカーヤア羅漢が建立した
 ところであつた。またグナマティヤサーラ
 アティなどの高僧がヤドリ、論をつく

たとゝろ。みなさかんに梳布していゝ。
 (伽藍百餘所。僧徒六千餘人。多學小乘
 正量部法。天祠數百。異道實多。如來在
 世屢遊此國。故無憂王於佛所止。皆樹旌
 表。建窣堵波。過去三佛坐及經行說法之
 處。遺迹相聞。……去城不遠。有大伽藍
 阿折羅阿羅漢之所建立。德慧賢慧菩薩之
 所遊止。於中制論。並盛流布。)
 と。このよゝな表現はとりたててヴァラヒー
 の佛教の盛んなさまといつていゝわけではな

い。ありきたりの表現である。玄奘が重視し
 たカシユミラーヤマガダの比ではない。一か
 もグナマテイヤサラーマテイにふれ、ヴァラ
 ヒー出身といわれ、ステイラーマテイに一言も
 ない。玄奘が長安出發以前に就學した師資の
 系統を檢討すると、パラマルタが傳えた教
 學の内容に肉迫せんとした形迹がある。パラ
 マールタヒステイラーマテイとの思想は類似性
 高く、兩者の間に何らかのつながりがあつた
 ようである。⁽⁶⁶⁾ となると一層ヴァラヒーの記述

があまりに一般的で、ステイラマテイに示さ
 ないのは不思議である。既にナランダーで
 學んだのちに『大唐西域記』は作成されたの
 ばかりナランダーにくわしいことは當然で
 はあろう。しかしこのようなヴァービーに關
 する記述の少なさは何か。當時凋落していた
 のであらうか。しかし、か小自身が「居人般
 盛・家室富饒。積財百億者。乃有百餘室矣。
 遠方奇貨。多聚其國。」と記す隆盛である。
 の隆盛に佛教も支持さ小ていたのである。義

淨は、『南海寄歸内法傳』卷四西方學法に、
 「……」かろのち、函丈の傳授三二年を経た
 了、多く那爛陀寺（中天なり）に在り、或は
 跋臘毘國（西天なり）に居る。……斯の兩處、
 事、金馬、石渠、龍門、闕里に等しく、英彦
 雲聚し、是非を商榷すと言ふごとくである
 玄奘によつてヴァービーの無視は、か小がナ
 ランダーで學んだがルマパーラの唯識を唯一
 のものとする立場によつていよいよ。長安出發
 以前の玄奘は隔たつていよつとほ言え、ステイ

ラマテイ、パラマール、夕教學に依つていたと
 すると、そんなかれがインドに行くに際し、
 ヴアラビーをめぐらず、ナランダーへと急
 行したのである。その轉換はどこに原因があ
 るのであろうか。その水は、玄奘出發時代の中
 國にインド佛教地圖が正確に傳わつていなか
 ったからである。從前のベトナムのように、六
 世紀七〇年代までに名高い大乘佛教索源地だ
 ったガンダーラは凋落し、その後インド佛教
 地圖は完全にぬりかえられてしまつたのであ

る。ガンダーラにかわつて興起したのは、中
 インドのナランダーであり、西インドのヴ
 ラビーであったこと、既に見たとおりであ
 る。この新佛教地圖は、北西インドの混亂の
 さなかに中國へ渡つたナレインドラヤシヤス
 とかジナグアタたち、混亂の一應さだまつた
 と思われ、ころに至止したガルマガタたち
 が傳えたのではない。かれらは混亂のありさ
 まにもとづいて經典を作成すると、この時期に
 あつたのであり、ガンダーラにかわつて次に

本現する佛教のセンターがどこであるか、
 北を伝えるには時期がやや早すぎたのである。
 とくにガルマグプタなどは、ヴァラヒをそ
 の西方に包攝する羅羅國に生まれながら、そ
 こで出家せず、ナランダーに近いカーニヤ
 クブジャで出家し、しかもナランダーへは
 いかず、たゞは師僧が招請され、そに随従
 したのでとはいえ、ナランダーと及野のタ
 ヅカデーシヤへ行き、そこでとまり、タツ
 カデーシヤ同様新興の、インドからみれば西

の邊疆カーピシーなどへ行つてしまつたので
 ある。そのような零團氣かりみても、ナラ
 ンダーやヴァラヒが真にインド各地の学僧
 を誘致するほどの大センターになつたのは、
 七世紀になつてからだったのである。玄奘
 がナランダーを目撃した直接の情報源は、
 ダルマグプタのうちはいめてインドから長安
 へはいつたプラバリーカラミトラなのであるが、
 これについては既に私説を問うたことがある
 ので、ここではふれない。⁽⁶⁷⁾ いずれにしても、

六世紀五〇年代から七〇年代にわたるガンガ
 ーラの社会・佛教全般の停顿は、ひとりガン
 ダーラの歴史における大事件ではない。この
 時期を境にして、あらたにインド内ではナ
 ランダーとヴァラホーニの地域に佛
 教ないしインド學術の中心があらわれること
 になり、そこではシユリーナーランダーマハ
 ーヴァイハラーと、わかれ、ドウツダーヴァイハ
 ラマンガラといわれるごとき、多くの僧院・
 佛殿・塔をひとつの廣大な寺域の中につつま

こむ、獨特の伽藍形式を生むに至っている。
 インド外では、ガンダーラ低落とともに歴史
 に登場したヒンドゥークシユ西足道上に、遠
 距離貿易の據點としてカーピシー、パルミヤ
 ーンを繁榮させることになった。その繁榮と
 支配者の支持のもとに佛教・ヒンドゥー教相
 方がガンダーラにかわって一時に大きくなっ
 ていったのである。